
とある魔術の禁書目録PS

水無雲夜斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の禁書目録PS

【Nコード】

N4837U

【作者名】

水無雲夜斗

【あらすじ】

まだ夏の暑さが残る季節、9月。上条当麻と一方通行はそれぞれの日常を過ごしていた。そんな日常の中で2人はそれぞれ1人の少女に出会う。彼女達に出会うことによって2人の日常は大きく変わることになる。

幸運と不幸の高校生（前書き）

はじめまして、今回始めて小説を投稿させていただきました『水無^{みな}雲夜斗^{くもやと}』です。

今回この小説は『とある魔術の禁書目録』のキャラと世界観をお借りして練習のつもりで書いていたのですが世間から見たら僕の小説ってどうなのだろうか、と思ううpしてみました。（本当は厨二病が抑えられずつい・・・^^;）

初めて書く小説、初めて使うサイト、初めての投稿と初めてだらけで至らぬ点はあるかと思いますが温かい目で見守ってやってください
いw

では、みなさんのご感想、ご意見、アドバイス、批判（彘？）等々をお待ちしております

幸運と不幸の高校生

夏休みが明け、まだ少し夏の名残りである暑さが残っている季節、9月。

ツンツン頭の少年『上条当麻^{かみじょうとつしま}』は学生の職場である学校にいた。

『学校』といえば勉強を連想する人がほとんどだが、中には体育祭、文化祭、他にもいろいろなものも連想する人も多くいるだろう。

だが、この教室の風景を連想できる者は果たして何人いることだろうか？

「「「最初はグー！ ジャンケンポン！！！」「」」

教室の至るところで火花が飛び散っている。負けた者は地面に膝をついて涙を流し、勝った者は勝利の雄叫びを上げたり負けた者を見下している者までいる。

つまり、ジャンケン大会だ。

どうしてこうなったのか、それを説明するためには5分という時間を遡る必要があるだろう。

5分前。

午後14時20分、ある1人の教師の一言からそれは始まった。

「では、今からボランティアのメンバーを決めたいと思います、ボランティアの内容は第7学区全体のゴミ拾いになつていたのでみんなメンバーにならないよう全力でジャンケンに勝ちやがってくださいねー」

と満面笑顔で言う担任教師『月詠小萌^{つきよみこもえ}』。相変わらず背が低く、その姿はどこからどう見ても赤いランドセルを背負っていそうな小学生にしか見えない。

だが、そんな見た目だけで教師の威厳など塵すら残らないはずの女性の一言が、時にこの教室に波乱を巻き起こす。

今回の事件はその一例だ。

クラスメイトは鬼のような形相でジャンケンを行い、他のクラスメイトをつき落とし、なんとしてでも自分が生き残るために必死である。

当然だ。9月といっても夏の名残りがまだまだ残っているため、室外はちよつと動けば汗をダラダラと流せるほどの気温となっており、そんな中でボランテアなどという正当な報酬など出るわけもない活動を行って喜ぶ人間などごく少数だ。少なくとも今教室で血眼になってジャンケンをしているやつらの中にはいないだろう。

上条当麻も、その中の1人だ。

「最初はグー！ ジャンケンポン！！」
気合いを十分に込めた音頭が轟き渡る。

だが、結果は敗北。しかも5人いたメンバーの内、負けたのは上条1人だけ。

「ちよつと待て、あまりにも理不尽すぎるだろ、お前ら何か仕組んでるんじゃないのか!？」

と、抗議してみるが勝ったメンバーは「いや、やってねーし、てか上条だし」「うん、上条なら仕方ないよな」「むしろ負けない上条は上条じゃないっていうかさ」「勝ったら逆に仕組んでるんじゃないかと疑われるくらいだよな」とそれぞれ納得し合っている。

「くつ、理不尽だ・・・」

納得できないとはいえ負けは負け、ここはさすがごと引き下がるが大人というものだ。だが、まだチャンスは残っている。

このジャンケン大会はあまりにも人数が多すぎるため、まず男女で分け、その後に男女共にいくつかのグループに分けて行われていた。そして男子は3チームに分かれて行い、そのチームから1人敗北者を出し、最後に各チームの敗北者同士でジャンケンするというルールだ。

そして、上条当麻はその敗北者の内の1人だ。だが、最終決戦に勝ち残ることさえできれば自分が犠牲になることはない。

「やーやーカミヤーン、どうやら長年の戦いに決着が着く時がきたみたいだにやー」

と言いながら近づいてくる金髪グラサン男、『つちみかどもとはる土御門元春』。どこからどう見ても校則違反の不良少年だが、不思議とそれを咎める者はいない。

「そっちのチームの敗北者はお前か土御門・・・じゃあもう一つのチームは？」

「ふっふっふ、それはこのボクや」

と不気味かつうざい笑みを浮かべつつこちらに歩いてきたのは通称『青髪ピアス』（学級委員長）。ウザさ全開自信満々の表情で歩いてくるのはいいが、どうやら彼が3人目の敗北者のようだ。

こうして、3人の敗北者は集った。

互いに互いを睨みあい、火花を散らす。

「皮肉にもデルタホースの3人が残ってしまったようですなあ、いくら同志とはいえ手加減はせえへんでえ？」

「それはこっちのセリフだ、こんなクソあつつい季節にボランテイアなんてやってられないからにやー」

「この不肖上条当麻、全力で勝ちにいかせてもらっぜ？」
ぐぐぐっ、と一気に熱気が高まったような気がした。互いに互いを睨みあう。

おそらく隙は存在しない、正々堂々やるしかない。

肘を引き、拳を握って力を溜める。後はジャンケンポンの音頭と共に全力でこの拳を前に突き出すのみ！

だったはずなのだが・・・

「はやくしなさいよ、もう女子は決まってるんだから後はあんた達だけよ」

と今すぐにも戦いの火ぶたが切って落とされようという時に水を差してきたのは何もかもが規則化された少女、『ふきよせせいり吹寄制理』だ。ただし、その巨乳だけは規則化できていないことは言うまでもない。

「あれ、そうなんや。ちなみに女子はどうなったん？」

と、尋ねる青髪ピアス。本当に自然に、どうでもいいけどちょっと興味あるから聞いてみよっかなー的な雰囲気で訪ねているが内心興味津津なのは間違いないだろう。こういうのがこいつの無駄に洗練された無駄のない無駄な変態テクニクなのだ。

「女子からは私を含む2人の立候補者が出ていてあとはジャンケンに負けたのを合わせて合計3人、責任感のない男子とは大違いね」
言いながら吹寄は親指で背後にいる人間を指さした。その先いたのは2人の少女。おそらく女子のメンバーはマジメ系生徒吹寄を含める彼女達がそうなのだろう。

「というか立候補者がいるのならいちいちジャンケンでメンバーを決める必要はあったのだろうか？ まあそこは気にしないでおこっへえ〜、と適当に相槌を打ってこちらに向き直る青髪ピアス。しかし、こちらに向き直った時には既にその顔は豹変していた。そう、これは変態の顔つきだ。

「なあ、確かにボクはボランテニアは嫌や、でも3人も女子がいるっていうんなら話は別や・・・みんなもそうやる？ だからこのジャンケン、負けたヤツが得をする。それってなんか理不尽じゃないか？」

「確かに・・・負けたのに得をするというのは少し卑怯な気がするぜよ、よし、なら勝ったヤツがボランテニアに参加するってことにしてみてもどうかにゃー？」

と完全にそっちモードにスイッチが入ってしまった土御門。
だが、その意見には賛同できない。

そう反論しようとしたがふと、あることに気がついた。
上条当麻は不幸だ。この夏休みはそのせいで暴食シスターが居候してきたり、大量の缶ジュースを持ったままテニスボールをぶんづけて転倒したり、夏休みの宿題が魔術師のせいで台無しになったりと散々だった。

上条がジャンケンをする時に負けているのは全力で勝ちを狙いにいっているから不幸が働き、逆の負けへと自然に導かれてしまう。

だが、それを逆手にとってみればどうだろうか？

つまり、全力で勝ちを狙いにいけば不幸な力が働き、自然と負けさせてくれるはずだ。

ならばその申し出、断る理由がどこにある？

「ふっ、その意見・・・異論はないぜ土御門」

「よし、これで決まりだにゃー」

そして3人は再び臨戦態勢に入る。

このジャンケンで上条当麻が掲げる崇高なる目的は1つ、
全力で、このジャンケンに負けることだ　　ッ！！

「「「最初はグー！！！！ ジャンケンポン！！！！」」」

幸運と不幸の高校生（後書き）

感想等々あればお願いします！><

無能力者の日常 (1) (前書き)

第一章うpです。更新遅くなるかもとか言っていましたですが何かうpしたい気分になってしまいついしてしまいましたw

さて、今回から上条サイドのヒロインが登場します。完全にオリキヤラです故「何この子？」となってしまうかもしれませんがなにとぞご容赦をw

ちなみに一章、二章は上条サイドになる予定なので一方さんの出番はまだまだ後になります。一方さんと聞いてこの小説を読んでくださっている方(がいらっしやるかどうかはわかりませんがw)には申しわけないのですがもうしばらくお待ちを・・・^^;

無能力者の日常 (1)

暑い。

上条当麻が第七学区のとある歩道でごみを拾いをしてまず最初に心に浮かんできた言葉はそれだけだった。

こんな日に限ってなぜか太陽がキラキラと輝いており、地球に生命の源となる憎らしいほどの熱気を帯びた太陽光を送り込んでくる。

うらめしい。

ちなみに今日は土曜日で学校はないが、制服のまままで作業をしている。

吹寄曰く、「ボランティアでも学校行事なんだから制服を着てくるのは当然」らしい。

真つ青に晴れ渡った空を見上げる。

あのジャンケンに負けていなければ・・・と思うがもう遅い。思えば不幸を利用できるわけなどなかったのだ。

あの時の本当の不幸とはジャンケンに負けることではなく、ボランティア活動を行うことだったのだから、勝っても何もおかしいことはない。

むしろ、負けることではなく勝つことこそがあの時の不幸だったのだ。

先程から不幸不幸連発している上条だが、彼の不幸にはちゃんとした元凶がある。

『幻想殺し（イマジンプレイカー）』。

彼の右手に宿った特異な能力で、例えばコンクリートの壁すら貫通する超電磁砲だろうが、神様の奇跡だろうが、異能の力であればその右手で触れただけで打ち消せるという変わった力。

極論を言ってみれば、触れただけで神様ですら殺せてしまうような代物だ。

これだけを聞くとものすごい力のように思えてくるが、実際はこの右手があるからといって成績が上がるわけではないし、普通のケン力に役に立つこともない。それどころか、神の奇跡に含まれるいわゆる『幸運』までもも異能の力扱いされてしまつて打ち消してしまつたため、よく缶を踏んで転んだりジャンケンには負けたりと散々な能力だ。

「あの、大丈夫？」

そんな神様ですら殺せる少年の背中に声を掛ける少女がいた。

学校指定の制服に、肩のあたりまで伸びている少し短めの黒髪ツインテール、それ以外の特徴は無いに等しいクラスメイト『鳳城白無』。自分でボランテアに立候補した女子の内の1人だ。比較的控えめな性格だが、クラスに馴染んでいないということもなく、不良少年である上条でも用がある時には話しかけてくる程度の存在だ。どうやら彼女は青空をボーツと見上げながら考え事をしていた上条の姿を見て日射病の前触れか何かかと勘違いしているらしく、心配そうな表情でこちらを見ている。

「あゝすまん、俺は大丈夫だ」

「そ、そう？ でも無理はしないでね、しんどくなつたら言つてね？」

「ああ、わかった」

こういうのは本来男性である上条が言うセリフで、女性に言われるのは正直かなり違和感があつたが、このクソ暑い中そんなことを気にしていられる余裕などなかつた。

ちなみにこのゴミ拾いは2人1組で行われており、吹寄ともう1人の女子は他の場所でゴミ拾いをしている。ちなみに鳳城とパートナーになつたのは「立候補者を1人監視させておくと安心」という担任教師の提案によるものだ。

そしてその提案はある意味機能している。

もし監視者が吹寄なら上条はこっそりと抜けだしてサボつていただろう。だが、今隣でゴミ拾いをしているのはお互いによく知りも

しない、気の弱い少女だ。

仲が良ければそういうヤツなんだと納得してあきらめてるか次の日におふぎけ程度に割と本気で殴るつもりで追いかけてきたりで事なきを得ることができるが、別段仲が良いわけでもないクラスメイトである鳳城の場合は話が違う。

もし上条が鳳城1人にゴミ捨てを任せて逃げたとしても、鳳城は何も言わずにゴミ捨てを続行してくれるだろう。

そんな良心的で気弱な少女を1人残して逃げることができるだろうか？

少なくとも上条にはできない。それほど薄情者ではない。そんなことをしてしまえば逆に上条は膨大な罪悪感に襲われ、夜も眠れなくなってしまうだろう。

だから『監視者』というシステムはある意味機能していると言える。

会話は無い。お互いに黙々とゴミを拾い、ゴミ袋の中へ入れて、新しいゴミを探し、見つけたらそれを拾ってゴミ袋に入れるという単純な作業を繰り返す。

だが、

(・・・気まずい)

上条と鳳城はそこまで仲がいいというわけではなく、クラスでイベントが発生した時や、意見を出し合う時に少し話したりする程度で、世間話のような友達がする会話などしたこともない。

そう考えると上条の中の鳳城という存在は「友達」ではなく「クラスメイト」なのかもしれない。

いや、もしかしたら前までは友達だったのかもしれないが、何かあってこんな関係になったのかもしれない。

もしくは以前からずっと友達で、実は話しかけないというのは不自然なことで、相手もそれを気味悪がって何を話そうか、話しているのか迷っているのかもしれない。

だが、今の上条にとって知らない人対して自分から行動を起こす

のは危険だ。

なぜなら、上条当麻は記憶喪失だからだ。

記憶を失ったのは夏休み、話によるとある少女を助けるために記憶を失ったらしいが、上条はその時のことを全く覚えていない。

そして、1人の少女に悲しんでほしくないから、そのことはずっと秘密にしてきた。

だからここで、たとえその少女と関係のないクラスメイトだろうと自分が記憶喪失だということを気付かせてはいけない。だが、

(流石にこの沈黙はキツいだろ・・・)

殺す気か！と思わず叫びたくなるほどの熱気に、気持ちの悪い沈黙、そんな中でのゴミ拾い。不良高校生である上条当麻にとっては正直ただの拷問でしかない。

「あ、あの・・・上条くん？」

そんな沈黙を先に破ったのは意外にも控えめで気弱なはずの少女である鳳城だった。見ると既にゴミ拾いは終わってしまったているらしく、道のゴミは見渡せる範囲にはもう存在していなかった。

ボランティアって意外とすぐ終わるもんだなーと思ったが、よく考えてみればこの街にはドラム缶型の掃除ロボが複数存在していて、細かいゴミの掃除ならそのロボットが自動でやってくれるため、人間が拾うゴミはある程度大きいゴミだけでいいらしい。その証拠に、ゴミ袋の中はほとんど空き缶やペットボトルといった、少し大き目のゴミばかりで埋まっていた。

「あ、ああ、すまん。ゴミ拾い終わったっばいな」

「う、うん。私達の担当エリアはここだけだから後は集合時間までどこかで休憩しようかと思うんだけど・・・」

そこで言葉が切れた。何やら何かを言おうとしてためらっているらしく、顔を少し俯かせて、視線を逸らしたまま両手の5本の指だけを合わせてもじもじしている。

「だけど？」

促す上条。すると決心したのか、鳳城は視線を逸らしたまま口を開く。

「えっと、あの、私あんまりこの辺のこと詳しくないから・・・どこか休憩できそうな場所、ないかな？」

把握。一応説明してみると鳳城白無という少女は基本的には控えめな優等生だ。そんな少女が放課後や休みの日にどこかに遊びに行くことなどほとんどないだろう。

だから、この辺の地形についてよく知らなくてもなんらおかしいことはない。

(まあ知ってたら知ってたで驚くこともないけどさ)

というわけでここは上条がエスコートする場面だろう。まあ記憶喪失である上条が道案内をするというのもおかしい話だが。

「そうだなあ、この辺で一番近い休憩所つつたら・・・」

そこで上条の頭に浮かんだ場所は・・・

無能力者の日常 (2) (前書き)

いろんなアニメの最終回見てたらやる気出たのもう一つ投下！
書き溜めしてるのでしばらくはこのペースが続くかもです。

このあたりから文章がだらけはじめますw (2章前あたりで多分戻ります)

無能力者の日常 (2)

上条と鳳城はゴミ拾い担当地区から一番近い公園まで来ていた。一番近くの公園、といわれて真つ先に思い浮かんだのが上条がよく通っている(というか出かける時によく通っている)割と普通の公園だ。たまに名門常盤台中学のエースの少女が自販機に蹴りを入れていることで定評のある公園だったりもするが、この際そんなことはどうでもいいだろう。

「はい」

先程自動販売機から排出されたばかりのギンギンに冷えたペットボトルを鳳城に手渡す。ちなみに中身は割と有名なスポーツドリンクだ。

鳳城はそれを「ありがとう」と1つ礼をして受け取った後、フタを開けて一口だけ飲む。なんとというか普通のペットボトルに入ったスポーツドリンクを一口飲むだけという行為を女子がやるとどこか上品に見えるのは気のせいだろうか？

それはともかく上条も同じようにペットボトルのフタを開け、水分補給のためにスポーツドリンクを口に含む。味はそこまでおいしーいということはないし、所詮は昔からある普通のスポーツドリンクだ。期待するだけ損というものである。

しかし、昔からあるスポーツドリンクとはいえ、外の世界とは20〜30年技術力が進んでいる学園都市でも通用しているのだからなかなか侮れない。

流石の学園都市でもこれを越える美味しいスポーツドリンクというヤツを作れなかったのか、はたまた作る必要がないぐらいこのスポーツドリンクが完璧だったのか。

だが一応表記は学園都市製になっているため、案外謎の成分が混じっていたりするかもしれない。

それともかくまたまた会話がない。

同じベンチに座っているのはいいが何を話したらいいのかさっぱりわからない。

今まで記憶を失う前に知り合ったと思われる人物は、あちら側から話しかけてきたためなんとかやってこれたが、今は状況がまるで違う。自分から話しかけないといつまでたってもこの空気のままなのだ。

そういう点では案外上条は受け身なのかもしれない。

ふと、隣に座っている鳳城をチラ見する。

その表情はまるでこの空気を気にしていない普通の表情で、だがどこかさびしそうなものでもあった。

これは偏見かもしれないが、女性の無表情というものはどこか傍げに見えてしまうもので、こういう表情に時々上条はドギマギしてしまう。

そんなことを考えている内に、こちらの視線に気づいたらしい鳳城は、ほんの少しだけ困ったような表情で、

「えっと、どうかした？」

「ああ、いや別に・・・そっぴや吹寄とかはもう終わったのかな
〜って」

「どうだろう、吹寄さんってすごくマジメな人だからもしかしたら担当地域以外のところまでゴミ拾いしちゃってるかも」

「ああ、ありそうだなあ・・・そっぴやお前も吹寄と同じ希望者なんだし他の地域のゴミ拾いとかはやったりしないのか？」

「う、うん。私はあまり体強くないしやりすぎると日射病で倒れちゃうから」

「それって経験談？」

「うん、ちよつと前に無理したら倒れちゃって」

あはは、と苦笑いでごまかす鳳城だが、それは軽く笑い事ではない。

「ふ〜ん、でも自分の体を気遣えるってのはすごいことだと思うぞ。無茶してぶっ倒れたりしたら他の人にも迷惑かかっちゃうしな」

実際、上条は自分の体のことなど気にせず、いつも無茶ばかりしていつもある少女に心配をかけてしまっている。いろいろ必死だから仕方ないとはいえ、そういう点では鳳城は見習うべき人物なのかもしれない。

だが、

「そんなこと・・・ないよ」

たった一言で鳳城はそれら全てを否定した。

よくある謙遜というヤツだ。しかし上条はそういうのはあまり好きではない。謙遜というのはあまり自己主張しすぎて他人に嫌われないようにするために使うものだ。それは相手を信頼していないことと同じ。つまり、簡単に相手を信頼できない人間がすることだ。それはそのまま鳳城の欠点にもなってしまうているだろう。

かくいう上条も自分に自信を持ったことなどほとんどないが、少なくとも謙遜などした覚えがない。

「そんなことなくはないだろ、無理して体壊したら元も子もないし自分で自分を管理できる人間ってすごいと思うぞ」

少しだけ鳳城が黙りこんだ。そして、

「私は立派なんかじゃないよ、自分のことなんて、管理できないし制御すらできない」

さらに、と風が吹き抜けるように一言。

その言葉はどこか寂しげで、哀しげで、今にも泣き出してしまいそうな・・・そう思ってしまったのは上条が夏休み前の鳳城と接してきた記憶がないからだろうか？

もしかしたら夏休み前の上条なら彼女の事情を知っていて、その言葉にこめられている意味を理解できていたかもしれない。

だが、実質今日が初対面となるこの少女のことを上条はイマイチ理解できない。

気が付けば上条は絶句していた。会話が続くとか続かないとか、

沈黙が嫌だとかそんなことはもうどうでもよくなっていた。

ただ驚愕と、胸を締めつけられているような違和感だけが上条の体を支配していた。

「え、えつと・・・上条くん？」

ハッ！ と、鳳城の声で目が覚めた。何秒間ぐらい絶句していただろうか、もしかしたら何分間だったかもしれない。

「あ、いや、何でもない」

心配させないように適当にごまかしてみるのが相当無理があったらしく、鳳城は首をかしげて頭の上に「？」マークが浮かんでいそうな表情でこちらの様子を窺^{うかが}っている。

まあそれについては何とかなるだろう。

それよりも、上条はこの少女にどこか既視感を覚えてしまっていた。

どこか、どこかで経験したような、でもそれがどこで何をしたのかまでは思い出せない。そんな感覚が上条に襲いかかる。

(気のせい・・・だよな?)

そんな感覚を紛らわせるために、スポーツドリンクを一気に飲み込む。刹那、学園都市製スポーツドリンクに含まれている謎の成分が上条の頭を活性化させた。

「なあ、鳳城。このベンチ思いつきり日なたになってるけど大丈夫なのか？」

直後、鳳城の体がゆらりと揺れた後、全身の力が一気に抜け、上条にもたれかかるようにして倒れてしまった。

上条は思う。この少女の日晒病の原因は気の持ちようなのではないかと・・・

無能力者の日常 (3) (前書き)

続きです。今回は純情な上条さんを書いてみま・・・した・・・？
文章はまだだらけたままですがご容赦をw

無能力者の日常 (3)

数分後、鳳城が目を覚ました。

その後、日陰にあるベンチに鳳城を移動させたのはいいものの、移動する際お姫様だつこで移動させたため、周囲の視線が非常に痛かった。

おんぶをしなかった理由は・・・まあ鳳城の胸についているあの2つの膨らみ(そこまで大きいわけではない)を見ればわかるだろう。

ちなみにベンチは鳳城が占領しているため、上条は立ったままの状態だ。

「あれ、私・・・」

「おう、気がついたか」

「えっと、上条くん？ 私、えっと・・・」

どうやらまだ寝ボケているらしく、いろいろ困惑しているようだ。まあ無理もないだろう。目を覚ましてすぐ横にいる人物がよく知りもしない(かどうかはわからないが)人物だったら普通はこうなるものだ。

「まだしばらく横になってた方がいいと思うぞ。まあ精神的な日射病だから体の方には何も異常はないけどな」

それを聞いて何があったのか大体理解して安心しらしく、鳳城は困惑して少し上げていた上半身を再び下して横になる。

しばらく、沈黙が続いた。

夏の名残りのセミの鳴き声のせいか、何故か先程の沈黙と違って気まづくはない。

むしろ心地よいと思えるほどだ。

「あの、上条くん、私どれぐらい気絶してた・・・？」

そんな心地よい沈黙を先に破ったのは意外にもまた鳳城の方だった。

ぱちくり、と少し驚く上条だが、そんなことを気にしていても仕方がない。

公園の中央にある時計に視線を移し、最後に時計を見た時間との差を大体の誤差も含めて適当に計算する。

「大体30分くらいだな」

「よかった、集合時間まではまだ時間があるみたい」

「まあ確かにそうだけどさ、間に合わなかった時はそんな時はそんな時だろ、流石に病人ほったらかして俺一人で行くわけにもいかないし」

という上条の発言に対して何故か、鳳城は先程の上条と同じように目をぱちくりとさせて驚いていた。

「どした？」

「え？ あ、えっと、あの、ちょっと意外だなと思って」

「なにが？」

「私上条くんってちょっと怖そうないメージがあって・・・だから病人を放って一人で行けないっていうのは意外だなんて」

「俺ってクラスじゃそんなイメージがあるのか？ 軽くシヨックだ・・・」

どんより、と落ち込む上条に鳳城は苦笑いで「えっと、ごめんね？」と言って謝るがほとんど慰めになっていない。

どうやらこの鳳城白無という少女は意外にも毒舌らしい。それとも単に上条のメンタルが弱いだけかもしれないが。

「でも、上条くんって実は優しいんだね」

少しだけ、心臓が跳ねた気がした。

正直、そういうことは生まれてこの方言われた覚えがない（かどうかは知らない）ため、耐性というものがついていないらしい。

だが、それでも必死に動揺しているのを隠しているいつもの調子で、「そうか？ 流石に日射病で倒れている女の子をスルーしてどっ

か行くヤツなんてそうそういないと思うけどなあ……」

「うん、言われてみればそうかもしれないね」

鳳城は横になったまま、くすくすと笑い出す。そしてそんな鳳城から視線を逸らす純情高校生上条当麻。

まぶしい、ここ日陰だけど笑顔がまぶしい。

「えっと、どうしたの？」

「ああ、いや別に！ 何でもない」

「……？」

思わず声が裏返る。そんな上条をいろんな意味で心配する鳳城。

何とか怪しまれないようにごまかす手段はないかと試行錯誤してみるのが、一能力者（レベル0）である上条の頭では答えを導き出すのは難しいらしく、どうにもいい案が浮かんでこない。

そんなこんなで5分くらい悩んでいると、

「あ、そろそろ集合時間だね」

鳳城の一言で試行錯誤が一瞬の内に止まり、現実の世界に引き戻される。

「言われてみればもうそんな時間か、体の方は大丈夫か？」

上条の言葉を受けて、鳳城はゆっくりとした動作で立ちあがる。

「うん、大丈夫みたい。いろいろ迷惑かけてごめんね。えっと、

こういう時ってお詫びに何かした方が……いいよね、やっぱり」

予想外の展開だが、聞いてて誤解されそうな言い方だ。もし自分でなければどうなっていたらうと上条は若干心の中で焦ってみるが、なんとか平静を保つ。

この鳳城白無という少女は、天然だとは思っただが、どうやら人の心を乱す達人らしい。もちろん、悪い意味ではないのだが。

「あー、いいよ別に。困った時はお互い様ってヤツだ」

「で、でも……今日いろいろお世話になったしやっぱり悪いよ、
妙なところで意地を張る鳳城。」

それは良心的すぎる故の行動。だが、その良心は時に迷惑になることに気付いていないのも鳳城の欠点だろう。かといって、それを

注意するのもなかなか気が引けるものである。

(いるんだよなあ・・・こういう絵に描いたような人間って)

またまた軽い既視感を覚えて脳内に夏休みの最後の日に出会ったアステカの魔術師の少年を思い浮かべてみるが、残念ながらその幻想は既にぶち壊された後だ。

唸りながらどうしたものかと考えてみる。

そこでふと、公園の広場にある時計が視界に入った。刹那、上条の頭に電撃が走った。と言えるほどの発想ではないが、いい案が思いついたのは事実だ。

「なあ、鳳城ってこの後なんか用事とかある？」

「え？ えつと・・・特にないけど」

「そつか、んじゃどっか遊びに行こうぜ、それでキャラにしといてやるよ」

「え？ え？ そ、そんなのでいいの？」

「ああ、家に帰っても特にやることないしどうしようか考えてたところだ、これなら俺が得するだろ？」

理屈になっていない屁理屈を言ってもう一度時計に視線を移す。

時刻は午後3時21分。

遊ぶ時間は十分にある。

ただ、男子寮に居候している腹ペコシスターの機嫌だけが心残りだが・・・

無能力者の日常 (4) (前書き)

禁書SSを読み返しつつっp

今回上条達が訪れる地下街は6巻、12巻で物語を繰り広げたあの地下街ですね。

そろそろ書き溜めていた分が無くなってきた・・・^^;

無能力者の日常 (4)

集めたゴミの入ったゴミ袋を集合場所に提出した上条と鳳城は、第7学区にあるとある地下街にいた。

この地下街は第7学区では割と有名な遊び場となっていて、このぐらいの時間になると暇になった学生達がここに遊びに来るため、結構賑やかになっていたりする。

・・・はずなのだが、

「見事に空いてるなあ」

上条が地下街に来て最初に発した言葉はそれだった。

当然だろう。見渡す限りの範囲にいる人間の数は、上条と鳳城を含めておよそ5〜6人。幅は約20mほどで、およそ100m先まで続いている通路にいろんな種類の店がズラリと並んでいるにも関わらず通路にそれだけの人数しかいないというのは正直異常だ。

しかし、何故そこまで人が少ないのかと問われれば答えは簡単だ。地下街の所々にある、まるで手榴弾でも爆発したような跡がそこから中に存在しているからだ。

さらに一般人がその場所に入れないように「立入禁止」のテープまでされていて、それがバリケード代わりとして機能していた。

1部のガレキの山では専用の作業服や学園都市製の駆動鎧パワードスーツをその身に纏った作業員がガレキの撤去、通路の修復作業を行っていて、以前上条がここを訪れた時の活気のある地下街は、今となっては見る影もない。

どうしてこうなったのか、その理由を上条は知っている。

何故なら、こうなってしまった原因の事件のほぼ中心にいた人物の1人が、まさに今ここにいる上条当麻本人なのだから。

9月1日。

始業式が終わって『友達』とどこかに遊びに行こうということになり、鳳城と同じようにここを訪れた時に、突如『魔術師』と名乗

る女性が現れ、岩のゴーレムを使ってこの地下街で大暴れしていた。そして何故か上条はその魔術師のターゲットとなっていて、その魔術師と交戦し、なんとか勝利したはいいが、未だにその戦闘の傷跡がこうして残っているというわけだ。

眼球のみを動かし、横目で鳳城の様子を窺^{うかが}うと、やはりそのことが気になっていられるらしく、不安そうな表情を浮かべながら辺りをキョロキョロと見回している。

やっぱり連れてくる場所間違えたかなーと思うがもう遅い。

時刻は午後4時11分。ここから別の遊び場に行くにしても時間がかかりすぎるため、着く頃にはもう遊ぶ時間はなくなっているだろう。

選択肢は2つ。

このまま解散するか、ここで遊ぶかだ。

と、上条がどちらを選択すると決めかねていると、鳳城が不安そうな声で発言した。

「ここ、ほんとに入って大丈夫なのかな？」

「そう思うのも無理ないよなあ、一応入っても大丈夫ってことになってるけど見た目ただの廃墟寸前のレジャー施設だし」

言いながら辺りを見渡して、

「でもここに入っちゃいけないってことになってるならあんな風に修復中の場所だけにテープを張らずにここの入り口にテープを張るだろ」

それに俺ら以外にも何人か入るし、と上条は補足する。

「た、たしかに言われてみれば。でもやっぱり危険なんじゃないかな？ 今すぐにも天井とか崩れてきそうだし・・・」

「いやさすがにそれはないだろ。安全の保証がないなら閉鎖するハズだし街の外から学生を預かつてこの街ならなおさら子供を危険な場所に入れるようにはしないだろ。つまり安全は保障されてるってことだ」

「そう言われると一理あるかも・・・でも人少ないよね、これっ

て最初からこうだったの？」

「いや、こうなる前は結構人いたんだけどやっぱ人間ってのは一度『危険だ』って思った場所には入りたくなくなるもんなんだろ。そのおかげで穴場になっちまってるんだけどな」

言いながら、ゆっくりとした調子で地下街の長い通路の奥に向かって歩き始める。それに倣うように少しだけ遅れて鳳城も歩き始めるが、少し遅めにスタートしたのにはぼ上条と同じ歩調で歩くため、自然に上条のナナメ後ろについて歩く形になってしまっていた。

初々しいというかもどかしくて少し可愛らしいが傍から見ればどう見ても変だ。

辺りにあまり人がいないとはいえ、流石にこれは精神的にあまりよくない。

よって上条は鳳城の横に並ぼうと少し歩く速度を下げる。だが、それに合わせるように鳳城も速度を下げたため、結局2人は平行線のままだ。

「なして貴方様は私めの斜め後ろをお歩きになつて居るので？」

「ふえ！？ えっと、あの、だって……」

何故か俯いたまま口ごもってしまった。心なしか顔が赤くなつて居るように見えたが、俯いているため確認は非常に困難だ。

しばらくして、鳳城の口から蚊の鳴くような声が発せられた。

「恋人……みたいだから」

ボソリ、と一言。あまりに小さい声だったため、上条には聞こえていないだろう。しかし、この時点で鳳城の体温一（主に顔）が上がったのは言うまでもない。

「？ 何故にそのような小声で？」

「な、なんでもない！！ ごめんね！！」

顔の前でブンブン！ と高速で手を振る鳳城。またまた顔が赤くなつて居たように見えたが、残像が見える速さで振られている手によって遮られていたため、またまた確認が困難になつて居た。

やがて俯いたまま少しだけ歩調を早めて上条に追いつき、横に並んで再び前の歩調に戻して歩き始める。

歩きながら横眼で鳳城の様子を窺うが、何故かずつと俯いたまま歩いているためその表情は相変わらず窺うことはできない。さらに「こ、これって本格的に・・・でも別に手を繋いでるわけじゃないし人も少ないし大丈夫だよ、で、でもやっぱり・・・」などとブツブツと何かを呟いているため、本格的に意味がわからない。

そうこうしている内に上条達は地下街の中心の位置にある広場にまで来ていた。

相変わらず人の数は少ないが、円状の広場を形作るように並んでいる店のほとんどは既に営業を再開していて、広場の中心にある噴水はその上部から噴き出して流れ落ちる水を一滴も漏らすことなくきちんと機能していた。

わずか数週間でこれほどまでに修復作業が進められるのは外との技術の差が20〜30年離れている学園都市の技術のおかげといったところだろう。

「まだちよつと心配だったけどこの分なら十分遊べそうだな、というわけだ鳳城。まずどの店に入るよ？」

「ええ！？　そ、そんないきなり決定権譲られても少し困る・・・かも？」

「んなもん適当でいいんだよ、見た目的にあそこがいいとか、あそこ興味あるから入ってみたいとか」

鳳城は少し唇に人差し指を当てて悩んだ後、

「じゃ、じゃあ上条君のオススメのお店」

「じゃあ鳳城が行きたいお店で!!!」

「エスコートを完全に拒否したカウンター！？　こ、こういう時って男の子である上条くんが紳士性を女性に見せつける場面なんじゃない・・・」

「ふっふっふ、鳳城よ、この上条当麻に紳士っぷりを期待しても無駄だぞ。なぜなら俺は俗に言う不良高校生なのだからな!!!」

「じ、自信満々に自虐を行われても・・・」

苦笑いを浮かべながら反論する鳳城だが、やがてあきらめたのかコホン、と一ツ咳払いをして、

「じゃあ、あの店に行きたいな」

と言って、鳳城はどこかを指さす。その先を視線で追うとそこには・・・

無能力者の日常 (5) (前書き)

See visionsを作業用BGMにしながら執筆しております。

最初だからなかなか感想、評価等がもらえないことに若干惑っていますw

やはりツイッター導入した方が良いでしょうか・・・？

無能力者の日常 (5)

「ゲーセンとはまたオーソドックスな・・・」

上条が自動ドアをくぐり、ゲーセンの領域内に入って一言呟く。

アニメやマンガだと気弱であり目立たない女の子というのは大抵こういうのに誘った時に行きたくなる場所がゲーセンだというのは相場が決まっているが、まさか現実世界でも相場が確定しているなんて誰が予想できたことだろうか？

なにはともあれ、入ってしまったものは仕方がない。

実を言うと、不幸体質が原因でゲーセンにはあまりいい思い出がないため、入りたくないというのが本音だったが、鳳城に選択権を渡したのが運のつき。

当然そのタイミングで拒否権を発動できるほど上条は勇者ではない。

そして元凶たる鳳城は・・・

「ここがゲーセンなんだ、なんだかすごい場所だね」

特に子供のようににはしゃぐこともなく、冷静に自分の感想を述べていた。

「至つて普通だな・・・お前には目をキラキラと輝かせて子供のようににはしゃぎながらゲーセンを遊びつくすというお約束の展開を展開する能力はないのかね」

「ちよ、ちよつと言つてることがよく理解できないけど少なくとも私はそういう能力は持ち合わせてない、かな」

さいですか、と少し拗ねたように返事をする上条。一体何を期待してたんだあんたは、とでも言いたげな表情を浮かべている鳳城が隣にいたが、上条はひとまずスルーしておく。

しかしまあ・・・と、呟きながら上条はゲーセンを見渡す。

見事に人がいなかった。客は上条、鳳城2人を除けば男子3人組のグループが1つ、あとは店員が2人といったところだろう。いつ

もの喧騒がないからか、各ゲーム機が放っているBGMが妙によく聞こえてくるため、むしろ寂しい。

「ねえ上条くん、このゲームセンターだとのゲームがオススメなの？」

唐突に、鳳城がそんなことを言った。

と言われても上条はあまりゲーセンには訪れないし、第一全てのゲームで不幸を発動している上条にとって、オススメのゲームなどあるわけがない。

しかし聞かれて答ええないというのはいささか失礼なので、上条はぐるりとゲーセン内部を見渡して、

「あー、あれとかかなあ」

適当に指を差す。

その先にあつたのは本当に無難なUFOキャッチャーだった。流石にこれは単純すぎたかなあ、と上条は少し気が引けたが、当の本人はそういうわけでもないらしく、

「なるほど・・・やっぱりUFOキャッチャーって学園都市が作られる前からあるだけあつて今でも評価され続けてるんだね」

冷静に現代のゲーセンというものを分析していた。

「一体このゲーセンに何をしに来たんだお前は・・・現代ゲーム機の研究して事業でも立ち上げるつもりか？」

「そ、そんなことできないよ。ただ遊ぶ前にどんなゲームが楽しくてどんなゲームがつまらないのかの調査ぐらいしておいた方がいいのかなって・・・」

「そういうのは見た目で決めればいいんだよ、こういうところに計画性なんてのは必要ない、適当にやってきゃ楽しめる。そういうモンだ」

と上条が軽く熱心に語るが鳳城は「ふーん」と適当に受け流す。少しがつくりした上条だが、よく見ると鳳城の興味は別のトコロに移っていたらしい。

鳳城の目線。それを追った先にあつたものは、

「スキルシューティング・・・？」

黒くて四角いボックスだった。中に入れるように四角形の1面に長方形の穴が開いており、その横には不良がスプレーで描いたような文字で、『スキルシューティング』と書かれていた。

このゲームは学園都市専用のゲームで、自分の能力を使つて的を破壊していき、その得点を競うというゲームだ。ただし、壊す的は全て3D化された電子の的で、修理費などには必要ない低コストなものになっている。

まあ簡単に言つてしまえば上条には縁のないゲームということだ。

「鳳城つてシューティングゲームとかに興味あるのか？」

「え、ううん、ただ何かな〜と思つただけで・・・ちなみになんかゲームなの？」

「ん〜、簡単に言えば自分の能力を使つたシューティングゲームだな」

「能力、かあ・・・じゃあ私には無理、かな」

ちよつとしょんぼりする鳳城。ということは彼女のレベルは低いのだろうか、と上条は推理する。

「そついや能力といえば鳳城の能力つて何なんだ？ やっぱ俺達の学校にいるつてことは『念動能力』テレキネシスか何かなのか？」

「私の・・・能力？」

ピクリ、と少し肩を震わせ、鳳城が絶句した。同時に全身の動きも凍りついたように停止した。

驚愕と、どこか寂しそうな・・・でも何かに期待しているような、そんな表情を浮かべているが、上条にはその意味を理解することはできない。

上条の背筋が凍つた。背中から嫌な汗が滲み出る。

(なんだ・・・?)

原因はおそらく恐怖ではない。だが、それが何なのかを把握することはできない。

とにかく、嫌な予感がした。

やがて完全に静止していた鳳城の口から言葉が発せられた。

「わ、私の能力は・・・微妙、かな」

今まで張りつめていた空気が元に戻ったような気がした。

それを確認した上条は、「そっか」と適当に相槌を打ってその場を収める。

結局鳳城の能力についてはよくわからなかったが、彼女が言葉を濁したということは、おそらくあまり深く触れてほしくないのだろう。

しばらく時間を置き、タイミングを図って上条が言葉を発する。

「そんじゃここでつつ立つてるのもなんだしそろそろなんか遊びますか」

「そ、そうだね。それじゃあまずはあれから・・・」

そう言っただけで鳳城が向かったのは体を激しく動かす太鼓ゲーム。

鳳城のキャラでできるようなゲームではないが、あえて激しい動きを強要されて慌てふためく鳳城が見たいがために上条は黙って温かい目で見守ってやることにしたのだった。

無能力者の日常 (5) (後書き)

感想等々あれば気軽に言ってください><

無能力者の日常 (6) (前書き)

書いてて思う、この上条さんそんなに不幸じゃないな、とW
ツイッター導入しました。うpしたらそちらで報告するようになりま
す。

ユーザー名は『matarinn』です。

無能力者の日常 (6)

「・・・不幸だ」

あれから一通りゲーセンを遊びつくした2人だが、両者の反応は違った。

まず上条だが、この人物の今の状態を一言で表すとすれば「落ち込んでいる」だろう。

理由は単純。

ゲーセンでの収穫が何1つとしてなかったからだ。

「絶対おかしいだろ、どうやったらカーチェイスゲームで前後左右から4台の車か俺を取り囲んで妨害して最終的に8位になったりUFOキヤッチャーで景品が物理法則を無視したような落ち方したり終いにはシューティングゲームで謎の大爆発が起きてゲームオーバーなんて現象が起こるんだ」

とまあこんなカンジだ。だが、彼の場合1日の3分の1は大体こんな風になるので問題は無い。

そしてもう一方だが、

「あ、はは・・・ドンマイ？」

といった風に先程から不幸続きの上条を満面の苦笑いで上条を慰めていた。

ちなみにこの少女が上条に対してこのセリフを言った回数はゲーセンに入ってから8回目になる。

しかし決して人の不幸をバカにすることは無いし、心の底からではないにせよ慰めてくれる鳳城は基本的にイヤツなのだろう。

だが、

「そんな景品のたくさん入った袋を持った人間に慰められても上条さんの心は晴れませんヨ？」

言いながら、鳳城が持ち手がついているにも関わらず両手で抱えているパン屋で買ったパンを入れる紙袋のような景品入れに目を移

す。

その量は決して多いとは言えないが、初心者にしては上出来な方だろう。

だが、景品を1つも手に入れていない上条と比べれば対照的すぎると言っても過言ではない。

「ありえない・・・普段目立たない系のキャラであるお前が実はそこまで景品を大量に獲得できる意外性満点のキャラでしたなんていわれても俺は絶対に認められん！」

「と私に八つ当たりされましたも・・・」

言いながらもまたしても苦笑いを浮かべる鳳城だが、「あ、そうだとふと何かを思いついたらしく、景品袋の中をガサガサと漁り、あるものを取り出した。

その形状はリング。腕にちょうど入りそうなサイズで、特に目立った装飾があるわけではない2つにある銀色のそれは、

「ペアリング・・・？」

「うん、ちょっと難しいゲームだったんだけどなんとかゲットできたから1つは上条くんにあげようと思って」

「いいのか？ お前が苦労して取った物なんだろう？」

「苦労はしたけどせつかくのペアリングを両方とも1人が持つていたら無意味だし・・・それに上条くんへのお礼がまだだったからそっか、と言って上条は差し出されたペアリングの片割れを受け取った。

ペアリングや腕輪の類は、ごく稀に小さすぎて男の腕にははまらないことがよくらしいが、このペアリングはそのような運命を辿ることになることはなく、すんなりと上条の左腕にはまった。

鳳城はそれを見届けた後、上条に倣うようにしてその小さな右腕にペアリングをはめる。

そこでふと、鳳城はペアリングをはめた右腕につけていた腕時計を見て、「あ」という声を漏らした。

「どした？」

「えつと・・・完全下校時間過ぎちゃってる、かも」

言われて、上条は自分の携帯をポケットから取り出し、ディスプレイに表示されている時間を確認する。

午後7時41分。

ここで上条は完全下校時刻より大切なものを思い出した。

暴食怠惰居候シスター。

「やつば！ 鳳城、今日はここでお開きつてことにしているか？ 言いながら全力ダツシユの準備。完全下校時刻を過ぎた学園都市は全ての交通機関が止まってしまったため、徒歩で帰る他ないからだ。そして上条は鳳城の次の言葉も大体予測はできていた。だから全力疾走で帰れるよう準備をしたのだ。

「待つて！」

だが、鳳城は上条の予測していた言葉とは全く別の返事をした。

ピタリ、と上条の全力疾走モードが解除された。

理由は単純。気弱で、控えめな少女からは予想もできない返事だったからだ。

鳳城は止まった上条を確認した後、次の上条の発言を待たずに続ける。

「最後に、行きたい場所があるん、だ・・・けど・・・」

意外だった。

あの鳳城の、精一杯の我儘。

「ダメ、かな？」

これを断ることのできる人間など果たしてこの世に存在しているのだろうか？

たとえ、家に帰って暴食シスターに頭をかじられることになるうとも、無視できるだろうか？

いや、

「ああ、いいぜ」

少なくとも、ここにいる平凡な高校生には、絶対にできない。

無能力者の日常 (6) (後書き)

インなんたらさん「私の出番は・・・？」
作者「ある。あるからその剥き出しの犬歯を今すぐしまってくださいまし」

感想などお待ちしておりますw

無能力者の日常 (7) (前書き)

1日2話uppが基本となりつつありますどうもこんばんわ。
今回まで文章がだらけてます(多分)。

一章は8まで続きます。そしてその8は明日の午後6時頃にupp予定です。

無能力者の日常 (7)

学園都市の夜は都会というだけあってかなり明るい。

だが、一部自然を残した地区もあるため、全体的に明るいということはない。

第7学区にもそういった地区がいくつか存在しており、その場所の中でも名スポットと呼べる長い階段を上った先にある高台からは人工的な光によってコーデイネートされた学園都市を眺めることができる。

通常ならそういった場所はデートスポットになったりするものだが、夜景を見るためには交通機関が止まる時間まで待つ必要があるし、なにより長い階段を上るには相当な体力が必要になってくるため、この時間にこの場所にやってくる人間はいない。

来ることがあったとしても、月に1〜2度現れるかどうか、といったところだろう。

そして現在。上条と鳳城は今月この場所に訪れた、おそらく1度目の2人組になっていた。

「へえ、学園都市にこんな場所があったなんてな。まあこの階段を上ってまで来ようと思う人間がいないのも頷けるけどこりゃ上ってきた努力に見合うぐらいの価値のある風景だな」

「そうだね、私は割とよくここに来るんだけど人いたことなんてほとんどなかったかな」

あの段差の数だからね、とくすくす笑う鳳城だが、今上って来たばかりだというのに、彼女は笑っていられる余裕があるぐらい不思議と息切れしていない。

だが、その理由もここによく来ているというのなら納得がいく。

と冷静に分析を行ってみるが、自分自身も大して息切れしないことに気付き、いつの間にか体力ついたもんだなあ、と少ししみじみしてみる。

「しかしまあ学園都市って廃棄ガスばっか出してて全体的に見てみるとあまりきれいなイメージは抱けないって思ってたけどこうしてここから見てみると景色だけはいいもんだな」

「が、学園都市の住人が言っていることとはあまり思えない言葉だね・・・」

「まあそうだけどな、でもさっきのボランティアでもゴミは結構あったしやっぱ外部から見ればきれいな都市に見えるかもしれないけど蓋を開けてみないとわからないもんだな」

そうだね、と鳳城は相槌を打って、

「でもさっきみたいにボランティアに参加してくれる人は大勢いるしこんなに綺麗な景色だってある。だから学園都市の全てが悪いって決めつけるのはよくないと私は思うかな」

「なるほどな、その意見には同意せざるを得ないな」

「意外と素直なんだね」

「まあな、この景色が綺麗なのは確かだし鳳城の言葉はなんか無駄に説得力があるからな」

そんな上条の言葉に「無駄につて・・・」と軽いツッコミを入れる鳳城だが、それ以上は何も言わない。

ちよつとした沈黙が訪れた。2人共階段を上つてすぐのところには棒立ちしているため、傍から見たら変に見えるだろうが、そんなことは気にならない。

だが、その沈黙は1分も経たない内にまたしても鳳城によって破られた。

「ねえ、上条くん」

言いながら、1人で歩き始める鳳城。

その先にあるのは学園都市の夜景。だが、その前には落下防止用の鉄格子のようなフェンスがあるため、もしもこのまま歩き続けたとしても転落することはないだろう。

鳳城は、歩きながら言葉を続ける。

「私ね、この場所がこの街で一番好きなんだ。理由、わかるかな」

？」

「ん〜、そうだなあ。夜景が綺麗だから・・・とか？」

上条が言い終わると同時にピタリ、と鳳城の歩みが止まった。

既に2人の距離は5mほど離れているため、上条の位置からは街の方を向いている鳳城の顔を窺うことはできない。

それは向こうも同じだが、今の上条の表情を窺ったとしても、鳳城には何の利益にもならないだろう。

だから、彼女は振り返らない。

「残念、不正解」

彼女にしてはめずらしくおどけた口調。だが、それを気にするこ
となく再び歩き始める。

「私がこの場所が好き理由は、ね」

いつの間にか鳳城は落下防止用のフェンスの前にまで来ていた。

彼女はそこで歩みを止め、一拍をおいてからこちらに振り向くと、

「ここなら、誰も来ないから。ここなら、人間が誰もいないから
だよ」

心臓に突き刺さるような、冷たい言葉だった。

そしてその表情はまるで何もかもに失望して、絶望して、それで
も何かに期待しているような・・・そんな表情。

「なん・・・で？」

気付けば、上条は言葉を漏らしていた。

そうさせたのはおそらく恐怖。だが、身の危険やそういった類の
恐怖ではなく、もっと恐ろしい何か。

そんな心境を知らない鳳城はその質問に対し、

「ほら、人つて時々静かな場所に行きたくなる時とか・・・ある
よね？　そういう時よくここにくるの」

明るい口調だった。そして先程までの張りつめた空気はいつの間
になくなっていった。

「ああ、なるほどね」

適当に相槌を打つてみたはいいが多少の疑問が上条の頭の中に湧いて出る。

思えば、この雰囲気は一度目ではない。ゲーセンの時と同じような空気。時々彼女が見せる表情。

それが一度なら気のせいでも済ましても構わないが、今日二度目の感覚となれば話は変わってくる。流石に気のせいとは思えない。

だからといって鳳城に尋ねても答えが返ってくるとは思えない。

まさに八方塞がりの疑問。さらに答えがあるのかどうかすら不明ときている。

「どう、したの?」

そんなことを考えていると、逆に鳳城から疑問が飛んできた。正直質問したいのはこっちの方なのだが、ここは抑える。

「ああ、いや、ちょっと心配だな」

「心配?」

「鳳城って時々哀しそうな表情してるからさ、過去に何かあったのかと思って」

それを聞いた鳳城は、一瞬だけ驚愕の表情を浮かべるが、すぐに笑顔でこう答えた。

「大丈夫、心配してくれてありがとう」

曖昧な返事だった。「イエス」でも「ノー」でもない全く別の回答。それは決して質問の答えではないため、上条の頭の中の疑問はまだ残り続けたままだ。

だが、

「そっか」

上条はそれ以上追及する気にはなれなかった。

どんな人間にも隠し事はある。

それは上条とて例外ではない。だから追及はできない。むしろ鳳城にだつて隠しておきたいことがあるというのなら、それを追求してはいけない。

いつの間にか上条の体の硬直は解けていた。だが、上条はその場を動こうとは思わない。

理由は簡単。

鳳城が手すりから手を離し、こちらに歩いて来るからだ。

彼女はそのまま上条の前まで来ると、いつもの調子でこう言った。

「そろそろ・・・帰ろっか」

無能力者の日常 (7) (後書き)

鳳城「フラグは立った・・・全て私の計画通り！」

実際はこのようなキャラではございません。ご了承ください。

感想などお待ちしておりますw

無能力者の日常 (8) (前書き)

時間通り・・・かな？ ラグがあるみたいなので何とも言えませんがw

今回で第一章は終わりです。キリもいいので少しu pのペースを落としたいと思います。(ついでに在庫も切れてきたのでw)と同時に定期更新制度にしたいと思います。大体u pした3日後に上げようにな、と思ってます。

まさに一瞬刹那一秒最速。開くと同時に白い物体が4足歩行で床を這いずり、そのまま上条の頭めがけて飛び着き、ツンツンヘアーの丸い頭を大きな口で丸かじり。

反射神経すら働いてくれないそのスピードはまさに神業。

つまり、簡単に言ってみれば上条の頭はかじられる運命だったのだ、と言えはわかってもらえらるだろうか。

「と~~~~~う~~~~~ま~~~~~ッ!! 遅いんだよ、お腹空いたんだよ、暇だったんだよ、お腹空いたんだよ~~~~~ッ!!!!!!」

「今同じこと2回言ったぞお前!? とりあえずワタクシの頭はどこからどう見ても食べ物ではありませんので食欲の呪縛から解放していただけませんか!?!」

「お~~~~な~~~~か~~~~す~~~~い~~~~た~~~~ん~~~~だ~~~~よ~~~~ッ
ッッ!!!!!!」

などと言いながら上条の頭にかじりついているのは全身を白い修道服に覆われた碧眼の少女。

名前は『インデックス』。

どう考えても偽名としか思えないが、これが正式な彼女の本名なのだから驚きだ。

ちなみに彼女はわけあって上条の部屋に居候しているわけだが、詳しい理由は上条も知らない。

というのもちよつどの少女を助けた時に上条の記憶が消えてしまったらしく、どういう経緯でこの少女と出会い、そして居候させることになったのか上条ですらわからないというわけだ。

そんなこんなで噛みつかれること数十か所。

ようやくインデックスの食の呪縛から解放された上条は、リビングにて正座&土下座を行っていた。

もちろん、インデックスに対してだ。

「で、どうしてこんなに帰ってくるのが遅くなったのかな?」

と仁王立ちのインデックス。見た目はそこまで恐ろしいわけでは

大人向けの店ぐらいだ。

だが、学生寮の近くとなれば話は別だ。徒歩で行ける距離ならこの時間になっても学生が集まるため、まだ営業している店もある。

案の定、しばらく携帯を操作して探していると案外簡単に見つかった。あそこのファミレスってこの時間でも営業してるんだなーと思いつながらパタンと携帯を折ると、まだ不機嫌なままのインデックスの方に向き直る。

「今日はファミレスな」

「むう、ちよつと納得できないかもだけどこの空腹がなんとかならそこでも構わないだよ」

「んじゃ決定、ほら行くぞ」

再び玄関に戻り、靴を履いて外に出る。外の空気はまだ多少蒸し暑かったが、もう少し気温が下がれば人体に適切な温度になるだろう、というぐらいの気温だ。

もう冬の準備を始めているのか、時々吹く風も心なしか少し冷たい。

そんな夜道を2人は歩く。

「ねえとうま、結局今日は何してて遅くなったの？」

「くつ、その話題をまだひっぱるか・・・」「こついつ時のインデックスは妙に敏感だなあと思いつつ、「友達と遊んでたんだよ、いろいろあって予定より遅れちまったただけだ」

大体の真実と、ちよつぴりの嘘。

しかし真実を全て述べてしまえばそれこそどんな高級食材店に連れて行かされるハメになるかわからないので、結局は嘘をつくしかない。

「うー、とうまは私よりその友達の方が大切なんだ」

「いやそういうわけじゃないって、本当にいろいろあったんだよ」

「いろいろって？」

「そりゃまあいろいろだよ、いろいろ」

「・・・とうま何か隠してる？」

ここでインデックスの猛攻。何故かいつもより鋭いインデックスに戸惑いつつ、

「隠してねーよ」

完全な嘘をつく。

「ほんとに?」

「ああ、本当だ」

「ほんとのほんとに? ソロアスター教の善神アフラマズダに誓って?」

「どうしてここでそんなマニアックな神様が出てくるんだよ!?」
「マニアックじゃないんだよ! アフラマズダは後のユダヤ教やキリスト教に影響を与えたソロアスター教の神様で世界的に有名な神様なんだよ!?!? 日本でも知ってる人は知ってるハズだもん!」
「残念ながら私こと上条当麻は存じ上げておりませんので誓うことはできません」

「とうまそんなこと言ってるといつか痛い目見るんだよ・・・」
と言われても既に痛い目ばかりを見まくっている上条には通用しないわけだが気にせず歩を進める。

そんなこんなでしばらく歩いてみると少し前を歩いていたインデックスが曲がり角を曲がった先にある何かを見て「あ」と短く呟いた。

「どした?」

言いながら上条が曲がり角を曲がると同時に、インデックスはある一点を指さして、

「お店閉まつてるよ?」

「なん・・・!?!?」

インデックスの指先を追ってみるとあるのは確かに明りのついていない目的地のファミレスだった。

「あつれ、さっき携帯で調べた時は閉店時間まだ先だって書いてあったのになあ」

などと推理してみるが、上条の頭ではどうしてまだ営業時間の八

ズの店が閉まっているのかの答えを導き出すのは不可能らしく、もやもやしたものが頭全体を支配する。

するとインデックスが、

「今日定休日なんじゃないかな？」

「あ……」

簡単に答えを言い当てた。

結局、この日の夕食は上条のお小遣いを犠牲にして高級食材店のステーキになり、インデックスはさぞご満悦だったという……

無能力者の日常 (8) (後書き)

作者「インデックスと上条の絡み書いてて楽しいよやほーいwww

w
w
」

そして思う、気分で始めたはいいがこのおまけコーナー的なものは
必要なのかと・・・

感想等々お待ちしております。

行間一（前書き）

行間です。

一人語りつてムズいですねw 一応名前は本文に書いてはいませんがまあ言わずとも『少女』って誰のことかわかりますよねw

ああ、あと言い忘れたのですがこの小説はあくまでも練習用なのでストーリー構成にはあまり拘ってません。（かといって本文に拘っているから文章がおもしろいというわけでもないと思われませんがw）

まあよくある展開を目標に地味に書いていきたいと思っていますw

行間一

「ただ、いま・・・」

明かりと呼べるもののスイッチが一切オンになっていない学生寮の一室で暗さのため顔も見えない少女は1人呟いた。

もちろん室内には彼女1人で、ルームメイトや親しい友達や家族といった知り合いが勝手に部屋に上がり込んで待っているということもない。

まず、そんなことはありえない。

そんなことがあれば少女が流す涙の量は大幅に減っていたはずだ。少女はゆっくりとした調子で靴を脱ぎ、廊下を歩いてリビング兼寢室の扉を開き、そのままベッドに向かって一直線で歩いて行った後、そのまま倒れ込むようにベッドに寝転がる。

前から倒れたため、自然とつぶせになり、顔が布に埋もれて息がしづらいはずだが少女はそんなことは気にせず、そのまま動かない。

そのままの姿勢で今日の出来事を思い出す。

楽しかった。始めて接する少年だったけど、彼は自分よりも別の方面で物知りで、そしてとてもおもしろくて、少し不器用で鈍感なところもあるけどすごく優しい。

そんな少年だった。

何分くらいそうしていたらだろうか、と少女は思う。

顔を横に向けて時間を確認するためポケットから2つ折りの携帯電話を取り出し、片手でそれを開いてディスプレイに表示されている時間を見る。

21時34分。

(まだ、大丈夫・・・)

こうしている場合ではない、と彼女は両手に力を込め、上半身を起こす。

が、そこで止まった。そして同時に少女は思った。

自分がここで立ちあがって何ができるのかと。

今までだって何度も立ちあがってきたし、時には人に頼ったこともあった。だが、結果は全て失敗。いや、失敗とすら呼べない。全て無意味だったと言った方が正しいだろう。

ある者は科学的にそれを解決しようとして、またある者は力づくでそれを解決しようとした。だが、そのどれもが無意味なものに終わった。

どんなに頭のいい学者でも、どんなに強大な力を持った能力者でも無理だった。

なら、こんなちっぽけな自分に何ができる？

答えなどわかりきっていることだった。

ならどうすればいいのか、答えは簡単だ。

もうあきらめるしかない。

そうすれば全てが楽になる。もう苦しまなくていいしもう苦しめることもない。

頭ではわかっていた。そうするのが一番いいのだと。

でも、あきらめられなかった。

あきらめたら、自分はもうこの街で一人ぼっちだから。味方なんて誰もいなくなってしまっから。

結局は自分のため、わがままだということもわかっている。でもあきらめたくない。たとえどれだけ他人を一時的に傷つけることになるうともあきらめてしまいたくない。

でも、結局は無意味。

実際、今回もダメだった。

何も知らない1人の少年に出会い、そして何も知らせずに別れなければならぬ。

でも、相手は絶対に別れを悲しんではくれない。悲しむ悲しまない以前に出会ったことから別れたことまで忘れてしまっから悲しむ必要がない。

そして次に会った時にはもう、自分は『はじめまして』の存在だ。
「嫌、だよ・・・」

気付けば少女は涙を流していた。涙は頬を伝い、そのままベッドの布を濡らす。そんなことはおかまいなしにまるでダムが決壊してしまったかのように少女の瞳からどんどん涙があふれてしまう。

「別れたく、ないよぉ・・・」

嗚咽混じりの悲痛な訴え。だが、それは誰の耳にも届くことはなく、ただ暗闇の中に吸い込まれていくだけだった。

行間一（後書き）

作者「鳳城の胸は大して大きくないと言いましたが小さくもありません。僕にとつて適乳なサイズを妄想して書きました。反省？ してませんよそんなのw（殴）」

次回：ただし、ひんぬーは正義であるッ！！（だが巨乳も好きだ）

感想などお待ちしておりますw

消える記憶の中心で (1) (前書き)

ついに第二章突入です。この章で上条サイドは終了となります。

しかし今になって思えば12巻みたいに一方さんと交互にやっていけば楽しかったのでは・・・w

まあやってしまったものは仕方ないのでこのまま最後までいかせていただきますけどねw

消える記憶の中心で（1）

ぐうたらと過ごした日曜日が終わり、やってきました月曜日。

今日からまた1週間学校に行かなければならないと憂鬱になった者は少なくないだろう。

もちろん上条とてその例に漏れず、いつもならかつたるい気分になりながらもしぶしぶ支度をしているのだが、今日はどこか違う。なんとなく気分が晴れ渡っていた。

「よし準備完了！ インデックス、朝飯はパンと目玉焼きでいいよな？」

と眠気を取り払おうと必死で目をこすりながらも席についているであろう少女の定位置に視線を移す。

だが、そこにいたのは上条の予想していたボケーツとした表情のインデックスとは違っていた。

代わりにそこにいたのは驚きで眼を見開いたままこちらを見ているインデックスだ。

珍しいと思いつつも、少し予想外すぎる少女の姿にたじろぎながら、

「な、なんだよ・・・」

「今日のとうま、気持ち悪いかも」

「なんつ・・・どこだ、どこが変なんだ、髪か、いや顔になんかついてるとかか、はたまた服が反対になつてるとか!？」

言いながら体のあちこちをくまなくチェックしてみるが、オールクリア。異常な箇所などどこにも見当たらない。

ならどこがおかしいのかと考えていると、まだ目を見開いたままのインデックスが、

「今日のとうま、なんか輝いてるかも・・・」

意味不明な発言を行った。

ズザザザー！ と全力で後ずさり、背後にある壁に背

中をぶつける。

「な、な、なんかおかしいモンでも食ったかインデックス！？ いやむしろ最初からおかしかったのか！？」

「そ、それはこっちのセリフなんだよ！？ いつもならぐうたらしてる私がぐうたらできないほどに今日のとうまはなんかおかしいんだよっ！？」

「自覚してたんかい！！ ならもう少し生活態度を改めなさい、つてうお！？ もうこんな時間かよ、んじゃ朝飯は置いてくからちやんと食べよ」

言いながら携帯の時計機能を確認すると既に遅刻ギリギリ。

話がややこしくなるといけないので適当に会話を切ってさっさとここを立ち去ろうとした上条だが、そこでピンポン、と玄関のチャイムが鳴った。

「なんだ、こんな時間に来るなんて珍しいな」

出るついでだから、と代わりに出ようとしてくれたインデックスを制し、少し急ぎ足で玄関へ向かう。

滑り込むように靴を履き、トントンと地面を蹴って調子確かめた後玄関の鍵を開けると、そのまま少し控えめにドアを開く。

「お、おはよ。こんな朝早くにわる」

そして閉めた。

一瞬だったが灰色のプリーツスカートに半袖のブラウスにサマーセーターが見えてしまった。その制服は上条もよく知っている名門校『常盤台中学』の制服だ。

そしてちらりと見えたあの茶色の短髪は間違いなく彼女だろう。

どうしてヤツがここにいる、これからどうする、などと上条が試行錯誤していると、ドアの向こう側から「ちよっと！ なんて閉めんのよ！ 開けなさいよコラア！！」などという名門校のお嬢様らしくない発言が聞こえてくる。

どうしたものか、と考えるがこのままでは超電磁砲をぶっぱなしでも扉を突破されそうなので、白旗を上げておとなしく扉を開く。

そこにいたのは案の定常盤台中学のエース、学園都市第3位の超能力者こと『御坂三琴』。

彼女はあっさりと扉が開いて拍子抜けしたのか、しばらくキョトンとした表情でこちらを見ていたが、やがていつも通りの強気な表情に戻って、

「何よ、今日はやけにあっさりしてるじゃない」

「朝っぱらから俺の部屋の前で騒がれたら近所迷惑なんだよ。で、今日は何の用だ？」

尋ねると、少しためらう御坂。だが、すぐに決心したのか少し視線を逸らしたまま、頬を少し朱色に染めて、

「い、一緒に学校行こうと思って・・・」

上条の思考回路が止まった。いやむしろ氷ついた。あまりの衝撃に神経細胞がいくつか死んでしまったかもわからない。

とりあえず、上条は停止した。今まで開いていたドアが自動的にバタリと閉まり、場の空気すらも凍りついた。

そんな中で上条はふと相変わらず快晴である空に移すと心の中でこう思った。

(今日、豪雨が・・・)

「で、今日はどういった要件でございませうか？」

御坂と肩を並べて歩く上条が唐突に言葉を発した。

一応上条の住む第7学区にも常盤台中学という学園都市でも有数の名門校が存在しているが、ハッキリ言うと上条の学校と常盤台中学は全く別の方向に位置しているため、ほとんど関連性はない。学生寮から学校間の通学路と帰宅路が一部重なってはいるが、それでもその道を抜ければ後は全くの別方向。常盤台の学生寮から上条の寮まで来るには相当の距離を歩く必要がある。

なのでよっぽどのがない限り上条と御坂が共に登校することはないわけのだが、何故か今日は一緒に登校することになってい

る。

だが正直御坂と上条は、お互いに頻繁に用ができるほど仲が良いというわけではないので、正直上条も何かあるのでは、と疑わざるを得ない。

そんな上条の心情に勘づいたのか御坂はギロリとジト目で上条を睨んで、

「何よ、私と一緒に登校するのがそんなに気に食わないワケ？」

「そうとは言っていないだろ、ただお前の寮から俺ん家経由で学校に向かうよりは直接学校向かった方が速いだろ？ だからなんか用でもあつたのかなーって思ってたさ」

「何の用って・・・あんたが呼びだしたんじゃない、だからわざわざ早起きしてはるばる寮から来てやったってどういうのに」

あーなるほどね、と適当に相槌を打つ上条。

だが、ふとおかしい点に気付いた。

「ちよつと待て、誰がお前を呼びだしたって？」

「だからア・ン・タ！ 昨日メールしてきたでしょ？」

「待て待て待て、俺はそんなメール送った覚えはないぞ」

第一お前のメルアド知らないし、と補足する上条。

あれ？ と御坂は小首を傾げると、ポケットから携帯を取り出し、「そういえば私も教えた覚えはないわね、でも確かに送られて来たハズなんだけど・・・」

言いつつ御坂は携帯を操作し、メールの履歴を探す。

しかし記憶にあるメールが見当たらないのか、あれー？ おつかしいなあ、昨日はあつたハズなんだけどなあ、などと呟いている。

そんなことをしている間に上条はもう一つおかしな点に気付いた。

「なあ御坂、お前なんで俺ん家の場所知ってたんの？」

思えば上条は過去に御坂に自分の家の場所を教えた覚えもないし、案内した覚えもない。

さらに御坂がわざわざ自分で調べるとは思えない。ならばどうして彼女は上条の住んでいる寮の場所から部屋の正確な位置まで知っ

ている？

質問に対し、御坂の答えはこうだった。

「はあ？ 知らないわよそんなの」

どう考えても矛盾している答え。少し間を置いた後、彼女自信もそれに気付いたのか少し戸惑った表情をしている。

何かがおかしい、まるで夏休みに海の家に遊びに行った時に起こった天使が堕ちた衝撃で人が入れ替わる事件に酷似しているようにも思える。

そして上条が知る限りでそんなことができる力といえば1つ、

(魔術か・・・?)

考えるが魔術についてはそこまで詳しくない上条では答えに辿り着くのは不可能。そう判断した上条は知識のある友人に尋ねるために学校へ急ごうとするが、そこで足を止める。

「そっぴや御坂、お前の記憶に残ってるメールには何て書いてあったんだ？」

「え？ でももしかしたら私の勘違いかもしれないし」

「いいから、教えてくれ」

遮って、やや強引に要求する。

威圧のある声に少々御坂は畏縮してしまっいしゆくたが、やがてバッグの中を漁ると、薄っぺらい何かを取り出した。

「このノート、あんたがほしいって・・・」

「ノート・・・?」

オウム返しに呟いてそれを受け取る。

何の変哲もないノートだった。表面にも裏面にも何も書いていないそれは、雨や湿気で濡れてしまわないようビニール袋に包まれていて、かなり大切に保管されてきたもののように思われる。

「なぜにノート？」

魔術的な何かかと思っただが、右手で触れても何の反応もないので

どじやら違つらしい。

「じゃ、確かに渡したから、あんたも学校遅刻するんじゃないわよ」

言うと御坂はさっさと名門学校へと向かって走り去ってしまった。唐突だなあ、と思いつつノートをもう一度見る。

相変わらず何の変哲もないノートだ。ビニール袋から取り出して中身を確認しようとも思ったが、道端でノートを読むのも何かおかしいので、それを鞆の中に放り込む。

そして時間を確認しようとポケットから取り出してディスプレイに表示されている時間を確認すると、既に予鈴の時刻は過ぎている。今頃教室では朝のショートホームルームが行われていることだろう。

「うおやっべ！ 結局遅刻かよ!!!」

やや強引にポケットに携帯を突っ込むと、上条は学校へ向けて全力疾走を開始した。

消える記憶の中心で（1）（後書き）

御坂「そういえば前回の予告にあったひんぬーがどうたらって・・・」

作者「ふうん　それは今回出てくるヒロイン（御坂とインデックス）がひんぬーだから」

この先の展開はご想像にお任せします。

感想等々お待ちしております！

消える記憶の中心で(2) (前書き)

今回は魔術サイドのお話ですねえ。『御使墮し』を例えに出してや
ってますがハッキリ言います。

説明回、苦手です!!

というわけで若干gggdしてますがまあ温かい目で見守ってやっ
てくださいw

消える記憶の中心で(2)

午前の授業も終わり昼休み。

上条は早速土御門を呼び出した。

こう見えても土御門はいくつもの組織にスパイしているエージェントで、元は魔術師だったらしく、そっちの知識については上条に比べれば天と地ほどの差があるほど詳しい。

話す機会ならば授業の合間の休憩時間があつたが、少し長い話になりそうだったので昼休みまで待つて話しかけたというわけだ。

仲間はずれにされた青髪ピアスが何かうるさかったが、適当にあしらつて購買に走るとそこでパンを購入して即屋上へ移動。そこで二人は買ってきたパンの袋を開ける。

「で、話つて何なのかにやーカミヤん。愛の告白とかだつたら全力でお断りさせていたください？」

「ああ、俺だつてそんな属性と趣味は持ち合わせてねえよ、俺が聞きたいのは魔術についてだ」

「にやー、カミヤんが魔術に興味を持つなんて珍しい、魔術師にでもなる気か？ やめておけ、カミヤんには無理だよ。二重の意味でな」

おそらくここで土御門が言う『二重の意味』というのは、単に才能がないのとこの右手に宿る能力のことだろう。当然だ。どんなに魔術を発動しようとしても、異能の力を打ち消す右手があつては『魔術』の源となる『魔力』すら精製することもできないのだから。んなこたわかつてるつての、と適当にツッコミを入れて上条は続ける。

「なあ、今日もしくはここ最近この街で大規模な魔術が発動した形跡つてあるか？」

「いや、ないな。まず魔術師が侵入すれば俺のところは連絡が来る手筈になつてるし学園都市外部で魔術を発動して遠距離攻撃を仕

掛けてきたってこともないぜよ」

「そうか、なら『御使墮し』^{エンゼルフォール}の時みたいに偶然発動できるような魔術で人の記憶をすり替える、もしくはコントローलするようなも
んつてあるか？」

「にやー、そんな術式は見たことも聞いたこともないぜよ。第一あれは本当に偶然の産物ぜよ。能力者がほとんどの学園都市で魔術の使える一般人は限られているしその人間が『御使墮し』^{エンゼルフォール}のような本当に偶然発動できるような術式を偶然発動させてしまったなんてことはありえんですたい」

ふむ、と上条は今まで得た情報を分析する。

土御門の言葉をもう一度思い出し、よく吟味してみるが、彼が嘘をついているようには思えない、それに嘘についても彼に何の利益もないハズだ。しかし、魔術でないとするなら学園都市3位ほどの実力者にまで影響を与えた力とは一体何なのだろうか。

「カミヤん、何かあったのか」

考えていると、冗談ではなさそうな上条の様子に気付いた土御門に声を掛けられる。

経緯を話そうかとも思ったが、魔術が関係していないのならば友人である土御門を巻き込む理由はない。

上条は少しの間悩み、そして、

「いや、今朝インデックスと話してた時にそういう話題が上がってさ、インデックスは専門用語ばっか使ってよくわかんなかったからお前なら知ってるかなって」

「なるほど。カミヤん、そちらのご家庭もいろいろ苦労が絶えんようですよにやー」

かくいう土御門も舞夏^{まいか}という名の義妹と暮らしているため、同じような境遇に置かれた隣人同士意気投合している上条と土御門。

二人はしばらく遠い目で空を見上げながらパンにかじりついていてたが、土御門が唐突に口を開いた。

「なあカミヤん、こんな都市伝説知ってるかにやー？」

「んあ？ なんだよやぶからぼつに。てか見た目はミーハーだけど実はそうでもないお前が都市伝説について語るのも珍しいな、」

「まあ聞け、最近学園都市で身に覚えがないのに何か物が増えてたりなくなったりする事件が多発してるみたいぜよ、といつても宝石がなくなったりとかゴミが増えてたりとかそういうタチの悪いモンじゃないらしい」

「不思議なこともあるもんだな。どうせ能力者の仕業じゃねえの？」

「それがまだわかってないらしいみたいだよー。なんか学園都市の能力者が何人協力しても不可能って話みたいでいろいろ手こずってるって話ですたい」

ま、衛星で見張られてるしな、と適当に返す上条。気にせず土御門は続ける。

「実はな、カミヤん。今朝ウチのクラスでその都市伝説と同じようなことが起こったんですたい」

「はあ？ 俺そんな話聞いてねーぞ？」

そりゃカミヤん遅刻してきたから知らないだろうにやー、と土御門は適当に説明して、

「今朝、教室に誰のものかわからない席が一つ。小萌先生も誰のものかわからないって言うから結局他の教室に運ばれることになったんですたい」

何か嫌な予感がした。別に文脈に何かがあつたわけではなくただの直感だが、嫌な汗がつー、と上条の頬を伝ってコンクリートの地面にポタリ、と落ちる。

そんな上条の心情など知らずに土御門はわりと軽い口調で、

「でな、その都市伝説で増えた物のノートやメモ帳から共通する名前が書かれていたらしいんですたい。でもその名前は書庫バンクには登録されてないんだにやー」

「誰、なんだよ・・・？」

嫌な予感を抱きつつも上条は土御門に尋ねる。

土御門は一拍置くと、まるで迫真の演技を決め込むように、その答えを告げた。

「『鳳城白無』ほうじょうしるななきって名前ですたい」

するり、と上条が右手で持っていたパンが音も立てずにコンクリートの床に落ちた。

不思議に思った土御門は、彼にしては珍しく若干慌て気味な調子で、

「どうした、カミヤん？」

だが、それは上条の耳には届いていない。少し間が空き、ようやく上条の口が動く。

「土御門、お前知らないのか・・・？」

「な、何を？」

「クラスメイトに『鳳城白無』ほうじょうしるななきっているだろ、控えめでおとなしい黒髪ツインテールの・・・」

だがそこで土御門は怪訝な顔をした。

そして次に彼はこう言った。

「カミヤん、俺はクラスメイトの名前と顔は全て記憶しているがそんな名前聞いたこともないぞ？」

今度こそ上条の全身が完全に停止した。

彼の全身から嫌な汗が噴き出る。顔が真っ青なところを見ると、おそらく吐き気すらしているのだろう。土御門が何かを言っていたような気もするが上条の耳には届いていない。

(どういっ、ことだよ・・・)

関連性があるかどうかはわからないが今朝の御坂といい、土御門といいやはり何かがおかしい。

学園都市の超能力者やプロの魔術師ですら影響があるというのに、

何の変哲もない高校生である上条に影響がないのはおそらく彼の右手に宿る幻想殺しイマジンブレイカーのおかげだろう。

しかし、それほどの影響を与える何かが起きているのは確かだ。

そんな中、予鈴のチャイムが鳴り響いた。

それがきつかけとなり、上条の全身に少しだけ力が戻る。ここで考えていても仕方がないと判断した上条は、心配そうにしていた土御門を『何でもない』と片手で制すと、ふらふらと教室に向けて歩きだした。

消える記憶の中心で(2) (後書き)

作者「ツエーイ　こつから先は一方通行だ、おとなしく全文読んでエ、次の話もゆつくり読んでいきやがれエ!!!」
最近一方さん書いているためだんだん影響され始めた作者。

次回：ロリコンホイホイ

消える記憶の中心で (3) (前書き)

最近ファッションについて研究中。

家族にバレぬよう女性のファッション誌に載ってるようなモデルの画像を見漁るのはかなり精神力を抉り取られます。

消える記憶の中心で(3)

午後の授業は何事もなく終わり、放課後。

結局、考えはまとまらなかつた。

土御門の言った通り鳳城の席はもの見事に無くなっており、クラスの皆様は誰も彼女のことを覚えていない。さらに彼女自信も今日学校に来た形跡はない。

あまりにも異常な光景だった。

ほうじょうじつらなき
『鳳城白無』。

彼女は一体何者だったのだろうか。そして彼女は今どこにいるのだろうか。

放課後の誰もいなくなった教室で席に座り、1人考える。

ちらり、と横目で鳳城の席があつた場所を見るが、そこには虫食いのような空白があるだけ。いずれ席を詰めたりしてその虫食いは埋められるだろう。

「上条ちゃん？」

不意に廊下から声をかけられた。

ここが普段の教室だったなら喧騒にまぎれて聞こえそうにない程度の音量だったが、今は放課後で人がいないため、その声は鮮明に上条の耳へと届いた。

その声の主は、

「小萌先生・・・？」

教室のドアの前、そこにいたのは小学生くらいの少女　に見える担任教師だった。

彼女は何の迷いもなく教室に入ると、とことこと上条のいる席へと接近してくる。

「上条ちゃんがこんな時間まで残ってるなんて珍しいですね、一体どんな悪たくみをしてやがったんですか？」

「してません！」

思わず机を叩いて反論。

しかし彼女は動じることなく上条の前の席のイスを普段向いている方角とは逆の方角に向けると、まるで今から面談でも行われるかのように席に座る。

そんな教師に対して上条は不良生徒らしく肩肘をつき、割とぶすつとした表情で、

「何か用事があつたんじゃないんですか？」

「通りかかっただけなのです」

「んじゃ、なんかこの後やるべきことがあるんじゃないんですか？」

「この後は帰るだけなので暇といえば暇なのです」

「さいですか・・・」

露骨に1人にしてくださいオーラを放つ上条だが、気付いているのかいないのか、彼女は全く退く気配がない。

しばらく沈黙が続いた。

時計の音のみが教室内を支配していて、他の音は全くと言っていいほど聞こえてこない。

「何か悩み事ですか？」

そんな沈黙の支配を破つたのは小萌先生の声だった。

彼女は肩肘の上条に対し、机に両肘をつけていて、指を軽く絡めて接合した両手の上に顎を乗せてこちらをじっと見つめている。

「いえ、特に何も」

しかし、上条はあからさまな嘘をついた。別に教える気もなかったし、なんとなく一人で居たい上条にとっては、小萌先生は嘘をついてでもさっさと話を終わらせて出て行ってほしいと思えるような存在だ。

すると嘘をつかれた方の小萌先生は、少しむすつとした表情で、

「嘘はよくないのですよ？ 私はこれでも先生なのですから生徒である上条ちゃんはどうも先生に頼っちゃっていいのです」

言われても見た目がどう見てもリコーダーを差したランドセルを

背負っているような小学生にしか見えない女性に頼る気にはならない。それに頼ったところでどうにもならないだろう。彼女とて例に漏れず鳳城の存在を忘れていたのだから。

「んじゃあ鳳城白無って女の子いたの覚えてます？」

だが、何故か上条は口を開いていた。

意味がないとわかりつつも、まるであきらめられないといったように。

「えーっと、鳳城白無さん……ですか？ 残念ながら先生の記憶にはないですねえ」

案の定、小萌先生は鳳城のことを覚えてはいなかった。記憶力のいい彼女でも覚えていないということは単にクラスの全員がおバカで忘れてしまっているというわけではないのだろう。

「で、ほうじょうしらなきさん……でしたっけ？ がどうかしたのですか？」

「いえ、知らないのならいいんです」

丁寧に応えるが心の中は相当ささくれている上条。

そんな上条の心情を察してか、小萌先生はえっへんと胸を張って、「上条ちゃん、これでも先生は女性なのですよ？ そのほうじょうさんとの間に何があったのかは知りませんが女性絡みの相談ならばバッチこいなのです！」

と自信満々に言う見た目小学生の女性一（年齢不詳）。

多少やれやれ、といった風の上条が口を開く。

「先生、人の記憶を操作する能力つてありますか？ 例えば集団の記憶を一夜の内に消すとか誰かから送られてきてもないメールが送られてきていたという記憶をまぎれこませるとか」

「記憶操作の能力……ですか？ ないことはないですよ」
ただ、と彼女は簡単に補足して、

「上条ちゃんの言うレベルになると軽く一超能力者（レベル5）の領域になりますね、学園都市に記憶操作系の能力者ができるのはせいぜい何時間かかけて記憶をプログラムのように構築し、その対

象の人物に触れることによってやっと一人分の記憶をすり替えることが可能なのです。消す場合は対象に最低でも10分間は触れながら演算をしないといけないのでとても実戦で使えるレベルではないのですよ」

という小萌先生の話を聞いて、何でもありだなこの都市はと思うが、いずれも違う。今起こっている現象に一致しない。

ならやはり魔術なのだろうか、と上条は考えるが、その可能性は極めて低い。

そこで上条の視線がある一点で止まった。

机の上に雑に置かれている鞆。その中からはみ出しているビニール袋に包まれた一冊のノート。今朝御坂から渡された何の変哲もないノートだ。上条はそれを手に取り、ビニール袋からノートを取り出す。

何ですかそれは？ と興味津々にノートを見つめる小萌先生を無視して最初のページを開くと、そこに書かれているものは日記だった。整えられた文字に整えられた文字列。それら全てに上条は見覚えがある。

夏休み最後の日、終わらない宿題の一部分を学園都市3位の少女が、いと簡単に解いた時の文字、つまり御坂三琴の文字だ。

(御坂の日記・・・?)

読むのも気が引けたので、パラパラと適当にページをめくる。

だが、半分を過ぎたあたりで日記は途切れてしまっていた。後のページは全くの白紙だ。

白紙のページを順にめくり、日記が書かれている最後のページを開く。そこには何か水滴のようなものがこぼれた跡が2、3か所あった。

妙だと思い、存分に気が引けたが思いきって日記を読む。

そして、文章の中に整った字で書かれてある名前を発見してしまった。

「……先生、ちょっと1人にさせてもらっていいですか？」

ポカン、と一瞬小萌先生が拍子抜けしたような表情をした。だが、すぐに理解してくれたのか、席を立ちあがって教室を出ようとす。しかし彼女は教室の入り口付近で止まると、こちらを振り向いて、
「ちゃんと決着はつけるのですよ？ あと、無茶だけはしないように」

とだけ言うと、教室を出てそのまま廊下を歩いて行ってしまった。上条は心の中で小萌先生に一礼して、廊下を歩く足音が消えたのを確認すると、再びノートに視線を下ろし、読み始める。

窓から差し込むのは茜色の光。時刻は既に午後5時を回ろうとしていた。

消える記憶の中心で(3) (後書き)

黒歴史とはなくてはならないものである。人類はそこから学び、そして成長する。さあ、お前の黒歴史の数を数えろ・・・
スタッフ「あ、このセリフ黒歴史に加算されますんでー^q^」

次回：上条さんってさ、マラソン選手になれば活躍できる気がするんだ。

消える記憶の中心で(4)

時刻は午後9時を回ろうとしていた。

既に暗闇に支配された夜の学園都市を上条は走る。

あの後、結局完全下校時刻まで学校に残ってノートを読み続けていたが、おかげでいろいろなことがわかった。

まず、鳳城はやはり記憶操作系の能力者だったということ。

もう1つは、御坂三琴と鳳城白無は過去に出会っていたということ。

そして、もう1つ。最も重要なことが書かれていた。

(この日記に書かれてることが本当なら ツ!!)

彼女と最後に会ってから既に約2日が経過している。

もしかしたら彼女は既に他の学区にいるかもしれない、最悪、街の外に出てしまっているかもしれない。

最悪の展開が頭を過る。

それを必死に振り払い、上条は第7学区を探しまわる。

地下街、公園、ペアを組んでゴミ拾いをした地域。

そのどれもが鳳城と共に訪れた場所だが、彼女はどこにもいない。

(どこに行った・・・? ちくしょう!!)

再び探すために走り出そうとする。

だが、そこで上条はある場所を思い出した。そう、あの日鳳城と共に訪れた最後の場所。

(高台か ツ!?)

踵を返し、高台に向かって全力で走る。

そこで、携帯に着信が入った。出ている場合ではなかったが、何となく出ないのは失礼な気がした上条は、走ったままポケットから携帯を取り出し、通話ボタンを押すと、それをそのまま耳に当てる。

「は、はいもしもし!」

『わっ! 何よあんた、どうしてそんなに息切らしてんのよ!』

声は女性のものだった。口調と声色から察するに、

「み、御坂か・・・こちら、ぜえ、全力、はあ、疾走中なんです！ げほっげほっ！！」

『ちよ、ちよつと、大丈夫なの？』

普段不良少年に追われた時に逃げ回っているため体力には自信があつたが、流石に話しながら全力疾走するのはキツイので、少しだけスピードを落とす。

「大丈夫だ。で、何の用だ？」

『ならいいけど・・・用ってほどのことじゃないんだけどね、今朝あんに渡したノートの件』

「ああ、あのノートか、それがどうした？」

喋っている間に高台に上る階段の前まで辿りつく。

正直通話しながらこの階段を走って上るのはかなり辛いが、とにかく時間がないため、階段をのぼりながらも通話を続ける。

『私あのノート持ってた覚えはないけどさ、何が書いてあったの？』

「ああそりゃ覚えなだらうよ、中身はお前の恥ずかしい日記だ！」

その言葉を聞いて御坂がブツ！ と軽く嘖き出す。

『やっぱりか・・・そのノートから千切れた1ページちぎが発掘されたのよ、さっき』

「何だ知ってたのかよ、ならそこまでわかりやすいリアクションする必要もなかっただろ、要件はそれだけか？」

『あゝ待つて切らないで。その千切れたページちぎなんだけどさ、なんか妙なことが書かれてるの』

「妙なこと？」

『うん、私が鳳城ほうじょうって子とある場所に行ったって・・・でも私鳳城なんて子しらないしその子とどこかに行った覚えもないのよね』
そりゃそうだろうな、と上条は心の中で吐き捨てる。

そうこうしている間にも上条は高台の頂上へと辿り着いた。

膝に手をつき、軽く息を整えながら辺りを見渡す。
だが、

(いな、い・・・?)

そこに少女の姿はなかった。それどころか、人と呼べるような影が1つも存在していない。

あるのは眼前に広がるネオンやビルから漏れる照明の光で装飾された学園都市の風景のみ。

強烈な絶望感が上条を襲う。

やはり既にここにはいないのか、あきらめて別の学区か学園都市の外に出てしまったのか、そんな考えが現実になってしまったように思えた。

『ちよつと、聞いてんの!? おーい!』

スピーカーフォンになってるわけではないが、周囲が静かなため、膝についた手で持っている携帯電話から漏れた御坂の声が上条の耳に届いていた。

息が整ったのを確認し、携帯を元の位置に戻す。

「ああ、聞こえてるよ。んで何の話だっけ?」

『うわ、何よアンタその絶望感にまみれた声は、何かあったの?』

「なんでもねーよ、要件済んだなら切るぞ」

『だからまだだってば! ノートから千切れたページに書かれた内容の話よ!』

ああ、はいはいさいですかーと棒読みで相槌を打つと上条は高台の階段をとぼとぼと歩きながら下る。

そんな上条の姿も知らずに、御坂はコホン、と1つ咳払いをして、『私がお子と行った場所ってというのがどうも明確に書かれてなくてね、例の屋上としか書かれてないのよ、多分そのノートに詳しい場所書かれてると思うから調べてみてくれない?』

「はあ? 今から!? つかなんでお前がそんなことに興味あるんだよ」

『わかんないわよ、ただ何となく気になって・・・』

そこで御坂が言い淀む。別に探すのは構わないが、今この場で探せ、と言われたらそれは無理難題だ。この高台は学園都市の比較的郊外に位置しているため、街灯の類はかなり少ない。

そんな中でノートに書かれたある場所を探せと言われても無理がある。

まあ帰ったら探してやるよ、と返事しようとして、上条はふとあることに気がついた。

「おい御坂、お前の探してほしいものって何だ？」

「え？ だから例の屋上・・・」

「つまり場所か、そこってどこだ!？」

「知らないわよ、だからあんたに探せって言ってるんじゃないのよ!?!」

言われて上条は急いで階段を下りる。

ビルのような多くの建物が並ぶこの街で一言に『屋上』と言われてもそれがどこの屋上なのかを特定するのはまず不可能だ。

詰まるどころ、その場所を特定するにはノートから手掛かりを得るしかない。

もしノートにその場所が書かれていたとしてもその場所に鳳城がいるという保証はない。しかし、可能性がある場所は全て当たっておきたい。

「すまん、今急いでるから見つかったらまた電話する」

『あ、ちよ』

一方的に通話を切る。上条は適当に明るいとこを探し、人通りの多い道路の脇にある深夜まで営業していて、明かりも点いているファーストフード店のウィンドウにもたれかかると、鞆からノートを取り出してページをめくる。

しかし数ページあるノートを1からずつと読み返していくのは多少時間がかかりすぎる。

よって上条はノートが干切られた跡のあるページを探し、そこから遡って例の場所を特定する作戦を決定していた。

パラパラと急ぎ足でページをめくり、そして

消える記憶の中心で(4) (後書き)

ついに裏で書いているとあるPSも4章に突入しました。

鳳城も魅力的ですが一方通行編のヒロインもなかなか魅力的・・・
だと思っので楽しみにしててくださいね！

え、いつものふざけたコーナーはどうしたのだった？ ふうんた
だのネタギレさ！

次回：知ってるか、人間って跳べるんだぜ？

7月22日

消える記憶の中心で(5) (前書き)

え、この小説はあくまで練習用であり、ストーリーにはあまりこだわっておりません。

今回トンデモナイことを言うキャラ(というかキャラ自体がトンデモナイ)がいますが原作には全く関係ありませんのでご了承ください。

では、とある魔術の禁書目録SP上条編、全ての謎が今回で明かされます。

・・・と言いつても思っていたのか？(笑)

消える記憶の中心で(5)

鳳城白無は街外れにある廃墟と化したビルの屋上の落下防止用の手すりに座って、一人明るい学園都市を眺めていた。

この廃墟ビルは過去に多少危険な実験をしていたのか、比較的街から遠ざかったエリアに建っているため、周囲はとても静かで、聞こえてくる音は虫や鳥の鳴き声といった自然が生み出すBGMだけだ。

一応この場所は学園都市内部で、エリア的には第7学区に指定されているが、都市内でこのように自然が残されている場所というものはごく稀だ。道路が敷いてあるため来るとはたやすいが、こんな場所に好き好んで来る人間など自分以外に誰もいない。

故に少女はこの場所が一番気に入っていた。
視線を街の風景から夜空へと移す。

星が綺麗だった。

基本的に排気ガスばかり放出している学園都市でここまできれいな星空が見える、というのはいささか不思議にも思えるが、少女は気にも留めない。

きれいに晴れ渡った星空を見上げながら、思う。

(上条くんにも、この場所を教えてあげたかったなあ・・・)
思い出すのは一人の少年。

過去にこの場所に案内したことがあるのはたった一人だけ。基本的にこの場所は荒らされたくないのので、教えるのは自分が心を許した人間のみ限定している。

だから、今頭の中に思い浮かべている少年にはこの場所のことを教えていない。正確には教えても良かったが、教えている暇がなかったというのが正解だ。

(まあ教えてもすぐ忘れちゃうから別にいいんだけどね)
思わず苦笑い。

涙すら溢れそうになったが、少女は必至にこらえようと頭をブンブン！ と横に振る。

なんとか涙をこらえることはできたが、代わりに出てきたもののため息。

「だめだなあ・・・私」

もう一度ため息、特徴的な短めのツインテールが少し揺れる。

無理だとわかっていたはずだった。不可能なんだと理解していたはずだった。絶対に後で後悔すると考えていないわけではなかった。それでも、再び能力を使って一時的に人の輪に入ったのは自分自身だ。

だからこれは完全に自業自得。そんなことは百も承知している。

「あ、はは・・・」

そんな自分を嘲る^{あざわら}ように笑おうとする。もうあきらめろ、と必死で言い聞かせようとする。

「あは、あはは・・・うぐ、ひっ、あは、うっ・・・」

しかし、できなかった。何度も笑おうとするが、溢れ出る涙のせいでどうしても嗚咽が混ざってしまう。

バランスを取るために手すりに置いていた手を離し、両手で顔を覆う。

不安定な体勢になってしまったため、ヘタをすれば落ちてしまう危険性もあったが、少女はそれでも構わないと思った。

このま目前に落ちて死ねば楽になる。後ろに落ちて最悪頭を打って死んでも楽になる。

ただ自分からそれを実行するのは怖い。だからこそ自然に全てを任せてしまう。

そんな自分が嫌いだった。

「は、う、うああ・・・うあああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

ついに少女は泣き崩れてしまった。一度こうなれば後はダムが決

壊したように涙が溢れ出るのみ。

救いはない。この涙を止めてくれるヒーローのような人間などもはや存在していない。

そう思った直後、ボタン！ と勢い良くドアを開いて1人の少年が屋上に侵入した。

驚いた鳳城は、『ひゃあっ！？』と短い悲鳴を上げて後ろに落ちそうになるが、なんとかこらえる。

涙を拭き、ゆっくりと後ろを振り向くと、そこには

「やっぱ、ここか・・・」

上条は息を切らせながらも呟く。

目の前にいたのはよく見知った少女。だが、その姿を見るのはずいぶんと久しいような気すらしていた。

ドアを開けた拍子に座っていた落下防止用の手すりから屋上に背中から落ちそうになっていたが、なんとかふんばることに成功したらしい。

彼女は涙を拭くような動作をした後、ゆっくりとこちらに振り向く。

案の定、目は真っ赤に充血していた。泣いたような形跡すら窺える。

そんな彼女がまず最初に浮かべた表情は驚愕。その後に歓喜。だがそれはすぐに消え、代わりに憂いた表情が浮かぶ。

彼女はそのまま顔をまた学園都市の方へと向けると、再び涙を拭くような動作をしてから少し間を置いて、

「いい夜ですね」

他人行儀な言い方だった。やはり彼女は全てを知っている。だからこそ、そんな口調で話しかけているのだ。

上条がまだ覚えていることを知っているのか、それとも知らない

のか、それについては触れずに彼女は続ける。

「ここ、私のお気に入りの場所なんですよ、もしかして貴方もそうでしたか？ すみません、貴方のお気に入りの場所に勝手に入ってしまったって」

淡々と、彼女は次々と言葉を繰り返す。

「そうだ、お詫びと言っては何ですが一つお話・・・聞いてくれませんか？」

「もういいだろ」

そんな彼女を、上条は止めた。

ムカついていた。つい一昨日まで一緒に遊んでいた友達が、急に他人行儀な態度になってしまっていることに。全てをあきらめてしまっている彼女自身に。そして、そんなことになってしまっていることに気付けなかった自分自身に。

「もういいだろ、鳳城」

鳳城の肩がピクリと震えた。

彼女はゆっくりと落下防止用の手すりから降りて屋上に立つと、

「どう、して・・・？」

「俺の記憶は消えてねえ、ただお前が勝手にあきらめただけだろ。つたく確認も取らず勝手に消えたって決めつけてこんなところで一人落ち込んでんじゃねえよ」

上条は自分の右手を提示するように少し上げて、

「この右手。幻想殺イマジンプレイカーしつてんだけど、コンクリートの壁数十枚ぶち抜ける一能力者（レベル5）だろうが神様の奇跡だろうが、それが『異能の力』であるならこの手で触れただけで打ち消せることができる俺自信もよくわかってねえ能力だ。例えばそれがランダムに記憶を消したりありもしない過去を記憶にすりこむ能力だったとしても例外じゃねえ」

ちなみに、と彼は左手に持っていた一冊のノートを提示して、

「ここに辿り着けたのは御坂の日記が書かれたノートのおかげだ、このノートのおかげで全てわかった」

「そう、なんだ・・・」

鳳城は、くるりと体を回転させて上条に背を向けると、

「じゃあ、私の能力ももうわかっちゃってるんだ・・・」

上条は少し間を置いて、

「記憶操作・・・」

「うん、それも書庫バンクには登録されてないレベルの・・・ね」

鳳城の言葉に、上条は怪訝な表情を浮かべて、

「どうしてお前の能力が書庫バンクには登録されていないんだ、お前はこ
の街で開発を受けて発現した能力者なんだろ？」

「私のデータは抹消されたの。あまりに大きすぎる力だから秘密
裏に実験を行うために」

「大きすぎる・・・？」

「御坂さんのノートには・・・書かれているわけがないか。彼女
には私のレベルは教えてないもんね」

鳳城はフェンスに両手で持つと、そのまま腕に体重を預ける。

そして大きく息を吸うと、

「私の能力は絶対能力者（レベル6）の『記憶操作』メモリーロスト。・・・現
在のこの街の技術ではまだ発現不可能と言われている力」

「な　ッ！」

上条は思わず絶句した。

確かに大きな力の持ち主だということは知っていた。だが、それ
ほどまでに強大な能力だとは予想すらしていなかったからだ。

鳳城はくすりと笑って続ける。

「だって、この街にいる一番レベルの高い記憶操作系の能力者で
すら数分間対象に触れてやっと記憶を消せるのに、そのノートにも
書かれていた通り私の場合は一瞬で、しかも大人数の記憶を一気に
消すことができる。そんな神様みたいな能力がたったの超能力者（
レベル5）ですなんて言われて納得する人なんていると思う？」

確かにその通りだ、と上条は思う。『記憶を消すこと』のみなら
もしかしたらレベル5の時点で可能かもしれないが、彼女の能力は

あくまで『記憶操作』だ。一無能力者（レベル0）の上条では能力者の頭の中で行われている『演算』というものがどういったものなのかはわからないが、記憶のすり替えや、一斉消去などという複数の人間を対象にした能力は、膨大な量の計算が必要だということが予想できる。

だが、それでもまだ多くの疑問が残る。

御坂の日記に書かれたあったこと。その中でも最も重要な部分。

「じゃあどうしてお前はいちいちこれまで触れ合ってきた人から記憶を消すんだ？」

「私が消してるわけじゃないよ」

彼女はあっさりと答えた。

「ううん、正確には私の意思で消してるわけじゃない・・・かな」

「どういうことだ？」

「ノートには書いてなかったんだ・・・」

えっとね、と鳳城は前置きして、

「私の能力は一定周期で自動的に私に関わった人の記憶を全部削除しちゃうんだ。もちろん、私に関する記憶のみ、だけだね」

言いながら、鳳城は再び踵を返してそのまま落下防止用の手すりの上に再び座る。さつきと違うのは向いている方向が逆ということぐらいだろう。

彼女はその体勢のまま、優しい笑みを浮かべると、

「ねえ上条くん、今まで友達だった人が次の瞬間には他人になっちゃってしまってる・・・。それってどれだけ悲しいことかわかる？」

それを聞いて上条は驚いた。と、同時に納得した。

鳳城白無は上条と似ている。ただ、忘れるか、忘れられるかの違いだ。今までの既視感デジャブもそこから来ていたのだろう。

つまり、上条は記憶喪失だ。これは自分が周囲を忘れただけであって、それを悲しむのは自分自信ではなく周囲の方だ。

逆に、鳳城は周囲が自分を忘れてしまう。誰もそれを悲しんでもくれないし、誰も手を差し伸べてくれない。悲しむのは自分一人。

だが、その差はあまりにも大きい。自分一人の記憶がなくなるだけならまだ周囲が手を差し伸べて救ってくれるが、周囲が自分一人を忘れた場合は、その人物は救いの手を差し伸べられることなく一人ぼっちになってしまう。

どちらが辛いかと問われれば、それは言うまでもなく周囲に忘れられてしまった場合だけだろう。

「今まであきらめずにがんばってきた、何度も何度も『私がそこにいた』という記憶をすりこんで救いがある場所を求めてきた……」

彼女の言葉に淀みはない。それほどにまで、彼女は苦しんできたのだろう。

「でも結局ダメだった。大きすぎる私の力を止めることはできなかった。どんなに偉い研究者でも、どんなに強い力を持った能力者でも不可能だった。そして私のためにがんばってくれた友達と別れるのが辛かった……」

彼女の顔が俯く。

「笑える、よね……学園都市が掲げる最終目標スローガンがこんなだなんて。神様みたいな力を持つてるのに何もできないなんて。大きな力を持ちすぎた結果が、これだなんて……」

鳳城が俯いていた顔を上げる。

月明かりに照らされて見えたその表情は、涙でぬれてしまっていた。

ボロボロと、今まで溜まっていたものを吐き出すように、言葉と涙は溢れ出る。

しかし、これで全てわかった。

上条はスウー、っと、大きく息を吸う。

そしてその後、吐きだす動作の代わりに上条は言葉を発した。

「あのさ、俺の記憶は消えてないんだけど」

極めてあきれたような口調で、たった一言。

それだけで、鳳城の瞳から溢れていた涙が止まった。

気にせず上条は続ける。

「ああそうだよ、お前の力は強すぎる。偉い研究者でも強い力を持った超能力者でもない普通の高校生の俺がどうにかできるもんだとは思わねえ」

けどな、と上条は付け加えて、

「せめて俺一人の記憶を消せないようにすることはできるぞ？

この右手を使えば、な」

それはとても簡単なことだった。ただその右手が上条の体の一部である限りは、上条は決して鳳城白無という少女のことを忘れることができない。

たとえ他の人が忘れてしまっても上条一人だけはずっと覚えていられる。

「俺一人じゃお前の要望は叶えてやれないかもしれないしこの先お前を救ってやれる保証もない」

それは本当にちっぽけなことかもしれない。結果的に少女を救ったということにはならないのかもしれない。

「けどさ、その代わり俺だけは絶対にお前のことを忘れない。いつまで経ってもお前の友達でいてやる」

それでも、鳳城を少しでも救ってやることができれば、と上条は思う。

だから言葉を紡ぐ。

「それじゃ不満か？」

鳳城はしばらく驚いたように目を見開いていたが、やがてそれは笑顔に変わり、上条の質問に対し、彼女はこう答えた。

「ううん、全然不満なんかじゃないよ。ありがとう、上条くん」

月明かりに照らされたその笑顔はとても綺麗だった。

思わず見惚れてしまいそうになったが、そこで鳳城のツインテールがかすかに揺れた。

精一杯の声で叫んだ。

それを聞いた鳳城は、自らの持てる全力の力を使って、小さな手を伸ばす。

だが、上条にとってはそれだけで十分だった。

伸ばされた手を強引に掴み、そのままその手を引っ張って自分の方へと鳳城の体を持ってくると、庇うように左手で頭を抱えて右手を腰の後ろへ回す。

同じように鳳城も両手を上条の背中に回したため、自然と抱き合うような形になるが、今はそんなことを気にしている場合ではない。意外と高さのあった闇も、そろそろゴールが近い。

下にあるのはコンクリートの地面と景観にこだわって植林された人工樹のみ。このまま一直線に落下すれば間違いなくコンクリートの地面に頭から着地して助からないだろう。

それでも構わず、上条は鳳城を抱える力をぐっ、と強めて目を瞑る。

せめて、この少女だけでも助かるようにと。

そんな時だった。

ひょう、と。強風が吹いた。

落下中のため、上条は気付かなかったが、その風が幸運した。

強風は横向きに吹いたため、上条達の体は横に流され、人工樹の方へと進路が変わる。

そしてそのまま落下。

枝を折り、葉っぱが舞い散り、しかしそのおかげで減速した上条と鳳城はそのまま地面に着地する。

「がはっ！」

体中の酸素が一気に吐きだされる。

背中から落ちたため、ダメージは幾分軽減されたが、それでも大きい。

なんとか体を起こそうとしたが無理。いわゆる満身創痍だ。

鳳城を抱えていた腕の力が一気に抜ける。おかげで解放された鳳

城は、ガバツ！ と起き上がり、すぐさま上条の横へと移動する。

どうやら上条の体がクツションになり、そのおかげで彼女のケガは枝に引っかけた時の切れ傷ぐらいだ。

「上条くん！？ 大丈夫上条くん！？」

見ると制服もボロボロになっていて鳳城だが、そんなことも気にせず上条の頭の後ろを持って、体を揺らす。

こういう時体を揺るのはあまりよろしくないのだが、それほど必至なのだろう。

だから上条は笑顔で答えた。

「ああ、なんとかな・・・」

「よかった・・・」

彼女は安堵の息を吐くが、同時に出てきたのは涙。

ポロポロと、それは上条の頬に落ちてくるが、彼は気にしない。

それどころか唇の端がわずかに歪んでさえた。

「どう、して・・・？ どうして私のためにそんな無茶ができるの？ どうしてそんなにボロボロになって笑ってられるの・・・？」

涙を零しながら彼女は問う。

それに対し、上条はやさしい笑顔を浮かべて、

「決まってるんだろ、友達だからだ」

その後、鳳城が泣き崩れるのを確認すると上条の意識はゆっくりと闇の中へと沈んでいった・・・。

消える記憶の中心で (5) (後書き)

...

次回：上条サイド終了

消える記憶の中心で(6)(前書き)

後日談です。面倒なので一気にうpしました。

ひとまずここで上条サイドは終了です。お付き合いいただきありがとうございますとづいづいしました！

上条サイドを書いた感想などはあとがきとしてまたうpしようと思
います！

消える記憶の中心で（6）

次に上条が目を覚ましたのはいつもの病室だった。

彼は意識が完全に戻ったことを確認すると、ゆつくりと上半身を起こそうとしたが、体中が痛んだため断念して再び楽な体勢へと戻る。

横になったまま首だけを動かして周囲を見回してみるとやはりそこはもはや見慣れたいつもの病院のいつもの病室。ずっと意識を運ばれて来た時の記憶はないため、どうやってここに運ばれてきたのかは知らないが、おそらくあの後鳳城が救急車を手配してくれたのだろう。

だが彼はそんなことはどうでもいい、という風に唇の端を少しだけ緩めると、少しだけ開いている窓の外の景色を見て安堵の息を漏らす。

窓の外はこれでもか、というほどの快晴だった。

まるで、鳳城と最初にボランティアに参加したあの時のように。そんな時だった。病室のスライド式ドアが音を立てて開くと、一人の少女が病室の中に入って来る。灰色のプリーツスカートに半袖のブラウスにサマーセーター。黒い髪はツインテツでまとめられている、束ねられた髪は肩のあたりまで垂れ下がっている。

服装こそ違うものの、その少女は上条のよく見知った顔だった。

名前は『鳳城白無^{ほうじょうしらなき}』。今は上条を除く世界中の人間から忘れ去られた学園都市の掲げる最終目標^{スロガン}、絶対能力者（レベル6）の少女。

彼女は律儀にもドアをきちんと最後まで閉めると、こちらを見て短い声を漏らす。

それに対し上条は少し痛むのを気にせず右手を軽く上げると、

「よう、お見舞いか？」

「うん。意識戻ったんだ・・・お医者さん呼んでこようか？」

「いやいいよ、そこまで深刻なケガでもなさそうだし呼ぶなら自分でナースコールすればいいだけの話だ」

「そっか、そうだね」

納得したのか、彼女はゆっくりと上条のベッドへと近寄ると、壁に立て掛けてあったお見舞いに来た人が座る用の折り畳み式のパイプイスを広げると、そこにちょこんと座って、

「あ、ごめんね。お見舞いって言っても今日は何も持ってきてないの」

「別にいいって。今持って来られてもこんなだからもの掴んで食べるなんてこともできないし」

「そ、それもそうだね！」

何故か妙に鳳城が慌てている。不思議に思う上条だが、当の本人はなんか「あゝあ、やっぱり何か持つてくるべきだったかなあ、せっかくお決まりのアレをやるチャンスだったのに・・・私のバカ！」などと何やらブツブツと呟いているため、謎は増える一方だ。

「鳳城？」

「あ、あゝ！　そ、そういうえば今日は上条くんに聞きたいことがあつて来たんだ！」

妙にハイテンションな控えめ少女。ますます謎が深まったが、話題を変えようと試みていることだけは上条にも理解できた。別に深く追求する気もなかったなので、そのまま黙っていることにする。

鳳城はしばらく考えるような素振りをしていたが、やがて何かを思いついたのか顔を上げて、

「え、えつと・・・そうだ、そういうえば上条くん。私が記憶操作系の能力者だつていうのは既に知ってるとは思うけど、その能力を使って上条くんのクラスに入り込んだのは夏休み明けからなんだよね。でも上条くんにはその右手があつて私の能力が通用しないはず・・・。だったらどうして私が夏休み明けからクラスに勝手に入りこんでいたことに気付かなかったの？　本当に記憶が何も変わってないなら普通気付くと思うんだけど・・・」

「あ、あゝ、それはだな・・・」

困ったことになった、と上条は鳳城から目を逸らす。

その理由を簡単に言ってみると、上条は夏休み中に記憶を失ったため、夏休み前に会ったクラスメイトの顔は覚えていない。つまり9月に新学期が始まり、ほぼ入学気分です学校に来た上条が、教室にクラスメイト以外の人間がちやっかかり紛れ込んでいたとしても、ほぼ全員と初対面のため、気付くことなどできないのだ。

と、言ってしまうえば話は早いのだが、上条はこの記憶喪失のことをあまり他人には話したくない。

さてそうしたものかと考えていると、怪訝な顔をした鳳城が、

「もしかして上条くんって究極の天然さん？」

ことごとくわけのわからない発言だった。どっちの方が天然だ！と思わず叫びそうになったが、これを利用しない手はない。

よって上条は、

「そういうことにしておいてくれ・・・」

うなだれる上条と、苦笑いの鳳城。

しかし、何かに気付いたのか、鳳城の表情が突然曇り始める。

そのまま鳳城は上条の体に視線を移すと、心配そうな表情で上条の全身をくまなく見回して、

「ケガ・・・大丈夫？」

「んゝ、まあ大したことはないな。別に命に別条があるわけでもないっぽいし」

とフォロワーを加えるが、鳳城の表情が晴れることはない。それどころか彼女の表情は雲が青空を浸食するかのようによますます暗いものへと変貌を遂げていく。

「ごめんね、私のせいで・・・」

そんな表情で彼女はポツリと呟いた。

しばらくの間2人の間にじめじめとした沈黙が訪れる。

だが、

「お前何言ってるの？」

「……え？」

あまりに予想外すぎる上条の言葉に、鳳城の口から思わず言葉が漏れた。彼女はあまりに呆気にとられすぎていたのか、きよとんとした顔で上条の方を見る。

それに対し上条は笑っていた。ここまで来ると人間の限界を越えた演算能力を持つ鳳城の頭でも理解不能だ。そんな絶対能力者（レベル6）ですら理解できない難題を自然と口から発したという偉業を成し遂げた上条は笑っていた。

別に絶対能力者（レベル6）から一本取ってやったという優越感からではなく、ただ単純に、特に理由もなく笑っていた。そこには何の意図もない。むしろ上条にとって一絶対能力者（レベル6）なんてものはどうでもいい。

だから、彼は目の前にいる少女に向けて、こう言った。

「友達なんだから助けるのは当然だろ？ それにもしあそこでお前を見捨てていたら俺はこの程度のケガじゃ済んでなかった。多分一生立ち直れないほどの傷を負ってたと思う」

だから、と上条は付け加えて、

「お前が謝る必要なんてねえんだよ、俺はただあそこでお前が死ぬなんて運命が気に入らなかつたから幻想をぶち壊してやつただけだ。だからお前は謝る必要はない、OK？」

「上条くん……」

鳳城はその言葉を聞いて少しの間先程と同じように呆気にとられていたが、すぐに笑顔に戻ると、

「なんかそのセリフくさいね」

「うるへい！」

くすくすと鳳城が笑う。それに釣られて上条も笑みを浮かべる。それは本当に、何気ないやりとりだった。素気なく、味気ない。

普通の日常。だが、鳳城にとってはそれこそが非日常だった。今までいろいろな人と関わってきて、確かにこんなやりとりはあったかもしれない。

だが、それは全て偽り。夢が覚めるとすぐにそれは真から嘘へと変わってしまう。でもこの非日常は決して夢ではない。一人の少年が一つの大きな幻想を壊したことにより、非日常は日常へと変わってしまった。

だから、彼女は思い切り上条の不意をついて、

「でも、私はうれしかったよ。ありがとう上条くん」

とびきりの笑顔で、自分の本当の気持ちを少年に告げた。

消える記憶の中心で(6)(後書き)

ここで俺のターンが終わるって思ってんなら、まずはその幻想をぶち殺す！！
終わります。

次回：一方通行サイド

超能力者の非日常(1) (前書き)

えー、上条さんの黒歴史から脱出し、いよいよ今回から一方通行サイドへ突入です。

正直これも黒歴史になる予感しかしないのですがまああくまでも練習なので温かい目で(以下略)

超能力者の非日常(1)

「ミーカーもーいーくー!!」って、ミサカはミサカは必殺『子供のように駄々をこねてお願い事を聞かざるを得ない状況を作り出す』攻撃を実行してみたり~~~~っ!!」

9月21日午後2時21分。病院の廊下に小さな女の子の音が響き渡る。

通常なら病院で大声を出すなど非常識的で迷惑極まりないため、そんな声量で人が叫べば誰もが嫌そうな表情を浮かべるものだが、不思議と廊下にそういった表情をしている人間は少ない。むしろほとんどの人が『いつものことだ』といったように、声の主がいる病室に視線を送り、極めつきには笑みさえ浮かべている者までいる。

そんな人々の視線の先にある一つの病室の中にいる女性『芳川桔梗』は、目の前の光景に思わずため息をついた。

「ああくそうざつてエ!!」つか『子供のように駄々をこねる』ってお前どっからどう見てもまだ子供だろクソガキ!」

「見た目は子供でも頭脳は大人だもん、ってミサカはミサカは屁理屈で対抗してみる!」

「ンなこたアどうでもいいンだよ! いいからさっさと離しやがれエ!!」

「やだやだやだー!!」ってミサカはミサカはふんばる力をさらに強めてみたりっ!!」

などと、10歳くらいの少女が高校生くらいの少年に後ろから抱きついて引きとめようとしているが、少年が半ば力づくでその状況から脱しようとしているのが現在彼女の目の前に広がっている光景だ。

抱きついていてる方の少女の名前は『ラストオーダー打ち止め』。過去に学園都市3位の遺伝子から生み出された総数2万人もの妹達シスターズと呼ばれるクローン人間の中枢を司る少女だが、他の妹達は全員オリジナルと同じ

中学生くらいの身長を手に入れているのに対し彼女の身長はどう見ても10歳前後の少女のものだ。

その理由としては彼女は妹達のシスターズの安全装置として作られた上位個体のため、研究者達がいざという時に簡単に捕獲できるようにといういらぬ浅知恵を働かせた結果がそれだった。

対し、抱きつかれている方の少年の名前は『アクセラレータ一方通行』。これは彼の能力名で、正式名称ではないのだが、今はこの呼び方で固定されてしまっている。

過去に2万人の妹達を殺すことによって絶対能力者（レベル6）に昇華できるという理論に基づいた『実験』に参加し、自らがその被験者となって約1万人もの人間を殺してきた学園都市1位の少年だ。

そんな今まで『殺してきた方』だった少年が、何故か今、『殺されてきた方』によって力づくでその場に留められるほどにまで弱体化していた。

どうしてこうなったのだろうか、と芳川は思う。それこそ、ため息が出るほどに。

「芳川ア！！ てめエもそこでのんびり見物してねエでさつさとこのガキなんとかしやがれエー！！」

と、芳川に助けを求める学園都市1位。

ぼーっとしてたが故に飛び火をくらってしまった彼女はやれやれ、と首を横に振ると、

「こらこら、彼はこれから大事なりハビリがあるのだからあまり手こずらせてはダメよ。それにあなたにもやるべきことがあるでしょっ？」

言いつつなんとか一方通行にくっついた打ち止めをはがそうとするが、はがれない。

それどころか彼女は先程より余計に力を込めると、首をぶんぶんと振って、

「やだやだやだ！！ 毎日毎日一時間ずつと寝ているだけのつま

芳川はその一瞬の隙をついて一方通行から打ち止めを引き剥がして羽交い締めにする。

「やだやだやだーっ！」と抵抗する打ち止めだが、その抵抗も空しく一方通行の見守る中、調整室へと強制連行されていくのであった。

そんなこんなでようやく解放された一方通行は、あの後病室でいろいろ準備を整えて、今は現代風のデザインをした杖をついてゆつくりとした歩調で病院内の廊下を歩いていた。

彼の向かう先にあるのは病院の正面玄関。迷わずそこに進むと、ほとんどの病院が玄関扉として採用しているガラスでできた自動ドアをくぐり、外へと出る。

そこで彼は舌打ちを一つして、

「リハビリつつつても要は決められたコースを歩くただの散歩だよ」

言いながら、彼は杖を持っていない方の左手でポケットから折り畳まれた紙を取り出し、それを広げて書かれているものを確認する。それは地図だった。といつても手書きの宝の地図などという陳腐なものではなく、人工衛星から撮影された現代風の学園都市の街並みがただ印刷されただけのものだ。

その写真には上書きされるように赤いペンで線が書かれていて、かくかくと何度か曲がった後、スタート位置へと戻ってきたところでそれは途切れている。それがリハビリコースなのだろう。

彼は舌打ちしてぐしゃりと地図を握りつぶすと、そのまま丸めた紙をゴミ箱へと捨てる。

彼にとって、地図など一度見れば覚えられるし、別に決まった散歩コースを歩く必要などどこにもない。つまり別に見ても見なくてもどっちでも変わらないものなのだ。

彼は何の興味もないゴミ箱から視線を外すと、コンクリートの柱によって支えられている柱と同じ素材でできた屋根の下の領域から外を見る。

そこにあるのは水浸しになった街。つまり一言で言うと雨が降っている。

行き交う人々は皆傘をさしていて、コンクリートで覆われた地面は、ところどころくぼんだところに水たまりができています。それ以外場所に降り注いだ水滴は全て地面へと吸収されるか、排水溝から地下を流れてどこかへ放出されているのだろう。

アクセラレータ 一方通行は柱に杖を立て掛け、右手首にぶらさげておいた折り畳み傘を開くと、そのまま傘を左手で持って右手で立て掛けておいた杖を取る。

傘は見事な黒色だった。まるで『悪』や『闇』を連想させるような漆黒。かつてそんな立ち位置にいた彼を象徴するかのような色に、アクセラレータ 一方通行は舌打ちを1つすると、

「皮肉かよ、ふざけやがって」
ポツリ、と呟いた。

とはいったものの、傘を彼に渡したのは芳川で、デザインはおそらく彼女がチョイスしたのだろう。今までアクセラレータ 一方通行と同じ世界にいた彼女には男性用の傘を買う機会がなかった。だから、無難な黒にした。と推測すると辻褄があう。

それに彼女にそんな意図があるとは思えないし、そんなことをして彼女に利益があるとは思えない。そんなことは最初からわかっている。わかつてはいたがアクセラレータ 一方通行はイラついていた。

杖をついて屋根の領域から外に出る。

雨粒が傘をたくバラバラという音が耳触りだった。靴にしみこむ水は気持ち悪いし、湿気が充満していて気持ち悪いし水滴が服に当たっても気付くことができない。

全て初めての体験だった。元々彼は常にその能力を使って必要なもの以外は全て『反射』していたので、雨の日に傘を差して出かけるなんて習慣はなかったし、靴に水がしみこむなんてこともなかった。水滴が服に当たって濡れるなんてものは論外だ。

それでも彼は気にせず歩く。そんな彼に対して雨も気にすること

なくただ降り注ぐ。

そんな中をしばらく頭の中に記憶しているコース通りに歩いてい
た一方通行だが、そこでふと彼の足が止まった。そのまま彼の視線
は左方へと向けられる。

(そついやコツチの道は確か・・・)

脳内で地図を開き、再び確認する。そして確信する。彼の目線の
先にある道路、そこは散歩コースの短縮ルートであることに。

彼はしばらく考え込むようにその通路を見つめていたが、

「やってらんねエっての」

あえて散歩コースから外れる。正直、脳を負傷したにも関わらず
たった半月で歩けるようになるまで回復した彼にとつてもう歩くり
ハビリなど必要なかつたし、実際に医者には「今日リハビリに行
つて来い」と言われたわけではなかつたのだが、芳川達に「健康の
ために行つて来い」と言われたのでしづぶ出てきたただけだ。だか
ら、散歩コースを外れて近道しても問題などあるはずもない。

比較的人通りの少ない小道を抜け、先程とは違う大通りに出て少
し歩くと次は公園。ここを抜ければ再びコース通りに歩き、後は病
院に戻るだけだ。

何の迷いもなく彼は公園に入り、石の階段を下りる。

「あん？」

そこで一方通行は足を止めた。

彼の視界が何か奇妙なものを捉えたからだ。

それは少女だった。歳はおよそ10代半ば。中3〜高2くらいだ
と思われるその少女の瞳はきれいな藍色で、肩のあたりで切り揃え
られた銀髪はどこか外国人の風貌を感じさせる。

ただ、それだけだと一方通行が興味を示すような対象にはならな
い。

彼の興味を引いたのは、少女の様子だ。虚ろな瞳で俯いていて、
おそろくびしゃびしゃに濡れているであろうベンチに腰掛け、傘を
差すこともなくただ一人でその場に留まってポーツと地面を眺めて

いる。

その様子は誰がどう見ても異常なものに見えただろう。だが、一方通行はそれを『異常』ではなく『奇妙』だと感じ取っていた。だからこそ、彼は足を止めたのだ。

彼はしばらくその場に留まってその少女を眺めていたが、

「はん、くつだらねエ」

吐き捨てるように呟くと、視線を逸らしてその場を後にしようとする。だが、数歩進んだところで再び彼の足が止まった。そしてその場で何かを考えているのか、少しの間完全に停止し、何を思ったのか突然進路を変えて少女へと歩み寄る。

一方通行が少女の前まで来ると、流石に彼女もそれに気付いたのか、俯いていた顔を上げ、生気のない瞳で一方通行を見上げる。だが、彼はそんな少女を無視して、傘を持っていた左手を差し出すように伸ばすと、傘が雨を凌いでくれる範囲を自分から彼女へと移す。

そうして雨が体に降り注ぐことがなくなった少女だが、彼女はきよとんとした表情で一方通行を見上げ、次に傘へと視線を移し、また一方通行へと視線を戻す。

そんな少女の代わりにびしょ濡れになる一方通行だが、彼はそんな細かいことなど気にせず、少女を睨むような目で見下すと、

「こんなトコロでなアにやってんだテメエは。家出少女でも気取ってるつもりか？」

罵るように一言。もしかしたらこの時彼は自分が思っている以上にイライラしていたのかもしれない。といっても彼の場合はどんな人間に対してもこんな口調なのでイライラしていても特に大差はないのだが。

と、そこで少女が一方通行の声に反応した。

虚ろだった瞳には生気が戻り、暗かった顔には元の明るさが戻っていく。

「一方通行……？」

そして少女が呟いたのは紛れもない少女の目の前にいる少年の名

前だった。

そんな呟きに怪訝な顔をする一方通行だが、彼が発言する間もなく少女はビシィッ！と彼を指さして、

「一方通行！ 学園都市1位の能力者の一方通行だよねキミ！！」
キラキラとした目で彼を見つめるミーハー少女。対し、一方通行はそこで極めて面倒くさそうな顔をしていた。

別に名前を知られていることには何の疑問も抱かない。隠そうとしてもどこかから勝手に漏れてしまうので隠そうとも思わない。だから天下をねらっている一無能力者（レベル0）の連中がその情報を手に入れ、襲ってくるのだとしてもどうでもいい。

その程度なら別に気に留めることもないし、面倒臭いとも思わないだろう。だが、この少女の場合、一方通行の名を知っていて、それでなおまるで芸能人を見るかのような態度で接してきたのだ。

指一本触れただけで人を殺せる怪物なのに、過去に1万人の人間を殺した悪人なのに。

何の悪意もない顔で少女は彼に接してくる。だから面倒臭い。

（チツ、まあたこの類の人間かよ・・・）

しかしそういった人間と接するのは初めてというわけではなかった。一番わかりやすい例として挙げるなら『打ち止め』が適任だろう。

「こんなところで会えるなんてすごい偶然！ 奇跡ってあるものなんだね、私思わず感動しちゃったよ！」

「そおかい、じゃあその偶然ともお別れだ、じゃあな」

「ぶわーっ！ ちょよ、ちょっと、レディーに貸した傘を再び急自分の元へ戻さないでよ！ キミってそういう紳士性はないワケ！？」

言つと、少女はずかすかと一方通行に接近し、そのまま強引に傘を奪い取る。

一方通行はしばらく傘を持っていた左手を呆然と眺めていたが、やがてギロリと少女を睨んで、

「オイテメエ・・・俺が誰だかわかってやってんのか？ わかってんなら今すぐそれを返せ、わかってないなら身をもって思い知らせてやるから黙って見てろ」

「わかっているけど返す気はないよ」

「ハッ！ いい度胸だなオイ、気に入った。今日は出血大サーピスで8割引きにしておいてやるから感謝しろ」

言いながら彼は首の黒いチョーカーへと手を伸ばす。そのままスイッチに手を触れるとそのまま電源を

「待った！！」

だが、そこで彼の手は止まった。

少女は一方通行の手が止まったのを確認すると、不敵な笑みを浮かべて続ける。

「女性に対して手荒な真似は良くないよ、それに出血大サーピスをするのはこつち」

「どオいうことだ？」

「ちよつと付き合ってくれたらこれ返してあげるって言ってるの。どう？ 悪いようにはしないわ」

「けつ、くつだんねエ。俺がそんな安モンの傘に執着するような小物に見んのかオマエ？」

言いながら踵を返してその場を去ろうとしたが、ふとそこで彼の足が止まった。

傘に執着していないというのは本当だ。だが、どうにも何か府が落ちない。もやもやとしたものが頭の中に充満している。

「オイ」

「へ？ な、何？」

「内容次第では付き合ってやる、場所言ってみろ」

一方通行は背中を向けたままだったのでその表情を窺うかがうことはできなかつたが、おそらく少女は驚いているのだろう。少し間が開いた後、少女の嬉しそうな声が背後から掛けられる。

「ホント！？ ホントにいいの！？」

「さっさと見え、俺の気分が変わらねエ内にな」
促すと、少女は少し考えるような仕草をして、
「えっと、じゃあ・・・」

超能力者の非日常(1) (後書き)

文頼は幼女じゃないよ・・・？w

次回：ベクトル操作の有効活用法

7月28日

超能力者の非日常(2) (前書き)

一方さんサイドはネタがやりにくい・・・

超能力者の非日常(2)

一方通行は傘も差さずに何故かびしょ濡れのまま、喫茶店の前で立ち尽くしていた。

何の変哲もない喫茶店だった。この店を一言で表すならば『喫茶店』が妥当だろうというくらい何の変哲もない。だが、別に嫌いではなかった。むしろ夜中のコンビニで大量の安物コーヒーを購入していた彼にとってはこういった安物っぽいものの方が案外好きなのかもしれない。

「このパフェすごくおいしいんだよ。どう、ここなら文句ないでしょ?」

傘をくるくると回して満面笑顔で訪ねてくる少女。相変わらず一方通行から奪い取った傘を使用しているが、その明るい雰囲気には黒い傘は似合っていない。

「まア及第点^{きめうだいてん}ってトコロか」

言う^アと彼は『やったあ!』とガッツポーズを作って喜んでいる少女を無視してチョコレートのスイッチに手を触れる。

そしてそのままスイッチの電源を入れた。直後、犬が全身の毛についた水をぶるぶると身震いして払った時のように、彼の全身から無数の水滴が周囲に飛び散る。

全身についた水滴が重力によって落ちる時のベクトルをどうにか操作したのだろう。それこそが彼の能力。『一方通行』と呼ばれるが由縁^{ゆえん}。

「きゃあ!?!」

だがそれは当然周囲にいる人間にも被害を与える。今回その被害に会ったのは彼の一番近くにいた奪い取った黒い傘を使用していた少女だ。

彼女は右手をぶらぶらと振って手についた水滴を落としながら、「もうっ! そっいつことやるなら最初にやるって言うてからや

後からやってきた少女もそれに倣うならようにして一方通行と向かい合
うような位置に腰掛ける。

奇しくも、それは8月31日に出会った少女と共に訪れたファミ
レスの時と同じような状況のように思えた。

そんなことも知らない少女は何を思ったかメニューを手に取ると、
ページをパラパラとめくり始める。

そこで一方通行は怪訝な顔をして、

「オイ、オマエ今更メニューなんて見る必要なんであんのか？」

「へ？ どうして？」

「お望みの品はこの店自慢のパフェとやらじゃねエのかよ」

「うん、そうなんだけど。でもこういうメニューってなんか
ついつい見ちゃうんだよね。ほら、何かを買おうと思って探しに
行くのはいいけどその過程で偶然目に入ったものが急にほしくなっ
ちやうあのカンジ！」

「なんだそりゃ、つか自分からメニューを手に取った時点で『偶
然発見して』ってことにはならねエだろオが。そオいうのは意図的
なものじゃないことに意味があるンじゃねエのか？」

「あ、それもそうだね。そこに気付くなんてやっぱキミって天才
？」

そんな無邪気な少女の言葉に『皮肉かよ』と吐き捨てるように咳
く学園都市第一位。

どうやらそんな咳きは少女の耳には届いていなかったらしく、少
女は再び熱心にメニューを見ている。

少女はしばらくの間そうしてメニューとにらめっこをしていたが、
やがて注文するものが決まったのかベルを鳴らして店員を呼ぶ。つ
いでだから、と少女の注文の後に一方通行はコーヒーを注文すると、
少女が『え、それだけでいいの!?』とでも言いたげな表情をして
いたが、彼は気にせず注文を終わらせる。

しばらく府に落ちないといったような表情をしている少女がいた
が、店員がその場を去ったのを見計らって彼女は口を開く。

「そういえば自己紹介がまだだったね、私の名前は『ふみよりほつれん文頼逢恋』。名前の通り恋を夢見る現役女子高校生だよ」

言って、文頼と名乗った少女はえっへん、と胸を張る。

対して一方通行は至って面倒臭そうに、

「そオですか、わかりやすい自己紹介をアリガトウ」

「キミって予想以上にひねくれてるね。多少は予想してたけどこれは予想以上に重傷だよ」

「余計なお世話だ。つかオマエはなんで俺のことを知っている？どオいうルートから俺の情報を手に入れた？」

「それは」

少し言い淀む文頼だったが、そこで彼女を助けるように「お待ちせいたしました」という店員の声が2人の間に割り込んだ。

バイトなのだろうか、その女性店員は高校生くらいの若い顔立ちをしていて、そのまま丁寧にコーヒをテーブルに置くと、ペコリと一礼してその場を後にする。

そんな店員の態度に興が冷めた一方通行は、一つ大きなため息をつくと、

「まあいい。俺の情報を手に入れるルートなんざいくらでもある。それが正規ルートだろオとなかるオとな」

「一応断っておくけど闇のルートだけは使つてないよ」

少し申し訳なさそうに言う文頼に対し、一方通行は「そオかい」と適当に返事をする。とカップをつかんでそのままコーヒを一口含む。

そこで、「お待たせいたしました」という店員の声が再び2人の間に割り込んだ。見ると先程と同じ女性店員が大きなパフェを持って一方通行達が座っている席の傍らかたわに立っている。

一方通行は女性店員がそのままテーブルに置いたパフェを見ると、あきれたような表情を浮かべて、

「結局パフェかよ、宝の山からお宝は発掘できずってか？」

「うるさいなあ、いいじゃん。これ好きなんだからさ」

言って文頼はスプーンを手に取るとパフェをつつき始める。しかし、そのサイズは異常だ。並のパフェの2倍以上の大きさがあり、とても少女が1人で食べるようなものだとは思えない。

その時、一方通行の視界にあるものが映った。それは少女の背後のウィンドウに貼られていたチラシ。そこには今彼女の目の前にあるパフェのイラストが印刷されていて、その隣に大きくこう書かれていた。

『巨大パフェ追加！！ 30分以内に1人で食べ切れたら代金支払い不要！！』

よくある大食いのイベントだがこれは異だ。

パフェの容器の大きさはおよそ縦に30cm横幅が一番広い最上部でおよそどんぶりほどの大きさがある。その中にぎっしりと入ったクリームは、その大きな容器から飛び出すほどの量だ。

アニメやマンガだとこういうものを一瞬でペロリと平らげるような大食いキャラクターが存在しているが、現実はそのままで甘くはない。まずそんな量のクリームが『胃』という器官に全て放りこめるとは思えない。というか質量的に無理だ。

それに胃が食物を消化する時間は案外長い。30分間これだけの量のクリームを胃に放り込み続けるなどほぼ不可能だ。

「フン、くっだらねエ」

言いつつ文頼がパフェを食べ切れなかった時は代わりに払ってやるうと心の奥底で思っていた一方通行だが、30分後、彼らは代金を払うことなく店員達が涙目で『ありがとございましたー！！』と土下座するのを横目に見ながらその店を出ることに成功していたのだった。

超能力者の非日常(2) (後書き)

以前上条サイドと交差させた方が良かったと言ったと思うが・・・
あれは嘘だ！(え？)

次回：男のツンデレってどうなんだろう？

超能力者の非日常(3)

雨を降らせる雲というのはいろいろな種類がある。

その中でも特に有名なのが『積乱雲』と呼ばれる雲と、『乱層雲』と呼ばれる雲なわけだが、この2つは似ているようで大きく違う。

積乱雲と呼ばれる雲は、大体大雨を降らせる雲だ。さらに高確率で雷を発生させ、非常に厄介な種類の雲のように思えるが、このタイプの雲は縦方向に大きく成長するため、範囲はあまり大きくはない。

よって、すぐに雨が止むことが多く、短期間の間雨を降らせる雲として有名だ。

乱層雲と呼ばれる雲は積乱雲とは対照的に、降水量があまり多くない雲だ。だが、非常に広範囲に成長するため、長期間雨を降らせるタイプの雲として有名だ。

そして今。

喫茶店の入り口前でぼんやりと空を見上げている一方通行は、自分の視界に映る雲が乱層雲なのだろうと適当に推測していた。

ある意味このタイプの雲が一番厄介だ、と彼は思う。

短期間だけの雨なら多少の予定が狂わされることがあっても、修正するのはたやすいものだが、長期間の雨というものは大きく予定を狂わせる。『時間』というものを大切にしている現代人にとって、それは大きな痛手になる。

それは一方通行とて例外ではない。

だから現に彼はこうして、大きく予定を狂わされることになり、喫茶店の前でどうしたものかと空を見上げているのだ。

すると文頼がおそろおそろ一方通行を見て、困ったような表情を浮かべながら、

「えっと、どうしよっか？ まさか要件が終わったから傘を返してもらった後か弱い少女を残して自分だけ帰るなんてことは・・・

ないよね？」

「……」

「うわあ！ その気だったんだ、その気だったんだね、その気でいたんだね！？ ほんと血も涙もないねキミ。少しはか弱い女の子のために行動を起こそうという気にはならないの！？」

「くっだんねエ、傘うばわれたうえに脅迫されて強制的に付き合わされたつてのにこれ以上つきあってらんねエつての」

「う、それは至極ごもつともな意見だけどここまでつきあっちゃったんだしいつそ最後までやろうよ、ね？」

「バカバカしい、俺が最後まで付き合ってくれるよオな優しい人間に見えんのかオマエ？」

「うん、見えるよ」

即答だった。一方通行は予想外の言葉に一瞬頭が真っ白になる。

いや、おそらく頭の中が真っ白になるほど困惑していたと言った方が正しいだろう。

どうして、自分のことをよく知りもしないのにそんなことが言える？ 仮に知っていたとすればなおさらだ。一万人の人間を殺してきた少年に対して何故『優しい人だ』と断言できる？

一方通行は舌打ちする。学園都市1位の頭をもつてしても何もかもがわからない。

結局、彼は一つ舌打ちすると、そのまま傘も差さずに雨の領域に入ると何も言わずに杖をつきながら前進する。

「ちよ、ちよつと！ 傘も差さずにどこ行くの！？」

背後から文頼の声が聞こえたが、彼は振り向かない。

背を向けたまま、左手を少し上げてからぶらぶらと振って、

「……サービスだ、最後まで付き合ってやるよ」

自分でも何を言っているのかよくわからなかった。何かが違う、こんなのは一方通行ではない。心の中でそう思ったが、彼はその原因について追及していく気にはなれなかった。

少しためらったような空白があったが、やがて背後からばしゃば

しやと水の溜まった地面を何か駆ける音が聞こえた。おそらく文頼が接近してきたのだらうとアクセラレータ一步通行は思ったが、一彼はやはり振り向かない。

文頼の性格を考えると、彼女はアクセラレータ一方通行に追いついてそのまま肩を並べて歩き始めるとわかつているから。

案の定、彼女はすぐにアクセラレータ一方通行に追いついた。が、そこで少年はふと違和感を覚えた。

先程までうっとおしいほどに全身に降り注いでいた雨が急になくなった。別に雨が止んだわけではない。相変わらず彼の視界にある雨は地面に降り注いでいるし、そこら中にできている水たまりも雨が落ちてくる度に波紋を作っている。

だから何かが雨を遮っている判断するのにそう時間はかからなかった。視線を上に移すと、そこには黒い傘。まぎれもないアクセラレータ一方通行が吉川達から受け取った折り畳みタイプの傘だ。

だが、それを今所持しているのは彼ではない。

「何の真似だ？」

アクセラレータ一方通行は彼の左横に並んで一緒に歩いている現在の傘の所有者に視線を投げる。

「何って・・・こうでもしないとキミも濡れちゃうでしょ？」

少女は何食わぬ表情で答えた。傘の幅が狭くて完全には人体が収まることはなく、少しだけはみ出た右肩に雨が当たってしまったアクセラレータ一方通行と同じようにはみ出た左肩を濡らしているのも気にせず

に。
やはり何かが違う、とアクセラレータ一方通行は思う。こんなものは日常ではない。もし彼の過去を知る者がこの光景を目の当たりにすれば笑い転げるところかそれを通り越して絶句すらしてしまうだろう。

だが、それでもアクセラレータ一方通行は気にしない。これから手に入れる日常はもつと優しいものにならなくてはいけなから。

だから、この程度の優しさでいちいち動揺したりはしない。

「さて、どこに行こうか？」

その日常の一部である少女は子供のように無邪気にはしゃぎながら一方通行に尋ねる。
アクセラレータ

非日常が始まるうとしていた。
アクセラレータ

一方通行は思う。かつて一万人の妹達シスターズを助けるために戦ったあの少年の日常もこういふものなのだろうか、と。

超能力者の非日常(3) (後書き)

そろそろとあるPSの在庫少なくなってきた・・・
ストーリー構成は決まってるけど無気力なせいでなかなか進まぬっ
ツ!!

次回：おや、文頼の様子が？

8月3日

超能力者の非日常(4)

第7学区にはデパートと呼べるような建物がない。

食品を販売するスーパー、日用品を販売するホームセンター、電化製品を販売する専門店などはそこら中に存在しているが、何故かそれら全てをまとめたようなデパートが一切存在していないのだ。理由としてはそれに似た施設である通路に沿っているいろいろな店が点在している大きな地下街の存在が大きい、根本的な理由など誰も知らない。

よってこんな雨の日に差すような傘を買うにはホームセンターを訪れるのが一番手っ取り早い。

「・・・オイ」

そんなホームセンターの一角で、ショッピングカートを押している一方通行は思わずその前を軽快な足取りで歩いている少女を呼び止めた。

「ん？　どうかした？」

そんな前を歩いている少女、即ち文頼は、何食わぬ顔で振り返る。その表情はとても楽しそうで、心から面白い物を楽しんでいることが伺える。対し、一方通行の全身からはイライラオーラが噴出されていた。

彼はショッピングカートを止めるとバリバリと右手（杖はカートにひっかけてあるため、今は右手が空いている）で頭を掻いて、

「どオしたもこオしたもねエだろ、なんで俺がショッピングカートなんて押してテメエの買い物付き合わされることになってんだ？」

「いやだって・・・最後まで付き合ってくれって言ったのキミだよ？」

「そオいう問題じゃねエ、つか最後まで付き合つとは言ったが雑用をするとは誰も言ってるねエぞ！」

「あ、あれかわいい！」

「人の話を聞けつつつてンだる!!!」

ホームセンターの通路のど真ん中で怒鳴る一方通行だが、文頼は華麗にスルーを決め込むと、とてとてと人形売り場へと小走りです突入していつてしまう。

その場で思わずため息を漏らす一方通行。やれやれ、といったふうにシヨッピングカートを押し、ゆつくりと人形売り場の領域へと足を踏み入れる。

普通ホームセンターに人形などの羽毛でできた商品を置いていた観葉植物が飛ばす湿気やら木材の臭いなどでダメになってしまうものだが、ここは特別な工夫がされているのか、特にそういったことはなく、このコーナー一帯は人形から発せられる独特の臭いのよなものが充満している。

そんな中、ふと文頼の方に視線を向けてみると、彼女はしゃがみこんで少し大きめのくまのぬいぐるみを両手で持ち、物欲しそうな表情でそのぬいぐるみをじゅつと見つめている。

それを見た一方通行は、(さげす)むような目で文頼を見下すと、
「なんだそりゃ？ ずいぶんと庶民的なものがお好みなんだな」

「ん、庶民的といえば庶民的だけどこうというのが逆に良かったりするんだよ。ほら、高すぎるものより安いものの方がおいしいと感じるあの感覚！」

「そりゃ安いもんしか食ったことのねエヤツが言う負け惜しみだろオが、実際高いもんの方がうまかったりするもんなんだよ」

「うわ、ブルジョワ発言!? ま、まあそれは人の味覚によると思っけどさ」

でもなあ、と彼女は一拍置いて、

「今月敵しいんだよねえ、残念だけどこれは買えそうにないかな」と、文頼は残念そうな表情を浮かべると、人形を元々あった場所に戻そうとしたが、

「待て」

その一言で動きが止まった。まぎれもない一方通行が発した一言

で。

「えへへ」

「・・・」

文頼用の傘を新たに購入し、元の黒い折り畳み傘を返してもらった一方通行だったが、彼の表情は優れていなかった。

「えへへ」

理由としては、隣にいるふやけた顔をしている文頼を見ていただければおわかりいただけるだろう。彼女は新たに購入した赤い水玉が点々と虫食いのように存在している透明なビニール傘をくるくると回し、一方通行のゆっくりとした歩調にちゃんと合わせて歩いている。

「オイ」

と、ここでついにイライラが最高潮に達したのか一方通行が睨みを利かせた声を文頼に投げつける。

「ん？ 何？」

対して、文頼はふやけた声で返す。表情も相変わらずふやけたままだ。

気にしていても仕方ないので一方通行は続ける。

「何がそんなにうれしんだオマエ？ さっきから気持ちわりイぞ」

「だってキミが買ってくれたあの人形・・・ほんとにかわいかったんだもん。ああ、雨が降ってるから直接持って帰らずに送ってもらったけどはやく家に帰ってもふもふしたいなあ」

くだらねエ、といつも通りに吐き捨てる一方通行だが、その表情はまんざらでもないように見える。

と、そこで隣を歩いてきた文頼がふやけた顔を引っ込めると、

「ところでキミさ、私が言うのも変だけど何であんなトコロにいたの？」

「ああ？ あんなトコロ？」

「だからあの公園。普通雨の日にあんな場所来る人なんて滅多にいないよ。そんなところに第一位が通りかかるなんて変だなんて思っ
て、もしかしてキミって結構気まぐれ屋さん？」

言われて一方通行は理解すると、あの時の心情を思い出そうとする。

（まアここでホラ吹いても仕方ねエな）

「ただのリハビリだ」

一方通行が正直に告げると、少女は『そうなんだ』と適当に相槌を打つ。

次の瞬間怪訝な表情を浮かべたのは一方通行だ。彼はその表情のまま文頼の方に視線を向けて、

「理由は聞かねエのか」

「へ？ 何の理由？」

「オマエの言う学園都市第一位が無様に杖ついて雨の日にはリハビリのために街に繰り出すことになった理由だよ」

まア問われたところで答えるつもりもなかったがな、と一方通行が適当に呟くと、そこで文頼がクスリと笑った。

「何がおかしい？」

「いやだって確かに第一位って聞くとものすごく強いつて思えるけどさ」

そこで文頼は足を止めて一拍空けると、

「強いつてだけで絶対に傷つかない完璧な人間ってことにはならないよね？」

一方通行が思わず押し黙った。

学園都市一位の脳を持つ彼ですらその言葉に反論することはできなかった。

理論とか、法則とかそういうレベルではない。彼女の告げたる

葉の意味は、おそらくその上にある『何か』。そして、彼女自身おそらくその『何か』を理解しているのだろう。そうでなければそんな言葉があっさりと出てくるとは思えない。

それは同時に、その『何か』を理解できるほどの何か^かが彼女にあることを意味していた。

（何だコイツ、一体何を隠してやがる？）

思えばそうだ、この少女は最初どこにいて何をしていた？ そしてどうしてそんな状況に追い込まれてしまった？

それは文頼逢恋という少女が抱えている何か^かに繋がっているのではないか？

「・・・ケツ、くだらねエ」

だが、一方通行はそこで考えることを放棄すると、再び前を向いて歩き始める。例えその少女に何か^かが閨があつたとしても自分には関係ないし、救つてやる義理もない。一方通行とはそういう人物であるということ^{こと}を彼自身理解してしまつていたからだ。

などと考えながら数歩歩いたところで一方通行はあることに気が付いた。

そう、足音が一人分のものしかないことに。そしてそれが何を表わしているのか瞬時に理解した一方通行は、先程の場所から数歩歩いたところで足を止め、そして後ろを振り返る。

そこにいたのはまるであの時のように俯いていた文頼逢恋だ。

不思議に思つた——一方通行は、思わず怪訝な顔を浮かべて、

「どオした？」

尋ねるが返事はない。俯いているためにその表情を窺^{うかが}うこともできない。

何かがおかしい、と思つたが、そこで彼はあることに気が付いた。彼が今立っているその場所。正確にはその領域。そこは文頼という少女と出会つた最初の公園であることに。

「ごめんね」

蚊の鳴くような小さな声が聞こえた。水滴が傘を叩く音がうるさかったが、それは確かに聞こえた。

他にもない、目の前にいる文頼の声だ。

どオという意味だ、と一方通行アクセラレータが尋ねる前に、次の言葉が続けられる。

「ごめんね、一方通行アクセラレータ」

そこで一方通行アクセラレータは絶句した。別に驚いたわけでも次の言葉を待とうと思ったわけでもない。

単に言葉を発することができなくなっていたからだ。視界がどんどん暗くなり、意識が朦朧としていく。

そんな中で彼が聞いた言葉はこうだった。

「ごめんね、ありがとう。一方通行アクセラレータ」

超能力者の非日常(4) (後書き)

ちょっと展開がはやいかもしれないw

次回：一方さんがキャラ崩壊しつつあるかもしれない・・・

超能力者の非日常(5)

「ミーカーカーもーいーくー!! って、ミサカはミサカは必殺
『子供のように駄々をこねてお願い事を聞かざるを得ない状況を作
り出す』攻撃を実行してみたり~~~~っ!!」

病室内に小さな女の子の声が響き渡る。

一方通行はそんな病室の中で目を覚ました。いや、正確には最初
から目覚めてはいたが急に意識がハッキリした、と言った方が正確
だろう。

周囲をキョロキョロと見渡し、そこが病室であることに気がつく
と、次に彼が感じたのは自分の腰あたりに妙な圧迫感があるという
ことだ。

見ると打ち止めが彼にしがみついていた。ばたしている。

まるで、数時間前の病室のように。

「・・・なんの冗談だこりゃ？」

「冗談なんかじゃないもん! ミサカは本気だもんってミサカは
ミサカは必死に自分の意見を述べてみたり!!」

一方通行は『どういうことだ?』という意味で尋ねたつもりだが、
どうやら打ち止めは別の解釈をしまっているらしく、一方通行
が望んだ答えは返って来ない。

その時点で打ち止めに頼ることをあきらめた一方通行は、学園都
市1位の頭の中に詰まっている知識を総動員し、答えを探ろうとす
る。

が、そこで辿り着いた答えは、

(白昼夢・・・か?)

どうも納得できないが、それが一番答えに近い。脳に負った傷の
後遺症か、はたまた白昼夢を見てしまうほど気が抜けていたのか。

いずれにしてもずいぶんと貧弱になったものだ、と一方通行は思
う。

「こらこら、今日はあなたも調整があるのだから彼と共にリハビリに行くことはできないってさつきから何度も言ってるでしょうに」と、そこでこの状況を見兼ねた芳川が止めに入る。そこに広がっているのは日常。まるで白昼夢通りの温かい日常に、一方通行は周囲に聞こえないように軽く舌打ちをすると、チャーカーのスイッチを入れる。

するとそこに広がっているのは日常。それも今となっては15分しか維持できなくなってしまったか弱い日常だ。

一方通行は学園都市最強の力を使って打ち止めの腕を比較的やさしくほどくと、そのまま片手でひょいと彼女をつまんでそのまま芳川に献上する。

呆気にとられる二人だったが、ほぼ放心状態の芳川が反射的に打ち止めを受け取ったため、一方通行はチャーカーのスイッチを切ると、杖をついて病室を出る。

ゆっくりとした調子で廊下を4〜5歩進んだその時だった。

「ちよ、ちよつと待ちなさいな」

病室から打ち止めを人形のように抱えた芳川が彼の背中に声を掛ける。そこで一方通行は停止したが、振り返ることはない。

気にせず芳川は続ける。

「あなた少し様子がおかしいわよ、何かあったの？」

一方通行は黙り込む。言い淀んだのかただ単に間を置いただけなのかは定かではないが、少しの空白の後、彼は左手をプラプラと振って、

「なんでもねえよ、リハビリいってくら」

とだけ言うと、彼は再び杖をつきながらゆっくりとした歩調で病院の廊下を進み、やがてその姿は彼の病室からは確認できなくなってしまう。

外に出てみると、見事に雨が降っていた。

そんなことは病室の窓から見えていたので一方通行は気にしない。アクセラレータ
彼はあの白昼夢と同じように折り畳み傘を開くと、そのまま屋根の領域を抜けて雨の領域へと侵入する。

雨粒が傘をたたくバラバラという音が耳触りだった。靴にしみこむ水は気持ち悪いし、湿気が充満しているため、細かい水滴が服に当たっても気付くことができない。

それは彼にとって初めての経験だったはずだが、既に白昼夢の中で体験してしまった彼にとってはもう些細な出来事という認識しかできなくなっている。

（しっかし妙にリアルな白昼夢だったなオイ・・・脳に傷負ったせいで夢の中までおかしくなっちゃったのか？）

雨が降り注ぐ空間の中でそんなことを思うがどう考えてもベクトル操作と未来予知には共通点がないことに気付き、彼は思考を止める。

そのまましばらくの間、心を無にして歩いていたが、ふとある地点で彼の足が止まった。

チラリと左側に視線を移すとそこにあっただのは車も通れないような小さな小道。コースからは外れるが、近道となっている道だ。

「・・・」
アクセラレータ
一方通行はその場に留まって考える。何か嫌な予感がしていた。これは闇の世界で生きてきた一方通行ならではの嫌な予感だ。それは十分に信用に値するものだが、だからこそ彼は迷っている。

直感などという曖昧なものに従ってコース通りに歩いて無難にリハビリを終えるか、そんなものを無視して近道を通ってさっさと散歩を終わらせるか。

「・・・くだらねエ」
吐き捨てるように彼は呟き、進路を変更する。

小道を抜け、大通りに出るとそのまま少し歩くと次は公園。普段は馬拉ソランナーの練習場になっていたり犬の散歩コースになっていたりする歩道を歩き、石の階段を下ると、そこでまた彼の足が

止まった。

彼の視線の先。そこにいるのは一人の少女だ。歳はおよそ10代半ば。中3〜高2くらいだと思われるその少女の瞳はきれいな藍色で、肩のあたりで切り揃えられた銀髪はどこか外国人の風貌を感じさせる。

だが、何故かそのきれいな瞳は虚ろで、顔も俯いており、この雨の中傘も差さずびしょ濡れだったであろうベンチに腰掛けて地面とにらめっこしている。

嫌な予感的中した。

どうしてこちらの道に来たのだろう、と今更ながら彼は後悔する。

「白昼夢な上に予知夢かよ、マジで予知能力にでも目覚めちまったのか？」

吐き捨てるように呟いて、白昼夢とは違う道を辿って今度は迷わず少女の元へと一直線に接近する。

少女の目の前まで来ると、流石に少女も気付いたらしく顔を上げて彼を見上げる。

全てあの白昼夢と同じだった。だから彼は同じように傘を差しだす。少女の代わりに全身が濡れてしまっが、彼がそんなことを気にしている様子は全く見られない。

彼女は一瞬きよとんとしたような表情をするが、それはすぐに嬉しそうなものへと変わる。

その部分だけは白昼夢とは違ったが、アクセラレータ一方通行はそれを無視して少女を睨むように見下すと、

「オマエこんな場所で何してやがんだ？ 家出少女のつも」

アクセラレータ
「一方通行！」

ズビシイ！ と少女が指を差して叫んだ名前によってアクセラレータ一方通行の言葉は遮られる。皮肉にも、それは自分の名前だ。

予想外の展開に思わず目の下をひくつかせるアクセラレータ一方通行だが、少女は相変わらず彼を指さしたまま「アクセラレータ一方通行だ！ アクセラレータ一方通行だよねっ！？」などと嬉しそうに名前を連呼している。

むしろ予想通りすぎる展開に一方通行はため息を吐くと、

「どオして俺の名前を知っている？」

そこで少女の動きがピタリと止まる。一方通行に向けていた指を下げ、『えっと、あの、それは・・・』となにやら言い淀んでいる。場所こそ違うものの、質問の回答まであの白昼夢と同じ。

何もかもがああの白昼夢通りだが、若干違った点も出ているため予知能力だと断言はできない。

考えるだけ無駄だ、と思った一方通行は、やれやれといった風に首を横に振ると踵を返してその場を後にしようとする。

が、しかし、

「あ、ちょっと待って！ 待ってってば！」

言いながら、少女は左手の傘を奪おうとするが、一方通行は手を少し動かしてひよいとそれを回避する。

通常なら確実に相手の不意をついて奪えるタイミングだったはずだが予想外の展開に少女は頭に『？』マークを浮かべて自分の手と傘を交互に見る。

無理もないだろう。一方通行は白昼夢通りになるのなら、と考えて身構えていたから回避に成功したのであって、本来なら彼女の考える通りに傘は奪われていたはずなのだから。

(予知能力つても案外捨てたもんじゃねエな)

彼は心の中で軽く考えると、面倒くさそうな目で少女を見つめて、
「まだ何か用か？」

「用も何も話しかけてきたのはキミの方じゃない、まあ私からキミに用がないって言えば嘘になるけどさ」

「そオかい、そりゃ悪かったな。じゃあ俺からお前に用はねエしお前の用事とやらに付き合う気もねエ、っつーわけでここでお別れだ」

「うわひどっ！ 相変わらずひねくれてるなあ、キミは」

あきれ顔で言う少女に一方通行は『言ってる』と軽く吐き捨てる
と、踵を返してその場を後にしようとする。が、そこで彼はあるこ

とに気付いて動きを止めた。

一方通行は『オイ』と軽く前置きをして、

「『相変わらず』ってのはどオいう意味だ」

ギクウ！ と、一方通行の指摘に少女の表情が凍りついた。

言い間違えだという可能性も考えていないわけではないが、少女の反応を見る限りどうやらそうではないらしい。一方通行は怪訝な表情を浮かべると、何やら言い訳を考えているらしい少女を軽く無視して、

「まあいい、気が変わった。オマエの用とやらを言ってみる。内容次第では付き合ってる」

「へ、いいの？ キミがそんなこと言いだすなんて珍しいね。じゃあ・・・ちよつとだけ付き合ってよ」

「何にだ」

「ちよつとした暇つぶしっていうか気晴らし？ まあいいじゃん行こうよ悪いようにはしないからさ」

言つと、少女は勝手に一方通行の傘の領域の中に侵入して、

「ほら、行こう。はやくしないと遊ぶ時間少なくなっちゃうよ？」

「なつ、テメエ、断りもなく傘の中に入ってんじゃねエ！ さつさと出やがれ！」

「え、いいじゃん別にさ。それにこんなかわいい女の子と1つ傘の下で密着できるんだからキミも役得でしょ？」

「テメエぶち殺されたいのか？」

「キミはそんなことしないってわかってるもん」

またこの類の人間か、と一方通行は吐き捨てるように呟いて、

「もオいい、勝手にしろ」

いつからこんなに甘くなったのだろうか、と一方通行は思う。やはり何かが変わったのか、それとも何者かが変えたのか。

それとも、これから変わるうとしているのか。

いずれにしろ今の一方通行には必要なものなのかもしれない。たとえこの先にどんな困難が待ち構えていようと、それを乗り越えて

『日常』というものを手に入れるために。

「あ、そうそう」

不意に少女が口を開いた。彼女は一方通行が自分の声に反応をしたのを確認すると、優しい笑顔を浮かべて言葉を紡ぐ。

「私の名前はね」

「

超能力者の非日常(5) (後書き)

ついでにリレー小説もアップしました。
興味ある方は是非見てみてください！

次回：デート

リア充炸裂しろ！！

超能力者の非日常(6)

ふみよりほうれん
文頼逢恋。

彼女は確かに自らそう名乗り出た。

皮肉にも容姿、名前、最初にいた場所から性格まで全てあの白昼夢通り。

(どオなってやがる・・・?)

本格的におかしいと考え始めた一方通行は今、なぜか洋服店の一角で呆然と突っ立っていた。そんな彼の目線の先にいる洋服を見漁って妙に興奮している少女こそが問題の『文頼逢恋』である。

「ねえ一方通行、このブラウスかわいいと思わない？ あ、あっちのワンピースとかもいいかも！」

「・・・」

一方通行は思わずため息を吐く。白昼夢内でもそうだったがやはりこの文頼という少女はどうも苦手だ。もちろん打ち止めもどちらかというと苦手に部類されるが、文頼はもっと違う意味で苦手というカテゴリに分類できる存在だ。

(どオして俺の周りにはこの類の連中が集まるんだ・・・なんか変なAIM拡散力場でも出てんのか?)

考えて、左手で頭を掴むとそのまま首をコキコキと鳴らす一方通行。しかし何の変化もない。

「一方通行？」

そんなことをしていると、不意に横から声を掛けられる。見るとそこには何故かチャイナドレスを両手で持った文頼が心配そうな顔でこちらを見つめている。

一方通行は一拍空けた後に怪訝そうな表情を浮かべると、

「なんだそのチャイナドレス？」

「ああこれ？ どうどう、かわいいと思わない？」

言つと文頼はチャイナドレスをあたかも自分が着ているかのよう

に一方通行に魅せつけると、にやにやとした表情でこちらを見つめる。どうやら反応を楽しむつもりらしい。一般的な視点から見ればそれは似合っていると言えるような代物だっただろう。文頼は別段太っているというわけでもないし、むしろスタイルはいい方だ。試着などしなくても大体の服を着こなせることは自明の理だろう。

しかし、それは一般的な視点で見れば、の話だ。

つまり、今まで闇の世界を生きてきた非一般人の一方通行は、極めて面倒くさそうな表情を浮かべると、

「どオでもいい・・・」

大体恋愛感情というものがあるのかどうかすら怪しい少年は、単純にそう返す。

「まずその質問をする相手が間違ってるだろオが、聞くならそこからヘンの店員にでも聞け」

「え、だってこういうのって普通一緒に来た友達に聞くものだよね？ だったら私が質問した相手は間違えてないと思うんだけど」

「俺はオマエと友達とやらになった覚えはねエ」

「立派な友達じゃない、こうして一緒にシヨッピング楽しんでる時点で」

「俺は楽しんでねエ」

「とか言ってる、内心こんなかわいい子とウィンドウショッピングできることに興奮してるくせに。照れ隠しかこのこの」

「・・・」

「うわ黙った！ ついに面倒くさくなつたってオーラ目に見える形で放出されちゃってるよこの人！」

文頼の言う通りついに本格的に面倒になった一方通行は顔を逸らし、男物の洋服のコーナーへと視線を移す。別にほしい服があったわけでもないし、興味本位で見ようと思っただけではなかったが、ふと彼の目線がある一点で止まった。

どこの学校のものかはわからない男ものの制服。それに彼の視線は集中していた。

傲慢ではないが、一方通行は生まれれてこの方制服の類を着たこと
がない。彼が能力に目覚めたのは大体小学生くらいの頃の話で、そ
の時からずっと特別クラスとやらに通っていたせいで制服を着る必
要がなかったからだ。

別に憧れがあつたわけではない。大して興味があるわけでもない。
彼が思つたのは自分の未来。そこには制服を着て友達とくだらな
い話をする自分がいるのだろうか？

（そオいやあの野郎もあの時の服装は制服だつたな・・・）
言つて、操車場で戦つたあの男の顔を思い出す。

極めてラフな格好で、何故か最初からボロボロだつたあの制服。
あれがどこの学校のものなのかなんて知る由もないし、最初からボ
ロボロだつたため鮮明に思い出すこともできず、今からあの制服が
使用されている学校を探しあてることもできないだろう。

「・・・どうしたの一方通行、キミつてああいう制服が着たいの
？ つかもしかして制服フェチつてヤツ？」

そこで、一方通行の思考が途切れる。本来なら放つた言葉に対し
て軽くキれる場面だが、妙な気分だつた彼は舌打ちをして制服から
視線を逸らすだけに留まつた。

制服といえば、文頼ふみよりほうれん逢恋が纏っている服も制服である。

どこの学校のものかは特定できないが、よくある白いカッターシ
ヤツに少し短めのプリーツスカート。カッターシャツの上にニットの
の半袖ブラウスを着ているため、雨に濡れてカッターシャツが・・・
などというお約束の展開はないわけだが、別にがっかりしたりはし
ない一方通行。

しかしそんな制服らしい制服を纏っている文頼はやはりどこかの
学校の生徒なのだろうか、と考えた彼は、少し離れたところで洋服
を見ている少女へと視線を移す。

するとどうやら問題の少女は右手に持っている服と左手に持って

いる服のどちらがかわいいかを決めかねているらしく、眉間にしわを寄せて唸るように考えている。

と、そこで文頼と一方通行の目が合った。すると文頼は約一秒後に笑顔を浮かべ、とてととと一方通行へと接近してくる。そのまま目の前で足を止めると、両手に1つずつ持っている服を提示して、

「ねえねえ、これどっちがいいと思う?」

「懲りねエなオマエ、俺はそういう質問に答えられない人間だつてさつきも言っただろオが」

「ん、でもどっちもかわいいから決められなくてさ。何なら試着してもいいから、ね? お願い!」

そんなこんなで試着室に入る文頼とその前で待たされることになった一方通行。幸い試着室の前にはベンチがあったため、ずっと立っただけで待たされるといふことはなかったが、それでも彼は表情は優れない。

困惑している、というのが一番適切だろう。今日出会ったばかりの少女に『友達』と呼ばれ、こうして服を選んでくれと頼まれるほどに信頼されている。

生まれてから今日に至るまで体験しなかったこと。それは彼の心を大きく動かすと同時に、彼の頭を大きく混乱させていた。

キィ・・・、と試着室の扉が開く。中から出てきたのは白色のワンピースに包まれた文頼だ。

彼女はくるりと一回転してへへ、と表情を歪ませると、

「どつどつ、似合っ?」

嬉しそうな声だった。

これもやはり似合っている、と言える範疇に入っていただろう。だが、やはり一方通行にはそういうものはよくわからない。

「さアな、似合ってるんじゃないの?」

だから彼は曖昧に答える。照れ隠しでも、御世辞でもなくあくまで曖昧に。

だが、当の本人はどうもそれを真に受けてしまったらしく、『そ、

そうかな?』と軽く顔を赤らめている。

念のためもう1つの方も着てみるね、と言いつつ残りして試着室に戻る文頼。手持ち無沙汰になった一方通行は考え事を再開しようとするが、そこで試着室の扉が突然開いた。どうやら着替えが完了したらしい。

思わずはええよ! とツツコミを入れそうになる場面だが一方通行はそこまでハイテンションな人間ではないため、特にツツコミが飛ぶようなことはなかった。

中から出てきた文頼の服装は、少し大き目のリボンで装飾された白のボウタイブラウスに赤のミニスカート。足はニーソックスでふとももあたりまで覆い隠されていて、無駄に肌色が強調され過ぎないように工夫されている。

「ど、どうかな・・・?」

流石にこれはかなりいろんなところが強調される服装のため、文頼も恥ずかしいのか少し控えめに質問する。

対し、一方通行が示した反応は意外なものだった。

絶句。

引いたとか、流石にないだろとかそういうものが原因ではなく、ただ単純に心の中にある感情が湧いて出たからだ。彼は理解する。それが『似合っている』と思った時に湧く感情なのだと。

「ああ・・・いいんじゃないの?」

「ホント!? さっきのとどっちがいい?」

「こっち」

「やた、じゃあこれ買いだ!」

言うとうれしそうに扉を閉め、元の制服に着替える文頼。どうやら一方通行に決めてもらったことがよほど嬉しかったらしく、中からは鼻歌すら聞こえてくる始末。

一方通行に恋愛感情というものは今のところ存在しない。したがって色気も通用しない。だからさっきの服装に抱いた感想はあくまでも『似合っている』というものだけだ。だが、彼にとってそんな

感想を抱くのは珍しい。

これが『成長』なのか、『衰退』なのか。

それすらも今の彼にはわからないが、彼はこれを『成長』であることを願うことにした。

「あ、一方通行！」
アクセラレータ

バンツ！ と試着室の扉が勢い良く開かれる。そこから飛び出してきたのはもちろん文頼だ。どうやら既に元の制服に着替え終わっていたらしいが、なにやら問題が起きたらしい。彼女はものすごいスピードで一方通行の眼前まで来ると、目尻に少しだけ涙を浮かばせてじっ、と彼を見つめる。

アクセラレータ
一方通行は距離があまりに近かったため、面倒臭そうに顔を背けながら、

「ンだよ騒がしい、何があつた？」

「・・・ない」

眼前にいるにも関わらず聴き取れないようなとても小さな声。思わず一方通行が疑問の声を漏らすと、彼女は一拍置いてから、

「私今あんまりお金持っていないの・・・」

「・・・」

しばらく、沈黙が訪れた。

アクセラレータ
この数分後に一方通行が買い物籠を持ってレジに向かったなどというシニールな光景が繰り広げられたのは言うまでもないだろう。

超能力者の非日常(6) (後書き)

ちよいつと在庫ヤバくなってきましたねw
まあなんとか停滞してしまわないよう全力で書いていこうと思っ
ます！

次回：第二の異変

え？ 何で今回だけ次回予告がまともなのかって？
そんなことより慟哭の夕緋も是非読んでみてくださいね！！

超能力者の非日常(7)

学園都市第7学区。

お嬢様が通うような名門校からあまり成績のよろしくない不良校まで一通りの学校が揃ったバランスのとれた学区だが、故にあまり特徴がないことで有名だ。

通常、第6学区には遊園地、第23学区には飛行場といったようにその学区に割り当てられた役割というものが存在しているハズなのだが、この第7学区にはそういったものが一切ない。

まさに学園都市の名前の通り、勉学のみに専念した学区といっても過言ではないだろう。

そんな第7学区の大通りを一方通行は左手に傘を持ち、右手で現代的なデザインをした杖をついて歩いていた。その横で肩を並べて歩いているのは新しく傘を購入した文頼だ。

彼女は右手で傘を持ち、左手で紙袋を抱くようにして抱えてうれしそうに鼻歌を奏でたりなんかしている。どうやら、よほどさっきの服が気に入っているらしい。

「何がそんなにいいんだか。服なんて一着ありゃ十分だろオが」
一方通行は吐き捨てるように呟く。だが、独り言のつもりがどうやら文頼に聞こえてしまっていたらしく、彼女はむっとした表情を浮かべると、

「わかってないねキミは、女の子というものはこういうかわい服を何着も持っておきたいものなのだよ。それに気になる男の子とかができた時に便利だしね」

「そオいうのはよくわかんねエがソイツの趣味の問題もあんだろ。だったらある程度準備しておいてソイツに選んでもらった方がよくねエか？」

「……これだから鈍感な男は困るのだよ」
やれやれ、とため息を吐く文頼。

「大体自分で言ってるで何で気がつかないのかなあ。もしかして男子ってみんな天然さんなの？」

「オマエはさつきから何ぶつくさ言ってるやがる？」

「イーエ、何でもございません」

ぶいつ、とかわいらしくスネる文頼に本格的にわけがわからなくなつた一方通行。アクセラレータ

そんなことをしている内に次の目的地に着いたのか、文頼の足が止まる。同時に一方通行も足を止めて前方を見渡してみると、そこに広がっている景色は見覚えのあるもの。つまり、

「・・・公園？」

「そ、公園。それも私とキミがさつき初めて出会った場所」

「これからどこ連れまわされんのかと思つたらこんな場所かよ」

「あら意外。もつと連れまわしてほしかったの？ キミそついうタイプの人間だつたっけ？」

「・・・そりや夢の中であんだけ連れまわされりや流石にあきらめるつての」

一方通行はうんざりとした声で呟いて、

「ンで、用とやらはこんだけか？ だつたら俺は帰るぞ。生憎ガキみてエに晩飯の時間までには帰つて来いって言われてる身なんですね。病人だから仕方ないとはいえ随分ナメられたもんだ」

などと軽口を叩いてみるが返事がない。気になって視線を文頼の方へ移すと、彼女は何故か俯いていた。

まるで、あの白昼夢の最後のシーンのように。

「夢なんかじゃないよ」

彼女は俯いたまま呟く。だがその声色は先程までの明るい調子のもではなく、まるでこれから人殺してもする決心が着いた時のような低い声。

その声色を維持したまま、彼女は続ける。

「夢なんかじゃない、それは本当にあったこと。だって、そんなにリアルな夢が白昼夢なわけがないじゃない。大体、文頼逢恋なん

て最初からキミの記憶の中に存在していない人物がキミの白昼夢に現れるわけない。それともキミはそういうことを勝手に妄想しちゃうような人間なのかな？」

「・・・どオいうことだ？」

「夢というのは記憶の整理、記憶の整理ということは記憶の中から一部が夢となって現れ、そしてそのまま消える場合もあれば残る場合もある」

淡々とした口調だった。

先程までの彼女とまるで違う。いや、彼女だけではない。いつの間にか、彼女を取り巻き巻く空気すらもどこか殺伐としたものに変わってしまっている。

恐怖。

そんな空気の中アクセラレータ一方通行の抱いた感想だった。だが、何が怖いのがわからない。

死ぬことが怖いのか、それともこれから起きる何かに脅えているのか。

恐怖で落ち着かない心を必死に抑えつけ、何かを考えようとするが何を考えればいいのかわからない。

「記憶じゃない」

ポツリ、と少女が呟いた。

「それも含まれてはいるけど実際には違う。消えたのはもっと巨

大なものアクセラレータ

一方通行の背中に何か嫌なものが走った気がした。

とにかくわからない。答えを教えてもらうにしても、何をどう尋ねればいいのかわからない。

「夢ではない」

暗い声で、少女が呟いた。

「本当にあつた『時間』。キミが過去に私と過ごした時間は確かに存在している。でも、私にとっても予想外だった。覚えていられるとは思っていなかった」

言っている意味は理解できなかった。当然だ、例えば、ここに『私』という文字があったでしょう。そして問題文には『この一文字を使って8人の中から少女Aの家族を探しなさい』と書かれている。他にヒントがない状況で、これを解ける人がいるだろうか？何もわからない状況のまま、文頼は独り言のように続ける。

「前の『時間』ではダメだった。そしてこの『時間』でもきつとダメ。次の『時間』ではキミと会うことができないかもしれないけどそれは仕方ない。だからキミが自分を責めることはない」

「・・・どオという意味だ？」

やっとの思いで一方通行は尋ねるが、彼女は答えない。

直後、視界の端が黒くなった。

それはまるで視界を浸食するようにどんどん広がって行き、ものすごいスピードで視界の中心を目指す。眠気にも似たその間隔を必至に堪え、文頼に手を伸ばそうとするが届かない。いや、もはや手を1ミリ上げることすらできない。

そんなことをしている間にも黒い何かはどんどん一方通行の視界を浸食していく。

だが、そんな空間の中で、彼の耳に届いたものがあつた。

「次の『時間』でキミがこの出来事を覚えているかどうかはわからないけど、もし会うことができるのならまたキミと」

プツリ、と。文頼の言葉が途切れた。同時に周囲から音が無くなる。そんな中で最後に残ったものはもうほとんどが浸食されてしまった視界。

沈み行く意識の中、ほんの少しだけ残っていた視界に映つたものは、透明な液体で濡れた文頼の笑顔。

それが雨だったのか涙だったのか、狭くなってしまうた視界で必死

に確認しようとしたが、次の瞬間にはもう一方アクセラレータ通行の視界は黒いもので覆い尽くされ、意識はゆっくりと闇の中へ沈んで行った。

超能力者の非日常(7) (後書き)

さて、文頼の抱えている問題が徐々に浮き彫りになりつつありますね。

もう彼女がどんな能力を使うのかわかった方もいるのではないのでしょうか？

次回：行間二

個人的に今書いている4章の中盤が超アツいw

といっても胸を張れるほどすごい展開というわけでもありませんが・

・
・
w

行間二

世界が止まった。

目の前にいる現代風のデザインをした杖をついた少年の動きは止まり、上空から降ってきた水滴を受け止めて揺れる葉も停止し、その葉を揺らしていた雨粒すら空中で静止する。

そんな中、1つの水滴が地面に落ちる。

しかし、それは雨ではなく、少女の頬から流れ落ちたもの。

たった1人だけ止まってしまった世界で動き続けている少女の頬を伝っているもの。

少女はそれを制服の袖で拭くと、同時に世界が動き始めた。だが、それは決して自然な動きではない。

まるでビデオを巻き戻した時のように、周囲の世界が巻き戻り始める。

少年は後ろ向きで歩き、雨は地面から上空へと消え、排水溝を流れる水がどんどん逆流していく。

それでも少女だけは決して動かない。まるで彼女を中心に世界が戻っているかのように、彼女の周囲だけがものすごいスピードでどんどん巻き戻り続けている。

やがて公園に戻ってきた杖をついた少年が石の階段を上り、どこかへ消えて数秒経つと世界が再び止まる。

だがその静止もすぐに終わり、再生が始まると容赦なく少女に雨粒が降り注ぐ。

見ると先程まで少女の右手にあった傘がなくなっている。

巻き戻りの際に元の位置に戻ってしまったのだろうかと予測するがそれ以上は追及しない。別になくなったところで何かが変わるわけではないし、あったところで変わるのとは少女が雨に濡れることはないということぐらいだ。

そんなちっぽけなことを気にしていても仕方がない。

少女はふらふらと歩き、いつものベンチに腰掛ける。

木製のベンチは雨に濡れていてお尻のあたりが非常に気持ち悪かったが、これもいつものことだ。気に留めるようなことではない。

「二万千七百六十四回目か・・・」

俯き、地面を眺めながら呟く。

「ああ、彼と出会ったのは二回だから・・・三回目の時間なのかな？」

たはは、と軽く笑うが苦笑いにしかならない。

しばらく、自分の髪の手前から滴り落ちる水滴がポタポタと膝の上に落ちるのを眺める。そうしながら、彼女の頭の中では1つの単語がぐるぐると回転するように暴れ回っていた。

「3回目・・・」

思わずその単語を口に出す。

「これが、最後」

それは、彼女が決めたルール。

これ以上他人を巻き込まないために作った、たった1つの決まり事。だが、それはあまりにも残酷で、彼女自身も失くしてしまいたいと何度も思ったもの。

(でも・・・)

巻き込んで、いけない。

大事な人だからこそ、傷つけたくはない。

だから、このルールは正しい。

何度も何度も自分にそう言い聞かせ、守ってきたもの。それは学園都市第一位の少年だろうと例外なく適用される。

「だから、最後」

もう一度自分に強く言い聞かせる。

「これで救われなかったら・・・終わり!」

行間二(後書き)

今回は短めとなっております。

バトルパートは4章の6ぐらいからですかねw

次回：行動開始

もう少しggggが続きますw

雨降る街の中央で（1）

「ミーカーカーもーいーくー！！　って、ミサカはミサカは必殺『子供のように駄々をこねてお願い事を聞かざるを得ない状況を作り出す』攻撃を実行してみたり~~~~っ！！」

病室内に小さな女の子の音が響き渡る。

またか、と一方通行は小さな声で吐き捨て、黒いチョーカーのスイッチを入れると、手慣れた動作で打ち止めの呪縛から逃れ、服をひよいと摘むと、そのまま歩いて芳川に差し出して、

「今は何月の何日だ？」

一方通行が尋ねると、芳川は少し唾然とした表情で打ち止めを受け取ってから、

「9月21日の午後2時22分だけど・・・？」

芳川が質問に答え、一方通行はチョーカーのスイッチを切り変えてから病室にあった掛け時計に目を移す。

針の先が妙に鋭いせいで多少曖昧だったが、時刻は大体午後2時22分を刺していることは確認できた。次にカレンダーに視線を移すと、9月21日の枠に『一方通行　リハビリ』とかわいらしい文字で書かれてある。おそらく打ち止めの文字だろう。

「オイ、携帯電話は持つてんのか？」

鋭い声を芳川に投げると、彼女は多少戸惑ったように、

「ええ、そりゃあ一応社会人だから持つてるけど　、」

「貸せ」

「貴方が携帯電話を使うだなんて珍しいわね。電話を掛けたいのなら病院の公衆電話で掛ければ　」

「急ぎの用事だ、いいから貸せ」

遮って杖を持っていない方の手を出すと、芳川は怪訝な表情を浮かべたが、やがてポケットから携帯電話を取り出すとそれを一方通行の手の上に乗せる。

そうして携帯電話を受け取った一方通行は、未だに怪訝な顔を浮かべている打ち止めと芳川を無視して電話帳に登録されているある人物へと電話を掛ける。

数回呼び出し音がした後、その人物はあっさりと電話に出た。

『はいはい、こちら警備員アンチスキルの黄泉川じゃんよー』

などと、軽い調子の電話の相手の名前は『黄泉川愛穂よみかわあしほ』。一方通行の

正確には芳川の知り合いで、警備員アンチスキルと呼ばれている学園都市の治安維持部隊に所属している女性教師だ。

普段は一方通行の方から彼女に話しかけることはないが、今日は例外だ。

「急ぎの用がある、説明してる暇はねエ、手短に言っぞ」

『あれ、桔梗の番号からかかってきたのに全然別人の声じゃん。』

声色から予想してみるに一方通行？』

「『文頼逢恋ふみよりほうれん』ってヤツがこの街にいるかどオか調べろ」

『君がそんなに焦っているなんて珍しい、何があったのかは知らないけどとりあえず落ち着くじゃん』

宥めるような彼女を聞いて一方通行は少し頭を冷やす。

「悪イ、ただどオしても必要な情報だ、できる限りの範囲でいい。見つからなかったら見つからなかったでそれはそれで情報だ」

『・・・こりゃ事態は思った以上に深刻みたいじゃん？ 君が他人に謝るなんて前代未聞じゃんよ』

「・・・」

『わかった、そこまで言われれば仕方ないじゃん。「文頼逢恋」、その人物がこの街にいるかどうかを調べればいいじゃんね？』

「厳密には書庫バンクに登録されているかどオかだ。見つけたらすぐ連絡しろ」

『ちよつと待つじゃん！ 連絡しろって言ったって携帯電話持っていないアンタにどうやって連絡するじゃん？』

「・・・そオいやそオだな」

『はあ、学園都市1位がそんなことに気付かないなんてこりゃよ

つぽど重傷みたいじゃん？』電話の向こうの人物は少し考えるように間を空けて、『とりあえず携帯は桔梗のを借りるじゃん。電話帳に番号登録されてるしお互いに連絡が取りやすいじゃんね』

「芳川にはなんて言やアいい？」

『そこらへんは適当でいいじゃんよ、何ならそのまま無言で携帯奪い去つても構わない。責任は全部私が取るじゃん』

「・・・オマエよくそんなんで友達ができたな」

『褒められても困るじゃんよ〜』

「褒めてねエし」

などと軽口を言い交してほぼ一方的に通話を切る一方通行。

彼はそのまま顔を芳川達の方に向け、

「この携帯借りてくぞ、文句は全部黄泉川に言え」

「え？ あ、ちよつと待ちなさいな！」

芳川は手を伸ばし、一方通行の左手を掴もうとが、虚しくもその手は空を切る。

しかし、彼はそれを気にしない。とにかく時間がないのだ。

彼はそのまま踵を返して病室を後にしようとする。

だが、

「待つて！！」

そこで一方通行の服を掴んだものがあつた。

そのおかげで前に進むうとしていた一方通行の体が止まり、彼の注意を引きつけることに成功する。

一方通行が首だけを動かして後ろを見ると、そこにいたのは芳川と、腕を伸ばした打ち止めだ。彼女の腕の先に視線を移すと、そこには一方通行の服を掴んだ小さな手がある。

だが、それは所詮小さなもの。強引に振りほどくことなどたやすい。

しかし、一方通行はそれをしない。何故そうしないのかはわから

なかったが、彼は直感的に判断していた。

「どこに・・・行くの？」

「・・・」

「行かないでってミサカはミサカはお願いしてみる」

「ただりハビリに行くだけだろオが、心配することなんて何もね
エ」

「嫌な予感がするのってミサカはミサカは直感的に感じ取ったこ
とを素直に述べてみる」

「・・・そオか」

一方通行の足が一步だけ前に出る。

それだけで打ち止めの手は服から離れた。ぶらり、と空中に投げ
だされそうになった手を何かが包み込む。

それは一方通行の両手だった。

彼はまるで騎士のようにしやがみ込み、これから王女の手のひら
にキスをするかのような体制で、

「いいか、オレは学園都市1位の能力者だ。ちょっとやさつとの
ことじゃ負けることはねエし、まして死ぬことなんてありえねエ。

だから安心しろ、俺は絶対にここに戻って来る」

「本当？ ってミサカはミサカは確認と取ってみる」

「・・・あア」

「約束、してくれる？ ってミサカはミサカは小指を前に出して
みたり」

すつ、と。打ち止めの小さな小指が差しだされる。

一方通行は一瞬ためらったが、やがて同じように小指を差しだす
と、打ち止めのそれと絡め合わせて、

「これでいいんだろ？」

「うん、約束だからねってミサカはミサカは再確認してみたり」

「あア・・・」

一方通行と打ち止めの指が離れる。

杖を拾い、ゆっくりとした動作で立ちあがった一方通行は、ぼん、

と打ち止めの頭の上に手を置いて、

「約束だ、必ず戻る」

とだけ言っていると、打ち止めの頭の上に乘せていた手をなでるようにして下ろし、そのまま病室を後にした。

雨降る街の中央で（1）（後書き）

最近急にとあるPSのお気に入り登録件数が増えてきて正直かなり戸惑ってますw

ち、ちなみにとあるPSはとあるSPのパクリじゃないんだからねっ！

あれが発売するって情報が出る前からタイトルは決まってたんだからねっ！

次回：情報と変化

感想等々書いてもらえるところらしいです>>

雨降る街の中央で（2）

学園都市にはいろいろなところに『情報屋』^{メディア} というものが存在する。

科学の総本山であるこの街ではいろいろな権力や力が働き、そのためにより巨大な『闇』が存在していて、それは孤立しているものであったり、組織で動く一種のマフィアのようなものである。そして、そんな『闇』の世界で生きる住人にとっては『情報』が必要になってくる。

そのためにできあがったのが、『情報屋』^{メディア} だ。

彼らはあらゆる手段を使って情報を手に入れ、その情報を手に入れた苦勞に見合う値段でその情報を売ることによって資金を手に入れる。

一見楽そうな仕事に見えなくもないが、案外これは危険な仕事だ。情報を手に入れるのに危険が伴うのはもちろん、その手に入れた情報がもし偽物だった場合、その情報屋は『闇』^{メディア} の組織によって暗殺される、なんていうのはよくある話だ。

だが、それでも『闇』の世界には情報屋が必要だ。よって『闇』が直接スキルアウトや金のない者を誑かして情報屋^{メディア} に仕立て上げることもあるなどという噂も飛び交っているが、正直なところその辺についての情報は曖昧^{あいまい}なため、よくわかっていない。

そんな情報屋^{メディア}だが、もちろんここ第7学区にも存在している。

一方通行は現代風なデザインをした杖をついて薄汚れたマンションの階段を上がり、ゴミがそこら中に放置されている廊下を歩いて目的の扉の前で立ち止まる。

何の変哲もない扉だが、実は特殊な細工^{せいこう}が施されていて、ドアノブを回した程度では普通に鍵がかかっていて、扉が開かない程度なので、間違えて扉を開けようとした人がケガをすることなどありえないが、強引に開けようとすると防犯装置が作動し、侵入者を撃退

できるような仕掛けになっている。

これは情報屋メディアが間違った情報売りつけてしまい、『闇』の組織が襲撃してきた時に備えて作った、万が一の時のためのものらしいが、間違った情報メディアを売りつけた情報屋が生き延びたなどという話はいくらも聞いたことがないため、おそらく時間稼ぎ程度にしかないとわかったうえで作ったものなのだろう。

もしこの防犯装置のおかげで1%でも生き延びられる可能性が上がれば、それに越したことはない。そのために大金を捨てることになっても構わない。ここはそういった世界なのだ。

一方通行は左手で見た目は何の変哲もないドアを2回ほどノックする。別に能力を使って強引に入っても構わないのだが、相手を脅かしてしまつては余計面倒になるため、あえて普通に部屋の中に入ることにしたらしい。

『合言葉どうぞー』

扉の向こうから声が出た。もちろんそれは情報屋メディアのものだ。あまりにも気の抜けた声に一方通行は思わず呆れた顔を浮かべたが、構わず扉に向けて面倒臭そうな声を放つ。

「龍の瞳は銀河の如く光り輝く」

自分でも小っ恥ずかしいことを言っていることは理解していたが、言わなければロクに交渉もできないため、ここは妥協する。

ピー、という音と共にドアがゆっくりと内側に向かって開く。一人が入れる程度にまで扉が開くのを確認すると、一方通行は杖をついてゆっくりとした調子で部屋の中に侵入する。

足を踏み入れた直後に背後で音を立てて扉が閉まつたが、一方通行は振り返らない。

律儀にも靴を脱いでから部屋の中に入ると、そこにはちらかった薄暗い景色が広がっていた。雑誌や食べた後のカップ麺の容器。何やらびっしりと文字が書かれた紙に、極めつけには画面が割れてしまっているテレビや、ケーブルの類が一切繋がれていない埃のかぶったパソコンのディスプレイまでゴミの山の一部となつてしまつて

いる。

「相変わらずだなメルヘン野郎」

「そういうキミはずいぶん変わったようだね一方通行」

くるり、と回転イスを回してこちらを向いたのは青年だ。服装は至って地味。安物のワイシャツに、傷もののジーンズ。まだ少し幼さを感じさせる顔には、うっすらと髭が生え始めていて、その幼さを圧迫しつつあるのがわかる。

この青年の名前は不明。一方通行がまだ『闇』にいた頃に出会った人物だが、向こうから名乗ってくることはないし、こちらから聞き出すつもりもないので、未だに詳細不明の人物なのだ。

そんな詳細不明の青年は、ニヤリと不敵に表情を歪めて、

「いやはやびつくりしたよ、キミの口からまさかあんな小っ恥ずかしい合言葉が出てくるなんて重いもしくなかつたよ。監視カメラで見ただからキミだということはわかっていたから正直からかつたつもりだったんだけどね、何かあつたのかい？」

「・・・チツ、つくづくム力つくヤロオだ」

「そんなム力つく野郎に頼るほど、何か重要な用事なんだろう？」

要件は何だい、妹達の現状？ シスターズ はたまた現在の『闇』の勢力図？」

「ある人物の個人情報だ」

ピクリ、と少しだけ情報屋の青年の眉が動いた。だが、その表情は変わらない。彼は相変わらずヘラヘラとした表情のまま、

「あ、一方通行・・・キミもついにそっちの趣味に目覚めたんだね！？ 俺はうれしいよ、学園都市最強の一超能力者（レベル5）が我らと同類になればまさに最強ではないか！！ で、キミのほしい個人情報は何のものだい？ 幼女かい、それとも熟女？」

「・・・テメエ一度脳内の生態電流のベクトルでも操作して生まれたての脳みそにでも戻してやるオカ？」

「じよ、冗談だよ一方通行・・・」

割と本気でチョーカーのスイッチを入れようとしていた一方通行だが、青年の言葉で何とか思いとどまると、そのまま重いため息を

1つ吐く。

青年は、そんな一方通行の様子を観察するように見ていたが、やがてデスクの上に置いてあったカップを手に取ると、それをそのまま口へ運ぶ。

「で、その子の名前は？ わからなければ住所、電話番号、見た目、なんでもいい。とにかく1つでも個人情報ほしい」

「情報屋が情報を求めるつても変な話だなオイ」

「仕方ないだろう、人を探してほしいなんて言われて何のヒントもなしに目的の人物を探しあてられる人間などこの世に存在していると思うかい？」

「どつかの一超能力者（レベル5）なら平然とやってのけそうだけどな」

「あ、あくまで一般論として答えてほしかったんだけどね。生憎僕は無能力者（レベル0）の烙印を押されてるものだし」

「ンなこたアどうでもいい、さっさと今から俺の言う名前に該当する人物を探せ」

「話の趣旨を折ったのはキミだろうに、相変わらずひねくれてるねキミは」

言いながらもイスを回転させてパソコンのディスプレイに向かう青年。一方通行も杖をつきながらゴミの山を抜け、彼の後ろにつくと共にディスプレイを覗く。

情報屋メディアの青年はなにやらカタカタとキーボードをリズムカルに叩いて何かを操作しているようだったが、画面を見ているも一方通行にはあまり理解することはできない。断片的な情報から分析するとどうやらこの街の個人情報を取り扱っている書庫バンクにアクセスしようとしているらしい。

青年はそのままキーボードをリズムカルに叩きながら、

「で、探してほしいのは誰だい？」

「名前は『文頼逢恋』ふみよりほうれん。性別は女。背丈は大体俺と同じくれエだ。つか書庫バンクにアクセスする必要はねエ、ソッチは今俺の知り合いに調

べさせてる。オマエは『闇』についての情報網から探りを入れる」

「知り合いねえ、キミが信頼できる人間に頼るなんて珍しい。本当に何かあったのかい、一方通行？」

「・・・余計なお世話だクソツタレ」

と、吐き捨てるように一方通行が呟いた瞬間、彼のポケットの中に入っている携帯から突如電子的な音楽が放たれた。歌詞はなく、至って電子的な音だったことから推測するに、どうやら元々携帯にデフォルトで入っている着信音を採用しているのだろう。

彼はポケットから携帯を取り出すと、そのまま開いてディスプレイを確認する。

画面の中央には大きな電話のマークが表示されていて、その下に『黄泉川愛穂』という名前がある。それを確認した一方通行は迷わず通話ボタンを押すと、そのまま携帯を耳に当てる。

『あー、もしもし一方通行？』

「黄泉川か、電話してきたってことは何かわかったみてエだな」と、一方通行が適当に応じると、電話の相手は何故か言い淀む。

それに対して一方通行が怪訝な顔を浮かべていると、電話の主は実際に困ったような声で再び会話を再開する。

『それが全然じゃん？ 「ふみよりほうれん」で書庫にアクセスしている調べてみたけど掠りもしない。本当に学園都市に実在するのかってくらい真っ白だったじゃん』

それを聞いて一方通行は少しだけ押し黙る。

やはり、文頼逢恋は学園都市の表側の人間ではない。だとすれば可能性は二つ。学園都市外部の人間か、もしくは学園都市の裏側の人間か。

どちらにしてもこれで事の重大さは明らかになった。明らかに文頼逢恋には何かがある。そう考えた一方通行は、情報屋に目配せをして軽く指令を送ると、彼は無言で頷いてPCの画面に向き直る。

それを確認した一方通行は、再び携帯電話へと意識を集中させる。「情報はsonだけか？ 最近学園都市に侵入した不審人物とか何

か不審に思ったことでも何でもいい、とにかくなにかねエのか」

『そういうのは全然ないじゃん、学園都市は今日も至って平和。むしろ不気味に思えてくるぐらいに、ね』

「そおか、手間掛けさせたな黄泉川。後は俺がなにかする」

言つて、電話を切るうと思つたところで電話の向こう側から笑い声が聞こえた。

怪訝に思つた一方通行は、ほんの少しだけ表情を歪めると、再び電話を耳に当てて、

「何が可笑しい？」

すると、電話の向こう側の人物は返事が返つてくると思つていなかったのか、少しだけ黙り込んだが、やがて『いやいや』と前置きをして、

『キミが他人に礼を言うところなんて始めて見たからさ。いや、

この場合は「始めて聞いた」、かな？』

「・・・、」

少しだけ黙り込む一方通行。電話の向こう側の人物は、そんな彼の心情を彼以上に理解していたのか、言い淀むことなく続ける。

『一方通行、キミが何に巻き込まれているのかは知らない。それがとんでもなく大きい陰謀かもしれないし極めてプライベートなものなのかの検討もつかない』

でもね、と黄泉川は付け加えて、

『私はキミの味方だ。もし人手が足りなきやすぐにも駆けつけるしもつと人員が必要だつて言うのなら警備員アンチスキルの一部隊を引き連れてでもキミを助けに行く。だから決して無理はしないように、わかつた？』

まるで、母親のような言葉だつた。

以前の一方通行なら『バカバカしい』と吐き捨てていただろう。だが、今の彼は違う。

何が違つのかなんて彼自身にもわからない。ただ、漠然とした何かが変わった学園都市第一位は、ほんの少しだけ表情を緩めると、

「ああ、わかった。何かあればまた連絡する」
とだけ言つと、今度こそ迷つことなく通話を終了させた。

雨降る街の中央で(2) (後書き)

情報屋？ そんなものはなかった(キリッ

本編では登場しないのであしからずw

ちなみに『メディア』という言葉の意味は把握してますw

次回：世界のヒミツ

やばい何この厨二っぽい次回予告・・・//

雨降る街の中央で（3）

結局情報と呼べるような情報は手に入らなかった。

あの後情報屋^{メディア}に学園都市の『裏側』についていろいろ調べさせた方がいいが、やはり文頼逢恋に関する情報はゼロ。これには流石の一方通行も目を疑った。『表側』でゼロならともかく『裏側』でゼロというのは相当なものだ。

それほどまでに学園都市の『闇』というのは深いものなのだ。

しかし、これで条件が絞り込まれたのも事実だ。

一方通行が立てた仮設は2つ。

1つ目は文頼逢恋が学園都市外部の人間だということ。

これはおそらく誰もが考えることだろう。学園都市の書庫^{バンク}に登録されておらず、さらに学園都市の『闇』とも関わりがないのであれば、それはもう外部の人間だ。

だが、そうなるとこの不思議な現象の説明がつかない。そんなことを調べるために彼は街中をさまよっていたわけではない。

そして2つ目は文頼逢恋という少女は学園都市の『闇』の中でも深い位置に存在しているということ。

これはありえない話ではない。実際、これまで学園都市の『闇』の中にいた一方通行^{アクセラレータ}だが、そこが『闇』の最底部だったとは思っていない。むしろあれぐらいの『闇』などまだまだ浅いものなのだろう。

それぐらい学園都市というものはどす黒い渦が多数存在している。そしてこの学園都市という一つの『闇』が一介の情報屋^{メディア}程度に『闇』の全てを知られるようなへマをするとは思えない。

となればこの仮説はかなり可能性が高いと言えるだろう。

だが、これも何かがおかしい。そこまで深い『闇』が、学園都市一位相手にこうもちままとした手段を使ってくるとは思えない。それにあの少女と話している間、学園都市一位にはたくさん隙が

あつたはずだ。殺すにしても『闇』に引き戻すにしてもその隙を利用しなかったことに対しての説明がつかない。

もし他の目的があつたにしても、こんなちまちまとした方法を実行しなければならなくなるほど『闇』と学園都市の力が不足していたとは到底思えない。

（だとするとこれ以外のもう一つの可能性でもあんのか？）

学園都市一位の知識を総動員して思考錯誤してみるが、やはり有力な説が生まれることはない。
ならば、

（面倒臭エ、もうちまちました情報収集はオシマイだ。最も単純で、かつ効率的な手段でケリをつける）

そんな理由もあつて、

「タイムリープ」

公園からほぼ強引に連れ出してきた文頼に事情を話してみると、彼女は開口一番そんな言葉を口にした。

ちなみに雨の中で話すのもあれなので場所を移し、今は彼女と最初に出会った時に訪れた喫茶店の席に腰掛け、向かい合う形で座っている二人は座っている。もちろん、タダで居座るのも悪いので適当なオーダーは済ませた後だ。

「・・・タイムリープだと？」

思わず眉をひそめる一方通行に対し、文頼はコクリと頷くと、真剣な表情で続ける。

「知っているとは思いつけど簡単に言ってしまうえば時間移動。いや、この場合は時間の巻き戻しって言った方がいいのかな。それを含むあらゆる時間を操作するのが私の能力」

「文字通り『時間操作』^{タイムリープ}ってワケか」

適当に呟くと、やはり頷いて肯定する文頼。

「ただ一つだけ、空間・・・つまり世界そのものの時間を意図的

に操作することはできないということ。つまり私が時間を操作できるのは物体に宿る時間を進めたり戻したりする程度のものなの」

「ちよつと待て、オマエがどんな能力を使うのかはわかった。だがそれだと辻褃が合わねエ、俺はこの・・・『時間』？ に来てからお前と会うまでいろいろ調べてみた。が、オマエに対する情報はゼロ。だが能力者であるオマエが書庫バンクの検索に引つかからねエのはおかしい」

それに、と一方通行は補足して、

「時間操作系の能力なんて聞いたことがねエ。あるとすればそれは」

「人間を越えた力、つまり絶対能力者（レベル6）ということになる」

遮るような文頼の言葉に思わず押し黙る一方通行。

気にせず文頼は続ける。

「その通りだよ、私の能力は絶対能力者（レベル6）。今のこの街には存在していないハズの能力」

「ハッ！ オマエふざけてンのか？ オマエがもし絶対能力者（レベル6）なら既に公式に発表されてるハズだろオが。それにもし発表されることがなかったとしてもこんなどころでブラブラしてられるとは思えねエ。確実にどっかの施設に囚われて実験用モルモットにでもなってるハズだろ」

「じゃあ仮に私がそうじゃなかったとしたら、今私の周囲で起こっている不思議な現象についてキミはどう説明する？」

ピクリ、と一方通行の眉が動いた。

確かにその通りだ、と彼は思う。今まで白昼夢かと思っていただけ象も、予知能力でも備わったのではないかと錯覚するほど同じような展開も、時間が巻き戻っていたのだとすればそれで全て説明がつく。

同時に彼は自分が冷静さを欠いていることに気がついた。いつも彼なら説明されずともそんな簡単なことに気付いていたハズだ。

だが、今日の彼は自分でも無意識の内に焦っていたようだ。その結果、判断能力が著しく低下してしまっている。

だが、それは同時に彼の成長を意味していたのかもしれない。いつもの一方通行ならそこで簡単に判断し、そして行動に移せていただろう。だが、その行動が必ずしも正解とは限らない。文頼のようにシビアなパターンの場合にはなおさらだ。慎重に事を運ばなければ何が起こるか検討もつかない。

だからこそ、彼はこの局面で冷静さを取り戻す必要があった。だが取り戻す必要があるのは以前彼が所持していた『冷酷さ』ではなく『冷静さ』だ。

お待たせしました、という声と共に高校生くらいの女性店員が注文していたコーヒートをテーブルに置く。それを受け流すように見ていた一方通行は、すう〜と自然な動作で一気に体内に酸素を取り込むと、代わりにゆっくりとした動作で二酸化炭素を大量に放出する。

そして告げた。

「つまりお前は『表側』の第一位である俺を大きく上回る絶対能力者（レベル6）ってワケか」

コクリ、とこれも肯定。

だが冷静さを取り戻した学園都市一位はそれを聞いても取り乱すことはなく、うるたえることもない。落ち着いた調子の彼は冷静に、そして慎重に言葉を選び、それを紡いでいく。

「今聞いたお前についての情報をまとめてみるとこオだ。まずお前の能力は絶対能力者（レベル6）の『時間操作』タイムトラベル。正式に公表されていない能力で、できることは『物体』に宿る時間を操作すること」

そこで一方通行は言葉を切って、

「ならどオして『空間』そのものの時間が巻き戻ってる？ オマ

工は『物体』に宿る時間しか操作できねエハズだ。この矛盾は一体何なんだ？」

そう、説明がつかない。

『物体』そのものに宿る時間を巻き戻すという能力でできることは限定されている。例えば、古い壊れた腕時計を新品の状態に戻したり、たくさんの枝と葉をつけた木を急速に老化させて枯れさせたりなど、情景の一部分のみを変えることしかできないはずだ。

だが、一方通行はこれまでに三度『情景』だけでなく、それを含む『舞台』そのものが何度も巻き戻るという不思議な現象をその身体験してきた。それは明らかに物体の時間を巻き戻したものではなく、空間そのものの時間を巻き戻した結果起こった現象だ。

だが、彼女は確かに『空間』の時間は操作できないと言った。ならばそこに矛盾が生じているのは明らかだ。

そして彼女が嘘をついているようには思えない。ここで嘘をついたところで彼女が得するようなことがあるとも思えない。

(だとしたらコイツ以外の時間操作系の能力者が操作している・・・?)

そう考えてみるがおそらく違う。そう思ったのはただの勘だが、『時間操作』なんていう希少な能力をもった非公式の能力者が二人もいるとは考えられない。

つまりは全てが謎だ。

そしてその謎の答えは少女の口から簡単に告げられた。

「能力の、暴走・・・」

「なんだと？」

告げられたものは簡単な内容だった。だが、それでも思わず自分の耳を疑ってしまうようなものだった。

能力の暴走。

それは確かに存在する。

例えば、壊れた衛星に搭載されていたスーパーコンピュータの残骸を回収し、それを再び組み立てることによって何かを得ようと

した事件がある。

その首謀者である少女の精神はとても不安定なもので、ハイフポイント座標移動という強力な瞬間移動系テレポートの能力を暴走させてしまい、その結果トラウマによって自身の体を瞬間移動テレポートさせることができなくなってしまうという事例がある。

例えば、『体晶』という名の能力を意図的に暴走させる薬品を使うことによって自身の能力の真価を発揮する能力者がいる。その事例は極めて稀だが、学園都市には『暴走状態の方が強い』能力者も複数存在している。

一方通行自身は能力を暴走させたことがないので具体的にその恐ろしさを知っているわけではないが、二つの事例を見てもらえばわかる通り、能力の暴走というものはどんな事例であったとしても良い結果を残してみんながハッピーエンドになりましたなんて結末を迎えたことなどない。

そのどれもがバッドエンドで終わってしまったっている。

そんな能力の暴走を、通常状態で自然災害級と言われている一超能力者（レベル5）を超える絶対能力者（レベル6）が起こしてしまえばどうなることだろうか？

（その結果がこの時間の巻き戻しタイムリープってワケか？）
考え、そして舌打ちする。

「フーことはアレか、テメエには何か精神的な欠陥があるってことか？ それとも『体晶』でも使って意図的にやってんのか？」

ふるふる、と首を横に振る文頼。これについては否定だ。

「私の場合はそういった一般的な能力の暴走とは違う。単に力が強大すぎて勝手に暴走してるだけ。周期的にそれが起こり、そしてある一点で必ず止まるのは多分溜めきれなく力を放出し、そしてまた吸収するのを繰り返してるんだと思う」

「能力を溜めるだと？ ンなことあるわけねエだろ。実際学園都市には一無能力者（レベル0）の連中も合わせて何万人という能力者が存在してるが、俺を含む能力者の1人が力を溜めすぎて暴走し

たなして話聞いたこともねエぞ？」

「それは、そうだけど・・・」

言い淀む文頼。学園都市一位の頭を持つ一超能力者（レベル5）の頂点である一方通行でも簡単に思いつくようなことだったが、その上に行く彼女がそれについて考えなかったのは相当焦っていたからだろう。

そんな絶対能力者（レベル6）らしからぬ少女を目の当たりにした一方通行は、大きく息を吐き、脳内の知識を総動員しながら言葉を紡ぐ。

「仮に力の溜めこみすぎで暴走しているとして、それならガス抜きみてエに定期的に能力を使うことによってその暴走を何とかすることはできねエのか？」

「多分、無理。空間なんて膨大なものの時間を巻き戻すほどの暴走だから物質に能力を使い続けたところで吸収する力が上回ってしまうと思う」

そこで彼女は考えるように沈黙し、

「やっぱり研究者に頼るしかないのかな？」

「そりゃ無理だな。まず時間がねエ、精密検査から能力の発動する演算パターン、調べるモンが多すぎる。たとえ新しい『時間』に移ってそれを実行したところで確実に間に合わねエだろオナ」

それを聞いた文頼は、『そっか』と小さく呟いてしゅんとすると、そのままサービスの水を口に含む。

「もオ案はねエのか？」

確認するように一方通行が尋ねるが、彼女は首を横に振るのみ。

それを見た一方通行は、イスの背もたれにもたれかかることによつて机に預けていた体重を全て背中へと集中させると、

「まさに八方塞がりつてヤツだな、クソが」

吐き捨てながらも、何故か彼は笑っていた。少女の哀れな姿にではなく、少女に襲いかかるこの世の理不尽とやらに、彼はただ純粹な笑みを向けていた。

「おもしれエ、こんぐれエの理不尽じゃねエとおもしろくねエ。そいつを真正面から叩き潰すのが、あの野郎のやり方だったな」

言って、立ち上がるうとしたところで彼は自分で注文した飲みかけのコーヒーを見てふとあることを考え、文頼に視線を投げると、

「そオいやオマエ何注文したんだ？」

「へ？ あゝ、えつと・・・実は・・・」

何かを言おうとしたところで、『お待たせいたしました』という声と共に巨大なパフェがテーブルの上にダン！！と置かれる。

それを見た一方通行は、最初は驚いたように目を見開いたが、やがて呆れたような顔を浮かべて単純にこう呟いた。

「・・・オマエ時間あんのか？」

雨降る街の中央で(3) (後書き)

ネタのキレが微妙になりつつある・・・っ!!

今回からupの時間が変わります。詳しくは活動報告の方に記載されてあるのでそちらをご覧ください。

次回：搜索

ご意見・感想等ありましたらどんどん書いてください！

雨降る街の中央で（４）

「タイムリミットは残り約１時間。新しい『時間』が始まってから次の『巻き戻し』が起るまで大体３時間くらいだから既にほぼ２時間は無駄にしちやってるね」

9月21日午後4時19分。軽い作戦会議と腹ごしらえ（をしたのは主に文頼だけだが）を済ませた一方通行と文頼は、とりあえず何かしらの可能性を探るため、午後の学園都市に繰り出していた。やはり外は相変わらずの雨。もう2時間以上降り続けているというのに、その勢いは増すことも減ることもない。まるで地上に落とす量を計算しているかのように、平均的な量を空から地面へと落とし続けている。

当然、それは文頼と一方通行にも降り注いでいたわけだが、片方の服が濡れることはない。理由は当然傘という文明の利器によって守られているからだ。

そして文明の利器に守られていない一方通行は、濡れた手で現代風のデザインをした杖のグリップをしっかりと握りつつ、それを利用してバランスを保ったまま雨の街を歩く。

「情報を仕入れてからの方が有利だと思ったがそれが裏目に出ちまったみてエだな」

自分の過ちに対するイライラを吐き捨てるように彼は呟く。だが、それだけでイライラが収まることはない。この限られた状況の中で2時間というタイムロスはあまりにも大きすぎる。別に次の『時間』に移って行動を開始するという手もないわけではないのだが、どうやら時間が巻き戻る時はいろいろと不安定になってしまふことがあるらしく、バグなようなものが生じて文頼という少女に関わった部分の記憶だけが消し飛んでしまうことが多々あるらしい。

その可能性を考えればやはりこの『時間』の間に決着をつけたい。そんな気持ちがある彼の焦燥感を煽り、イライラを増幅させているの

だろう。

という事情を知ってか知らずか、文頼は苦笑いを浮かべ、

「仕方ないよ、誰にでもミスはある。ミスをしない完璧な人間なんてこの世にはいない。いたしたらそれはきつと人間ではない何か・・・」

文頼はそこで一度言葉を切り、傘の角度を変えて空を見上げると、

「例えば、『神様』とかだったりしてね」

あっさりと言った言葉に一方通行は表情一つ変えることはなかったが、彼の口から反論が放たれることはない。

かつて彼はとある実験において絶対能力者（レベル6）というものを目指していたことがある。その実験においての彼の目的は『絶対』の存在になること。そうなればきつと何かが変わる、そう思い込んで1万人もの人間を殺してきた。

だが、それは結局叶わなかった。一人の少年によって阻止された、というのが正確かもしれないが、失敗は失敗だ。

学園都市最強でも到達できなかった絶対能力者。しかし、そこに辿り着いた『絶対』である八ズの少女は、自身のことを『完璧』ではないと言った。

『絶対』と『完璧』。この二つは似ているようで似ていないのか、はたまた似ているけどまるで違うものなのか。

もし後者ならば、『完璧』とは一体どれほどの存在なのだろうか・・・？

「ハッ、だったら『完璧な神様』とやらは大したことねエな」

そんなことを考えて、そしてその結果一方通行は極めてくだらなさうに吐き捨てた。

思わず文頼がきよとんとした表情を浮かべるが、彼は無視して続ける。

「『完璧』っつーのはこの世にある全てのものを正常に動かすこ

とだ。簡単に言ってみりゃ全ての人間がハッピーになるってことだな。なら、今の世界を見てオマエはどと思う？ 本当に人類全てがここに笑顔で幸せに暮らせてると思えるか？」

「それは」

「大体、」

文頼が何かを言いかけたが、一方通行はそれを強く遮り、まるで会話の主導権は自分が握っているとしても言いたげに言葉を紡ぐのをやめない。

「今、ここに『タイムリープ時間操作』なんてわけわかンねエ能力で苦しんでる人間が一人いる。ソイツを一瞬で救えねエのに自分を『完璧』だと思ってる『不完全な神様』なンざ大したことねエ、全知全能でただでふんぞり返ってるただの無能だ」

「ず、ずいぶんと悲観的だねキミって」

「お前がそういう風に思えるヤツのことを現実主義者リアリストってンだよ。まアオマエが神様とやらの存在を信じたところで俺にとやかく言う権利なんざねエことはわかってンだけどな」

「そうかもしんないね」と少女は小さくはにかんで、「でも私も神様の存在を信じない派かな」

「・・・、」

あっさりとした言葉だった。

だがその口調は至って穏やかだ。

もしかしたら、この少女はこうなってしまう前は神様という存在を信じていたのかもしれない。信じた結果、必死に努力して、少しでも神様とやらの教えをきちんと守ろうとして、その上で人々を幸せにしたかったのかもしれない。

この少女の性格を考えてみれば不思議なことではない。実際、一方通行はこの少女のおかげでここまで来ることができたのだから。だからこそ、この結果が認められない。

『完璧』を目指して努力した結果が悪夢でした、なんて結末は絶対に認められない。

「あれ、食いついてこないんだ」

などと考え事をしていると、先程と同じ穏やかな口調で文頼はそんなことを言う。

思わず歯ぎしりをしてしまいそうになった。

憎いはずなのに、自分をそんな風にした何かが許せないはずなのに、それを必死に堪えて全てを正しい方向へと導こうとしている少女の姿を見ているのは、今の彼にとって苦痛以外の何者でもなかった。

文頼をこんな風にした何かを完膚無きまでに叩き潰してやりたい。そんなどす黒い感情が胸の奥から湧きあがってくるが、

「今の状況で俺にどオ食いつけてんだ？ 第一オマエが神様ってヤツの存在を信じよオが信じまいが俺には関係ねエだろ」

彼はそれを必死に抑えて、いつも通りの口調で曖昧に答える。

少なくとも、今のこの穏やかな空気を壊したくない。そんな一方通行の意図を知りもしない文頼は、少しだけ驚いたような仕草をしながら、

「それは意外、以前のキミなら確実に私が神様の存在を信じてる派だと思いきんで反論してきたハズなのに」

「そいつアどオいう理論だ・・・」

半ば呆れ口調で言う一方通行だが、彼は内心少女の言う言葉を信じていたのだろう。

過去の自分なら、ここで何かしらの反論をしていたに違いない。何かに拘り続けていた自分なら、少女の意見を受け入れなかったに違いない。それは案外どうでもいい変化だったのかもしれない。だが、彼にはそうは思えなかった。このどうでもいい変化が何か大切なものに繋がっている。

そんな気がしていた。むしろ、そうであってほしいと願ってすらいた。

だが、今はそれについて考えている暇はない。

「それより短時間でこの広い街の中からどオヒントを探し出す？

ハッキリ言って俺達のやるオとしていることは砂漠の中を適当にさまざまに深い砂の中に埋もれている宝箱でも見つけるよオなものだぞ?」

「ん、それもそうなんだけどまあとりあえず動いた方がいいかなって・・・」

なんだそりゃ、と一方通行が呟くが、珍しく返事が返ってくることはない。おそらく彼女も相当焦っているのだろう。だが、その焦っている理由がわからない。

今回の騒動の中心である文頼は、何度も時間移動を繰り返して、そしてそれによって苦しめられているが、それは時間移動する前の記憶が残っているせいで苦しんでいるだけであって、もし記憶が残っていないのであれば彼女はそれに気付くこともなく平穩に暮らしていたことだろう。

だが、それを逆手にとってみれば、彼女には無限に時間があるということになる。

つまり今彼女が時間がないということに焦っているのは何かがおかしい。本当に無限の時間を有しているのであれば、時間の心配など必要ないはずだ。もし仮に一方通行の記憶が消えてしまつて二度とこの公園に現れることがなくなつたとしても、時間をかけて彼を捜索し、そしてもう一度巡り合うことができればそこからまた可能性を探すこともできたはずだ。

それに一方通行でなくても、協力してくれる人間なら探せば絶対にいるはずだ。

少なくともあの夜、操車場で戦つたあの男なら必ず助けてくれるはずだ。だから絶対に一方通行でなくてはいけないという理由はない。

(なのになんでこいつはこんなに焦る必要がある・・・?)

微かな矛盾だった。理由なんていらなかつたのかもしれない。心理的な焦りだつたのかもしれないし、単に次の『時間』に移動するのがもう嫌なだけだつたのかもしれない。

可能性はいくらでもあった。だが、彼はそこに何故か違和感を感じていた。

「・・・一方通行？」

ふと横合いからかけられた声によって我に返る。

声が出た方に視線を向けるとそこには心配そうな表情をした文頼がいたが、彼は『なんでもねえ』と適当に返事をしておくと、とりあえず思考を中断する。

今は別の問題がある。

他の問題について考えるのはその問題が片付いてからだ。

どうしたものかと第一位は考えるが、やはり具体的な解決策が思い浮かぶことはない。

となれば、

「オイ」

やはり元凶に聞くのが一番手っ取り早いだろう。

突如声を掛けられたことに驚いたのか、文頼は間抜けな返事をしてきたが、一方通行はそれを無視してさっさと要件のみを口にする。

「何か手掛かりはないのか」

「それがあつたら苦労はしないかもしれない・・・」

「そりゃごもつともな意見だな」

適当に返す一方通行だが、これでさらに焦りが加速したのは事実だ。いろいろなことを考えてみるが全て脳内で×マークを入れ、さらに複雑な思考を積み重ねて行くがやはり×マークしかつかない。

と、そんなこんなで彼のイライラメーターがぐんぐん上昇していたところで、

「あ、そうだ」

文頼の声が彼の思考を強引に中断させた。

「何か思いついたのか？」

冷静を装いつつ、しかし藁にもすがる思いで尋ねる第一位。

普通ならありえないような光景だが、少女はその光景に何の疑問も抱くことなく彼の目をまっすぐと見据えて、

「何か最初の『時間』に妙な男の人がいた気がする」

「妙な男・・・？」

「うん、最初の『時間』って言ってもキミと出会った最初の時間じゃなくてこのタイムリープが始まって最初に巻き戻った瞬間のことなんだけどね」

ここで明確な回数を告げなかったのは彼女なりの優しさなのだろう。

だが、それについて追及している場合ではない。一方通行は若干焦っている心を抑えつけながら、

「どんな男だった？」

「一瞬見ただけだったから特徴は思い出せない、でも多分見ればわかる」

「そいつアいかにも胡散臭エ野郎だ」

言いつつ彼はポケットから携帯電話を取り出す。

その男がこの事件に関わっている可能性は低いがないよりはマシだ。

芳川から借りた携帯だったので、もちろん携帯の機能のアドレス帳に目的の人物の電話番号はなかったが、とりあえず問題ない。既にその電話番号は第一位の脳内に収められている。

「誰に電話するの？」

訝いぶかしげに尋ねる文頼の言葉をとりあえず放置しておいて、携帯電話に番号を入力していく。

全て入力し終わると、彼はそれを耳にあて、呼び出し中の音楽が鳴っている暇な時間を利用して、文頼にこう告げた。

「頼りにならねエ仲間ってヤツだよ、だがクソ野郎を探し出す分には十分すぎる仲間だ」

数回呼び出し音が鳴った後、その人物はいつものうざったい言葉と共に、頼りにならない仲間が電話に出た。

既にやることは決まっている。

その過程で自分の手を汚すようなことになってしまったとしても、

彼の意志が揺らぐことは絶対はない。

雨降る街の中央で（4）（後書き）

すみません、遅れてしまいました。本当に申し訳ありません！
正直忘れていたので言い訳もできないです・・・w

次回：じゃん語

在庫枯渇まであと2・・・w

雨降る街の中央で（5）

9月21日の昼下がりに。

『よみかわあいは黄泉川愛穂』は警備員アンチスキルの詰め所で優雅に午後の休憩時間を満喫していた。

といつても今日は雨が降っているせい、特に事件が起きることもなく、第七学区は至って平和なため、実質出勤はしているがほぼ休みのようなものという状態になっている。

簡単に言ってみれば、やることなく暇なのである。

とはいつても他の警備員アンチスキル達は何やら書類をまとめたり、PCと向かいあつて何か作業をしているパターンが多いため、黄泉川の場合にはごくまれなパターンなのかもしれない。

そんな黄泉川は、自分が座っているイスをギー、と唸らせながら、大きくのびをすると、

「あー、暇」

「そんなこと言っている暇があるのなら溜まってる始末書でも片付けたらどうですか？」

と、横合いから声を掛けてきたのは彼女の同僚である警備員アンチスキルの女性だ。歳は大体黄泉川と同じくらい。対し、胸が極端に小さく（専用の服を着用した結果胸が圧迫されただけで本来はもう少しあるのかもしれない）、髪も肩のあたりでばっさり切り揃えられている。いわゆるおかつぱだ。彼女とは完全に同期であり、別に階級が違ふということもないのだが、何故か敬語で接してきているのだが、どうやらそれはそういう仕様らしい。

そんな彼女をちらりと横目で見ながら、

「あー、パスパス。あんなもん書いたところで意味ないじゃんよ。大体大量に文字書いてやったところで目も通さずそのままゴミ箱行き。あれを目の前でやられると流石に書く気も失せるってもんじゃんよ」

「そ、それで許してもらえらるって・・・もしかして『上』ってあなたのこと見て楽しんでるだけなんじゃ・・・？」

「本当にその通りならやりたいほうだいできるからいいけど・・・ま、でもどの道『形式』だけでも始末書提出させられるハメになるなら変わらないじゃん」

言いつつ、黄泉川は自分のデスクの上に積み重ねられている紙束から一枚の紙を取り出して、

「いつそ白紙で提出してもバレないかな？」

「ダメです。ちゃんと規則である最低30行は書いてください。文字を大きくして行数を稼ぐやり方も禁止です」

「こ、この私がそんなガキんちよみたいなことをやるわけないじゃん！ こう見えても教師だということを忘れないでほしいじゃんよ」

「忘れるわけありませんよ、アンチスキル警備員に所属してる大半の人間が教師なんですから。むしろここに教師じゃない人がいたら『教師じゃないならお前は何なんだ』となって即刻取り調べを開始できるレベルです」

「ここってそういう場所だった・・・？」
自分がいる場所の認識を改めた黄泉川はげんなりとした調子でツッコみを入れると、そのままデスクに向かい合って始末書の処分を開始する。

が、正直黄泉川はこういう感想文タイプのものは苦手だ。

世の中には書き始めれば後はすらすら書けるという人もいるが、最初は書けるのに途中で書けないという人もいる。が、黄泉川の場合そのどちらにもあてはまってしまうのだ。

適当にシャープペンを手に持って唸りながら内容を考える黄泉川だが、やはり内容は思い浮かばない。

仕方ない、ということシャープペンを始末書につけたところで、「前の始末書の内容と同じにするというのも禁止です」

というマジメ系女性同僚の口から鬼の一言が告げられ、重たい空

気にのしかかられた黄泉川はそのままシャープペンに力を入れてしまい、ポキリという音を立ててシャープペンの芯が折れる。

どうやら凶星だったらしい。ギロリと横目でにらむ委員長系の同僚に苦笑いを返しながらカチカチと新しい芯を出しながら始末書の内容を考える黄泉川。

と、そこで彼女の視界の中にあるものが映った。

それは先程ある知り合いと連絡を取った後、机の上に放置したままだった自分の携帯だった。

黄泉川はとりあえずそこで始末書の内容を考えるのをやめて左手で携帯を手に取ると、手の中でそれを弄ぶ。

と、その様子を隣で見っていた委員長系の同僚は、

「・・・携帯を弄りながらにやにやするなんてなんか気持ち悪いですね、彼氏でもできましたか？」

いや、と黄泉川は最初に断りを入れて、

「子供^{ガキ}だよ、知り合いが勝手に持ち込んだ厄介な子だ」

まるで皮肉のような言葉だった。だが、それにしても声質が極めて優しい。

そのことから同僚の女性はきつとここでいう『子供^{ガキ}』がどれほど厄介なものかを理解していないのだろう。

「最初は本当に厄介だった。反抗的で言うことは聞かないし、なにより生意気で悲観的だ」

だが、黄泉川は構わず続ける。

まるで、自分の子供のことを語るかのよう。

「でもそんなヤツがさつき急に私を頼ってきたんだ。今まで人を頼るなんて方法をとったこともなく、なんでもかんでも自分一人で解決しようとしてたヤツが必死になって私を頼ってきた」

「・・・」

「私はそれが素直に嬉しかった。頼られたことが嬉しかったわけじゃない。ただアイツが頼ることを覚えてくれたこと、そして他人に頼ってでも何かを成し遂げるために努力しようとしてくれたこと

がなにより嬉しいんだ。本当にくだらない状況からどんなに無様な方法でもいいから這い上がるうとしてくれたことが本当にうれしかった」

同僚の女性はただひたすら黙っている。おそらく、長年の付き合いなのだろう。今は自分が口を出すべきではないと判断し、そのために彼女は黄泉川の話に耳を傾けている。

それがわかってから、黄泉川は続ける。

「まあそれでもアイツはまだまだヒヨツ子だから私がフォローしてあげないとダメダメっぽいじゃん？ だからまあ協力要請が来たら強制的にでもここにいる全員に出撃命令出すから覚悟しておくよーに！」

という黄泉川の声聞いていた周囲の警備員から『えー』という抗議の声が殺到したが、どうやら彼らもまんざらではないらしい。

黄泉川と彼らは違う。違っている部分などいちいち例を挙げなくてもいくらでもある。

だが、それでも黄泉川と彼らの志だけは同じだ。

なぜなら、彼らの目的はこの街に住む子供を守ること。給料をもらってはいるが、ほとんどボランティア精神でやっている彼らにとって、子供を救うことは絶対だ。それがたとえどんなに小さい事件だったとしても、彼らは面倒臭がることなくきちんと仕事をやり遂げてみせるだろう。

しかし、そんな中で一人ため息をついたのは、黄泉川の隣に座る委員長系の同僚だ。

彼女は本当に残念そうに落胆しながら、
「いつもその熱意をもって仕事をしてくれれば随分と楽になるんですけどね」

「いやいや、私はいつも熱意をもって仕事してるじゃん？」

という間抜けな黄泉川な声を聞き、ため息をつけてやれやれと首を横に振る委員長系の同僚。

と、そこで、

ピーッ！ という甲高い音がオフィスのような室内に響き渡った。何事かと思いつつも既に室内にいる全員は出撃準備を的確に始めている。その光景は『プロ』という言葉を連想させるが、違う。

たとえばどんなに小さな出来事でも解決するのが彼らの仕事だ。『どうせ小さい事件だろ』と適当に考えて準備を始めて後で『一分一秒でも惜しい事件です』という内容を聞いて絶望するよりは、最初から準備を整えてどんな事件にでも全力で取り組む方がいい。

つまり、これは彼らにとつての『日常』なのだ。

やがて、室内の全員の出撃準備が終わった頃にオフィスの入り口のドアを勢いよく開いて一人の警備員アンチスキルの男が現れた。あまり見ない顔だったことから、その男が他の部署の者だということはすぐに理解できたが、ひとまずそのことについて質問するようなことはしない。

男は言う。

「だ、第七学区の一角にて能力者同士がガチでやりあってる！」
男の声は相当焦っていた。よほどの事件なのだろうか、と黄泉川は適当に予想すると、男に近づいて、

「そんなの日常茶飯事じゃん。そしてそれを止めるのが私らの仕事、そんなに焦る必要はないじゃんよ」

「そ、それが・・・」

相当急いで来たのか、男は息を切らせている。

だが、それも気にせず、男は息を荒げながら言う。

「並の能力者同士の戦闘じゃない、少なくとも一大能力者（レベル4）以上の戦闘だ！ 他の警備員アンチスキルの部隊や風紀委員ジャッジメントも応戦してるがまるで歯が立たねえ、だから俺がこうして救援要請をするために来たんだ！！」

その言葉に、室内にいた全員が顔を見合わせた。

そして、次の瞬間には動きだしていた。

唯一動いてなかったのは黄泉川と救援要請に来た男ぐらいだろう。詰め所にいた人間全員が室内から飛び出した後、数秒してから黄

泉川は動いた。

彼女は一抹の不安を抱えていた。単純に言えば、かなり嫌な予感がしていた。

「ど、どうするんだよ。まともに立ち向かってどうにかできる相手じゃなかったぞ」

男は息を定期的に絶やしながら呟く。

おそらく新人なのだろう。整った端正な顔に、若さが滲みでいるかのようなつやつやの肌。男にしておくにはもったいないほどのものだったが、黄泉川は気にしない。

そんな男に、黄泉川は唇の端を少し歪ませながら、こう答えた。

「何であろうと止める。それが私達の仕事じゃん？ 敵わないから諦める程度じゃ警備員アンチスキルなんてとてもやっていけないじゃんよ。いか、私達は絶対に子供を助ける。だからといって敵を殺していいわけじゃないし被害に遭っている大人を助けないわけでもない」

黄泉川はそこでピタリと足を止めると、体を少しだけ後ろに向けて、

「最大の目標は『犠牲者ゼロ』。いつの時代も、治安維持部隊の目標は変わらないもんじゃんよ」

それだけ言い残して、黄泉川は走り出す。

嫌な予感は、どんどん膨らんで行く一方だった。

雨降る街の中央で(5) (後書き)

あぶないWWWまた更新するの忘れそうになっていたWWW
そして一向に上がる事のないモチベ・・・W

次回：バトルパート

在庫切れるまであと1・・・W

雨降る街の中央で（6）

『目標は第七学区の第三大通りを高速で移動中、どんなものなのかはイマイチよくわからないけどこのスピードは人間技じゃない、多分何かの能力を使用していると考えるべきだと思っ』

電子的な声アクセラレータが一方通行の耳に直に伝わってくる。

あれから約30分後、9月21日午後4時58分。

一方通行は一人で第七学区を走り回っていた。その隣に文頼の姿はない。当然だろう、彼は今、彼女が付いて来ることのできない空中にいる。その点から、『走り回っていた』という表現は間違っているのかもしれないが、彼にとってはこんな人間離れた技でさえ『走り回る』に含まれてしまう。

ただ宙に浮いているわけではない、ピンボールの玉のように、高層ビルの壁を蹴り、そしてまた向かい側のビルの壁を蹴るという行為を繰り返して、『走り回っている』に過ぎない。

だが、その速度は異常だ。ただ脚力だけで飛んでいるのとはワケが違う。

つまりはベクトル。

彼の能力が、ビルの壁を蹴って高速で移動するという尋常ではない行為を、いともたやすく可能にしまっている。

そんな彼の右手には、いつもの杖の代わりに携帯電話が握られていた。理由は単純、能力使用时には杖は必要ないし、男を探し出すための情報交換が必要になっていたからだ。

もちろん携帯電話のディスプレイには『通話中』の文字。相手の名前は表示されていないが、電話の向こう側にいる人物はもちろん文頼だ。

このような状況になったのには理由がある。

およそ20分前。

文頼はたった一つの手掛かりを提示した。

それは謎の男の存在。だが、彼女はその男の特徴をよく覚えていないため、その人物を特定するためには彼女を直接男の前に突き出して、顔と見た目を見てもらう必要があった。

しかし、これには根本的すぎる問題がある。それを簡単に説明してみると、学園都市には男など無数に存在している。その中から一人一人をかき集めて犯人を特定してもらうなど不可能だ。

と、最初は思われていたのだが、一つだけ方法があったのだ。

まず一つ目は、街の人々をかき集めずに街全体を見渡す方法。これについては、学園都市に設置されているカメラから街の人々を観察できればそれでクリアーだ。そして、それができる知り合いを彼は知っている。

『情報屋^{メディア}』の青年。つい数時間ほど前に尋ねたあの男ならこの街の監視カメラを自由に操作することができる。

そして二つ目、そんな膨大な数の中から個人を特定する方法。これはほぼごり押しで解決することができた。

原理は単純。ただ、画面いっぱいたくさんの監視カメラの映像を表示し、その全体を見回すことによつて、犯人を特定する。

一見無理なように思える荒技だが、文頼逢恋はたった7人しかない学園都市の超能力者を凌ぐ脳を持つ絶対能力者なのだ。

その文頼にかかれれば、たくさんの情報を一気に脳内に取り込み、その中からある情報だけを抜き出すなどたやすいことなのだ。

というわけで、既に問題の少女はあの胡散臭い情報屋^{メディア}の青年の下へと送り込んでいる。そしておそらくそこから電話を借りて連絡しているのだろう。

だが、特定できても彼女の能力では高速で移動することができない。戦闘はある程度できるが、それでも戦力としてはあまり使い物にはなってくれない。よつて、ここは第一位の出番というわけだ。

ガン、ガン！！ という音を立てながら、第一位が宙を移動する。

「ああ、今確認した」

道はいつしか大きな十字路に差し掛かり、そこで第一位は電話の

向こう側へと声を送りながら、大きく進行方向を変える。

その赤い瞳が、ターゲットを捉えた。

一人の男、おそらくこのタイムリープに関わっている人物。しかし、その男は何故か監視カメラで人物を特定し、一方通行が行動を開始した直後に何故か高速での逃亡を開始した。

こちらの行動が読まれたのか、それとも別の要因があるのか。

いずれにせよ、目標は発見した。ここから先は『狩り』の時間だ。ゴツ！ という音と共に、第一位の体が猛烈なスピードで一直線に男へと飛ぶ。

おそらく『飛び蹴り』というのが正確なのだろう。だが、その威力は並のものではない。斜め45度の角度で、まるで大きな杭のような彼の足が男に命中してしまえばおそらく彼の命はないだろう。

だが、一方通行は男を殺す気がない。事情を聞き出すためには、あくまで人質にとる必要がある。

うまく威力とベクトルを調節し、死なない程度の威力で彼の右足が容赦なく男へと襲いかかる。

しかし、男が振り向くことはない。気付いているのかいないのか、彼は第一位など目もくれず、そのまま一方通行の走る方向と同じ方向に高速で前進し続けている。

ドオン！！ という音が雨の降る学園都市に響き渡る。

まるで砲弾だった。

第一位の右足は、そのままのスピードで地面へと激突し、そこを中心として半径50cmくらいのコンクリートの地面が円の形を描きながら大きくへこむ。

つまり、男には命中していなかった。

彼の右足が命中する前に、男は咄嗟に左方向に少しズレて回避していたのだ。

「クソが・・・ッ！！」

そして、男が止まることはない。その光景に見向きもせず、彼はただ前方向へと高速で移動し続けている。体が少し浮いているこ

とから、何かの能力を使っていることがわかって。

しかし、それだけで終わる第一位ではない。

能力者だろうが何だろうが、第一位である彼にとっては相手は雑魚ではない。

どうい風にもベクトルを操ったのか、彼の体が右足を起点としてまるでレバーのように傾き、そして前方へと発射される。

ドンツ！ という轟音が周囲へ散った。

大通りにいた人々が短い悲鳴を上げるが、気にしている場合ではない。

もはや事態は一分一秒を争う。

相手のスピードもなかなかのものだったが、単純なスピードではこちらの方が速い。

やがて警備員や風紀委員の部隊が駆けつけて来たが、彼はそれを気にせず男へと一直線に突撃する。

人間と人間の高速の戦い。

その光景は一瞬カーチェイスを連想させるが、そんなものの比ではなかった。

もはや災害。

ありえないほどのスピードで動く二人は、誘導ミサイルより正確に、そして車よりの確に動き回り、大通りのコンクリートを抉りながら一度、そこから少し間を空けてまたもう一度、距離を詰め、激突し、攻撃を防がれて距離を大きく離し、それをまた詰めて激突を繰り返しながら気付けば数キロメートルの距離を移動している。

その間およそ2分。

(なんだこいつ・・・?)

そんな中、一方通行は一つの疑問を抱いていた。

何かがおかしい、というレベルではなく、確実に異変が起こっているというレベルでの疑問だった。

つまり、

(どオしてこいつは俺の動きについてこれる・・・?)

それは第一位ならではの疑問だったのかもしれない。

そう、彼は学園都市第一位の『最強』の称号を持つ能力者だ。

簡単に言ってみればそれは世界一強い人間ということを意味しており、真つ向から立ち向かって彼に勝てる者などただ一人の少年を除けば世界中に存在していないはずだ。

だが、目の前の男はそんな第一位の動きに俊敏に対応し、彼の攻撃を簡単に凌いでさらに逃亡劇を繰り広げている。

普通ならありえないはずの光景だった。

彼を除く学園都市の超能力者ならあるいは可能かもしれないが、この男はおそらく違う。

ならば、学園都市第一位と渡り合っているこの男は何者なのだろうか。

『上に飛んで！！』

と、考え事をしてしていると携帯の向こう側から叫び声が飛んできた。咄嗟に前に進む勢いを緩めないまま上に飛ぶと、直後に今まで一方通行がいた場所を鉛の弾が通過していく。

それが鉛の弾だと判断できた理由は簡単だった。音が違う。

暴徒鎮圧用のゴム弾を放つ銃の間抜けな音とは違い、常人の胆を一瞬で冷やしてしまうような、残酷で甲高い音。

「実弾だと？ 撃ってきてるのは警備員アンチスキルの連中じゃねエってことか？」

適当に呟きつつ、地面に足がついたと同時に前へ向かって弾丸のごとく加速する。

彼にとって実弾など当たっても無意味だ。能力使用時の彼は、全身に『反射』を適用させているため、実弾は彼に当たることなくそのまま反射されて銃口へと戻っていくはずなのだが、それでも彼が避けたのには理由がある。

一般人は巻き込まない。

これは彼自身の中で決めた絶対のルールだ。

敵ならば容赦なく殺す。だがそれ以外の真つ当に生きている人間に手を出してはいけない。そんなルールが、今この瞬間適用されてしまっている。

皮肉な話だった。

真つ当な人間を守るために戦っているのに、真つ当な人間に邪魔をされる。

もしかしたら今邪魔をしている人間は真つ当な人間ではないのかもしれない。もしかしたら学園都市の『闇』で、警備員アンチスキルなどの治安維持部隊とは全く関係ないのかもしれない。

だが、勝手に『闇』と判断して銃弾を反射し、その結果もしその人間が死んでしまい、もしそれが『闇』とは全く関係なく、この街を守るうとして戦った人間だったとしたら。

そう考えると反射して邪魔者を排除しつつ敵に向かって突き進むことはできない。

しかし、それで難易度がかなり跳ね上がったのも事実だ。

(クソが・・・ッ!)

弾が飛んでくる。だが、それが暴徒鎮圧用のゴム弾なのか、本当に殺人ができる実弾なのかの見分けがつかない。それほどまでに、多くの弾が飛び交っている。

よって、どちらの弾丸も回避する以外に方法はない。今まで反射で跳ね返していた、殺傷力ゼロの暴徒鎮圧用ゴム弾ですら今の彼にとっては恐怖の対象となってしまうている。

男がどうやってこの数の弾をいなしているのか、もはや考えている余裕はなかった。

集中力を最大にまで活用しつつ、目の前の男を追う。

『だ、大丈夫!?』

そこで電話の向こう側から再度慌てたような声が聞こえてきた。

「ああ、大丈夫だ。厄介なことに変わりはないねエがな」

避けつつも、なんとか返事をする。だが、その声にはやはり焦りが混じっていた。

思った以上に面倒臭い。銃弾に当たってもケガをすることはないが、反射が適用されている今、銃弾に当たればもしかしたら一般人かもしれない人間が死ぬかもしれない。かといって反射を切れば自分が危ない。

どちらにしても、銃弾は避けながら進むしかない。だが、アンチスキル警備員の暴徒鎮圧用のゴム弾と銃弾が無数に飛び交っているせいで、どれが人を殺せる弾丸なのか見分けがつかない。さらに弾丸を避けながら前に進むとなると、若干スピードが落ちてくる。

いつそ弾丸を無視して追跡するかと考えるが、やはりダメだ。それによって自分が傷つくことはないが、他人が傷ついてしまう。

「……、」
そこでふと彼はあることを思った。

「オイ、オマエさっきどオして俺に避けると指示してきた？ 俺の能力のことはオマエも知ってるハズだろオが」

そう、彼女は一方通行のルールを知らない。だが、能力は知っている。銃弾なんか避ける必要がないということを知っている。

おそらく複数のカメラの中から一方通行を銃で狙っている人物を発見したのだと思うが、それでも気に留める必要はなかったハズだ。

だが、彼女は『避ける』と指示した。

（俺の能力が適用された上でどオなるかパターンを予測した……？）

それは彼女の脳なら不可能なことではないだろう。ということはおそらくあの時反射が適用されていたら撃った人物は死亡していたのかもしれない。

しかし、その予想はあっさりと外れた。

「えっと、その、キミに当たったら危ないかなと思ってつい……」

「アホか」

思わず即答でツッコみを入れる。

「あ、アホって……仮にも心配して言ってあげたのにそれはひ

「どいんじゃないのかなあ!？」

「俺の心配をする必要はねエつつつてんだ、そんなことをしてる暇があるならやってほしいことがある」

むう、と少しすねたような声を漏らす文頼だが、どうやら一方通行に案があることを察したらしく、電話の向こう側で黙り込んでしまふ。

その様子を読みとった第一位は、弾丸の雨を避けつつも大きく酸素を取り込むと、

「いいか、今からオマエが俺に指示を出せ。どオすれば弾丸の雨を避けながらより素早くヤツに近付けるか移動パターンを演算しろ」

「え、え？ つまりどういうこと？」

「そつちの監視カメラで銃ぶつ放してるヤツの動きから弾丸の軌道を全て演算してどオ回避すればより効率良く前に進めるかの演算をしる。絶対能力者のオマエなら可能なはずだ。指示は適当でいい、俺にわかるように単純かつ的確な指示を送れ」

「い、言われてもそれって相当難しいんじゃない・・・」

「オマエならできる。自信がねエなら俺が今から反射を切つてオマエの指示通りに動き回る。もし指示がねエなら真つ直ぐ進んで運が悪けりゃゴム弾の方じゃなくて鉛の弾丸を食らつて即死するかもな」

「それはダメだつて！ お願いだから反射は切らないで！」

必死に訴えてくる文頼の声を聞いて第一位は弾丸の雨を回避しつつもにやりと笑った。

携帯電話を握る手に無意識に力が入る。

反射は切らない。今の優先順位は『闇』の可能性がある人間より文頼逢恋という少女の方が上だからだ。

だが、弾丸は全て避ける。我ながらバカなことをしていると一方通行は思っていた。人間を殺さないというのは自分のエゴだ。そして今はそんなくだらないエゴより優先すべきことがあるはずだ。

なのに、そのエゴを無理にでも貫き通したい。

バカみたいだな、と思った。

一万人以上の人間を殺害しておきながら、誰一人死なない幸せな未来を手に入れようとしているなんて、バカバカしいと思った。

こんなことを意味がないのかもしれない。結果、最優先していた少女の未来が失われてしまうのかもしれない。

それでも、一方通行は希望があると信じていた。

だからこそ、言葉を紡いだ。

「いいか、俺はオマエを信用してる」

それはありえない言葉だった。

しかし、それは無意識に発せられた言葉ではなかった。

電話の向こう側にいる人物から返事はない。おそろく驚きすぎて絶句しているのだろう。当然といえば当然のことだが、今は彼女が解凍されるのを待っている時間などない。

よって一方通行は弾丸の雨を必死に避けつつ、

「オイ、聞いてンのか？」

「へ？ あゝ、えっと・・・うん、大丈夫・・・だと思う・・・」

「ならいい、とにかく時間がねエ、さっさと指示を出せ」

「で、でも私あんまり自信ないし・・・キミがどうして反射を使って特攻せずにあえてかわしているのかわかっているから失敗は許されないってことはわかっている。だから私は」

「あきらめるのは許さねエ」

電話越しで、ほぼ強引に言葉を遮る。

「絶対に勝つ、こんな理不尽な状況をどオにもできねエまま敗北するなんて絶対に許さねエ。この際俺のプライドなんてどオでもいい、俺はお前を信じる。だからお前も俺を信じる」

ただでさえ集中力を使う作業中に通話を続けるのは、かなりの精神力を消費する行為のはずだった。それでも、彼が会話を繋げようとしたのは、多少の無茶をしても絶対に勝つ必要があったからだ。

それに応じるような、落ち着いた沈黙があった。

電話の向こう側から吐息のような音が聞こえてきた。おそらく、深呼吸をしたのだろう。それを聞いて、一方通行は唇の端を少しだけ歪める。直後に返事があった。

「タイミングを合わせるために五秒後に指示を出す、それまでは自分の意志で動いて」

意を決した清々しい声だった。

そんな声を聞いて一方通行は直感的に確信した。

五秒後からは、こちらが逆転する番だと。

9月21日午後5時6分43秒。

彼らの反撃が、本格的に開始された。

雨降る街の中央で（6）（後書き）

今回で在庫切れました・・・w

ただモチベが回復しつつあるので3日後までには完成してるかもです。

つまるところ今回は未定です、何かあれば報告しますので・・・すみません。

次回：つなぎ

ここから先はずっとバトルシーンが続きます。

・・・終章以外。

雨降る街の中央で（7）（前書き）

大変長らくお待たせしてしまって申し訳ありません。

謝罪やら言い訳やらは活動報告の方に綴ってありますので、どうかご容赦を。

この更新で今年最後の更新となります。

次回はいつ更新するか未定です。なるべく早く更新する予定ですので、しばらくお待ちください。

雨降る街の中央で（7）

おかしい。何かがおかしい。

全身に重い装備を装着している男、『やなごうじ屋成剛太』は漠然とそんなことを思っていた。

現在、彼は警備員アンチスキルの一部隊が構成しているフォーメーションの中から、マシンガンのような銃で大量の暴徒鎮圧用のゴム弾を放っている最中だった。

狙うべき標的は二人。

一人は不自然な格好で地面から1mほど浮いている男で、先程から地面に足をつけていない。ずっと宙に浮いたまま移動を続けている妙な男で、書庫バンクで検索してみた結果、詳細不明と出た謎の人物。

もう一人は、地面を蹴りながらも高速で前へ移動している白い影。その挙動から男を追っている様子が窺うかがえるが、車道のと真ん中で走られたら邪魔で仕方ないということで、こちらも鎮圧対象になっている。こちらは書庫バンクで調べてみた結果、学園都市第一位の大物らしいという結果が導き出されたが、それでも今は鎮圧対象の一人に過ぎない。

よって、鎮圧のために車に乗って移動しながらゴム弾を発射しているわけだが、やはり何かがおかしい。

鎮圧目標である二人の人物の内、先行している謎の男の動きは至ってシンプルなものだった。

ただ、前に直進するのみ。特に飛んでくる弾丸を気にしているようには見えず、かといって弾丸が命中しているようにも見えない。

何か謎の能力によって自身を護っているらしく、立ちほだかる部隊がいればことごとく蹴散らして、ただ邁進まいしんしている。

一方、学園都市一位の怪物は、挙動がおかしい。

彼の能力は、『ベクトル操作』というものらしく、普段は反射を適用していて、攻撃すれば自動で攻撃は全て反射され、攻撃を放つ

た者が逆にダメージを負うというまさに無敵の能力を使用する少年のはずだ。

だが、先程から彼の動きは乱雑だった。

まるで弾丸がどこから来ているのかを読んでいるかのように、あ
る時は右へ、またある時は左へ、時には空中に大きく跳躍したりし
ながらも、ものすごいスピードで前進している。

明らかに妙な動きだった。

もし、彼が今も反射を適用しているのであれば、弾丸など気にせ
ず前進すればいいはずだ。その方がスピードが出るはずだし、邪魔
者を気にする必要などなくなるはずだ。

しかし、彼はそれをしない。

あえて弾丸の雨をかわしつつ、しかしスピードを落とさないよう
に前進している。

屋成剛太が不審に思ったのは、それが一つ目。

もう一つは、第一位に動きがただ自分達が放つ弾丸のみを避けよ
うとしているわけではないということだ。

何故彼が弾丸を避ける必要があるのかは未だにわからないが、少
なくとも屋成剛太は目に見えている者が弾丸を放つ瞬間は全て確認
している。背後から撃ってくる弾丸は流石に見えないが、それでも
やはりおかしい。

彼は時々、横から飛んで来る弾丸を避けるかのように、自身の体
を折り曲げることがあるのだ。

明らかにおかしい挙動だった。

アンチスキル

なぜなら、確かにたまに警備員の部隊がたまに歩道に配置されて
いて、そこを通り過ぎようとした時に弾丸を放つことはあるが、そ
の部隊が配置されていない時に、そういう風に動くことがあったか
らだ。

別の部隊がそこに配置されているのかと考えた屋成だったが、そ
んな情報は一切入っていない。

ただ単に勘で避けているのかとも考えたが、それにしても自分達

が放つ弾はかなり正確に回避されすぎている。それだけの回避ができていないのに、勘だけで回避しているとはとても思えない。

やはり、何かがおかしいのだと考えるのが妥当だろう。

車の窓から乗り出していた身を車の中へと引っ込め、リロードついでに車を運転している相方の男の表情を窺ってみると、やはり彼も同じような疑問を持っているのか、どこか訝しげな顔をしている。それを見た屋成は、少し重たい銃に、大量の弾丸を詰め込みながら、

「なあ、お前はどう思う？」

「どうって・・・やっぱりあいつの変な動きのことか？」

やっぱり、ということとは、彼も考えていることは同じらしい。

「ああ、知つての通りあの少年の能力は『ベクトル操作』。それを使い、弾を反射すれば目的が何であれ、障害物をわざわざ回避する必要はない。むしろ弾を全て跳ね返して障害物を駆除することもできる。だがあの少年はそれをしない。まるで」

「そこで屋成は一度息を呑んで、

「まるで、俺達を傷つけないように立ち回っているように見えな
いか？」

その言葉に、相方の運転手は何も言うことができなかった。

言葉を失った代わりに、リロードを終えた屋成が、

「俺達の任務は暴徒を止め、学生及び一般人を守ることだ。そして今、止めるべき暴徒は二人いる。だがその二人の内一人は本当に暴徒と呼べるような存在なのか？ 少なくとも、俺はとてもそうとは思えない」

「その意見には同意せざるを得ないな。例えるならそうだな、実は心優しい怪物が、人間を襲う別の怪物から人間を守るために戦い、結果その見た目のせいで人間から攻撃されている。そんな子供の頃に見た特撮ものの番組と同じような展開が今ここで行われているようにしか思えないな」

「ああ、ガキの頃そついう番組よく見てたな。決まって正義が勝

つわけだが・・・」

言い淀む屋成の代わりに相方が、

「状況はあまり芳しく^{かんば}ないみたいだな」

仮に、今第一位の追っている謎の男が人間を襲う悪い怪獣だったとする。そして、第一位が心優しい怪獣だったとすると、決まって勝つのは心優しい方の怪獣だ。

だが、今この場ではそのご都合主義は通用しない。
守るべき人々から銃口を向けられている。

本人も気づいていないかもしれないが、それは彼の体力だけでなく、精神力すらも確実に削っていることだろう。

「で、マジメな話をするがこれからどうする？ 任務に従い続けるか、それとも報告して攻撃をやめるか？」

相方の運転手が、前方を見つつ言う。

耳を傾けはするものの、屋成も相方と同じように視線を前に向けたまま、

「俺は確実な情報が手に入るまではあの少年に銃を向けるつもりはない。だが、ここからはるか前方を走っているあの男に銃弾を命中させられるとも思わない。だとすると取るべき道は報告するしかないと思うが、どうせ上はこんな不確定な情報なんて受け入れないだろうよ」

「こりゃ八方塞がりか？ いっそ仲間に連絡して言うこと聞かなかったヤツだけ撃つて強引にあのガキへの攻撃を中止させるって手もないことはないぞ」

「仲間を撃つてどうする。あと、問題はまだもう一つある。とりあえず次通りすぎる右側の路地裏を見てみる」

言われて、相方はハンドルを握りながら次の路地裏を見ようとす。当然、いざという時のために顔は前に向けたまま、眼球だけを動かして横目で見ている状態だ。

つられるように屋成も右側の通路に視線を向ける。

そして、数秒後に車がその路地裏とすれ違った時、

二人は確かに見た。路地裏の中に、光る何かがあったのだ。屋成の予想通りだった。

光沢の具合から察するに、おそらく金属でできた何か。それが何かと言われて真っ先に連想できるものが、

「銃、か・・・？」

相方の運転手の言葉に、屋成は静かに頷く。

「あんなところに警備員アンチスキルの人間が配置されているなんてことは聞いていない。それにあんなコソコソとしたやり方は警備員おれたちのやり方じゃない。となれば・・・」

「別の何かが動いてるってことか？」

「だろうな、あの二人の内どちらかの味方が、あるいは・・・」
学園都市。そんな単語が、彼の頭の中に浮かび上がる。

ありえないことではないだろう。実際、屋成はこの仕事を長いことやっていて、この街に何か不可解な部分があることをその身で感じるものが何度かあった。

それと同じような雰囲気、今この場に漂っているのだ。

「そうなってくるとこりゃただの能力者同士のケンカってレベルじゃなくなってくるな。軽い戦争レベルだ」

同じように考えていたのか、相方がそんなことを口にする。

「だな、しかしこの状況でヘタに動くわけにはいかない」

「となるとどうするか・・・」

まさに打つ手なし。

どうしたものかと沈黙の中、二人は思考を張りめぐらせてみるが、どう動いても失敗するのは明らかだ。

と、そんな時だった。

突然車内に電子的な音が響き渡った。

それがカーナビのような通信機から発せられたものだ二人はすぐに悟ったが、応答することはできない。

なぜなら、応答する前に通信機から言葉が放たれたからだ。

「今すぐ攻撃を中止するじゃん！ 全部隊B地点に集合、作戦内

容を説明した後一気に攻撃を開始する！ 私みたいなたつ端の言うことを信じてないならそれでいい。ガキの命を守りたいヤツだけ集まれ！！ 責任は全てこの私が請け負ってやるじゃんよ！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4837u/>

とある魔術の禁書目録PS

2011年12月29日17時47分発行